

---

# 美少女戦士セーラームーン Memories

来夏竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美少女戦士セーラーMoon Memories

### 【Nコード】

N8955M

### 【作者名】

来夏竜

### 【あらすじ】

時期はセーラーズから半年。

ギヤラクシアとの戦いが終息し、平和な日々を送っていたセーラー戦士達。そんな中、セーラー・ムーンこと月野うさぎは、胸騒ぎを覚えていた。不安が募る中の皆既月食。月の光が消える夜、邪悪な王国がよみがえる?!ちびうさを守るため、交通事故にあっつしまつうさぎ。セーラー・ムーンがいない今、S戦士達は地球を守れるか?!

【この作品はセーラーモーンの、ついでに言えばシリアス多めの二次創作です。二次創作の苦手な方、オリジナルキャラや展開、キャラ崩壊などが苦手な方はお控えください。基本は漫画ではなく、アニメがベースとなっています】

## 第一話 月の光 消えるとき、闇の王国 再び！

金曜日、最後の授業。連休に入る前の授業だという事もあってか、生徒達もよけい授業には身が入らない。それが苦手意識を持つ生徒が多い物理の授業なら、なおさらだ。天之川は最後の公式を黒板に書き終えると、パタンと教科書を閉じた。

「…と言うわけで、少し早いが今日はこれぐらいにしよう」  
天之川の言葉に、ほっとしたように生徒達は体をほぐす。そんな様子に天之川は苦笑しながらも続けた。

「そういえば今夜は皆既月食が見られるぞ。夜中の3時頃だから、興味のある者は観察してみるといい。まあ、夜遊びする者は嫌でも見る羽目になるかもしれないが……」  
笑みを浮かべながらそう言うと、教室は笑いに包まれた。

チャイムがなり、十番高校の前には帰途につく生徒達の姿で溢れていた。別れの挨拶が飛び交う中、いつものメンバーもそこにいた。亜美、美奈子、まこと、そしてうさぎ。揃っていつもどおり、喫茶クラウンに向う途中らしい。ふと亜美が思い出したように、口を開いた。

「みんな、聞いた？今夜、皆既月食が見られるんですって」

「聞いた、聞いた。天之川先生が言ってたね。夜中だったけ？」

「夜中の3時なんて普通、寝ているわよね」

美奈子の言葉に亜美はクスツと笑った。

「でもね、美奈子ちゃん。一昨年の皆既日食ほどじゃないけど、皆既月食も珍しいのよ？見る価値はあるわ」

四人はクラウンの自動ドアをくぐる。いつもの指定席にはレイ、アルテミス、ルナが座っていた。そして。

「ちびうさちゃん?!」

まこと、美奈子、そして亜美の声が重なった。うさぎも驚きの声を挙げる。

「ちびうさあ!何であんたがここにいるのよ?!」

本人は至って涼しげな表情で、ピョンと立ち上がると美奈子のところに行き、封筒を差し出した。

「美奈子ちゃん、はい!」

「えっ?何?」

「ママからの手紙」

レイ以外の視線が一斉に美奈子に集まる。レイはもう手紙の内容を知っているのか、興味なさそうにドリンクを口に運ぶ。

「え〜と、何々?」

『突然ですが、スモール・レディーを預かってください。よろしくお願ひします』

「それだけ?」

あまりにも簡潔で短い手紙に呆気にとられ、まことは思わず聞き返した。

「そうなのよ〜。それに見て?ネオ・クイーン・セレニティらしい手紙なのよ〜」

「本当?!漢字で書けるところは全て漢字で書いてあるわ。間違いが一つもない?!」

「それにこの前に比べて、かなり読みやすい字」

「二人共お…」

大げさに驚くまことと亜美に、うさぎは思わず苦笑する。

「ようやく勉強する気になったんじゃないの?うさぎも見習ったらどう?」

「あ〜またレイちゃん、イジワル言っ〜」

隣でじゃれ合うレイとうさぎは放っておき、亜美は首をかしげなが

ら、ちびうさに尋ねた。

「ちびうさちゃん、今度は何も聞いていないの？」

「うん…。突然こっちに来るように言われて…」

「わからないんじゃないか。しょうがないか。とにかく、またよろしく、ちびうさちゃん」

「よろしく、まこちゃん！」

そんな様子を見守っていたルナがため息がちに呟いた。

「また、賑やかになるわね」

「ルナ！」

うさぎとちびうさの声が重なり、ルナは小さくなる。

「じゃあさあ、じゃあさあ、歓迎パーティーをやるうよ。ついでにみんなで、月食を見るのは？」

「いいね、いいね。あたしは乗った！」

「場所はやつぱり…？」

レイが諦めがちに訊く。

「レイちゃんのところ…！」

目を輝かせながら答える美奈子に、諦め半分、苦笑半分でレイは返す。

「はいはい」

「亜美ちゃんも来るだろ？」

「ええ、もちろん」

「じゃあ、夕方6時、火川神社に集合！」

「もお美奈子ちゃん、勝手に仕切らないでよお」

張り切って取り仕切る美奈子に、レイは困ったように笑う。そんな盛り上がった場を、うさぎの一言が静ませた。

「あたしは…いいわ」

「うさぎちゃん？」

「うさぎ？」

みんなの心配そうな声が重なった。いつものうさぎなら、パーティーと聞いて美奈子と一緒に騒ぐのがお決まりのパターンなのだが……。そんなみんなの内心を代弁するかのように、アルテミスが訊く。「どうしたんだ？うさぎらしくないぞ？」

アルテミスの言葉に亜美も続く。

「大丈夫うさぎちゃん？顔色、悪いわよ？」

「みんな、ごめん！あたし…帰る」

うさぎは突然立ち上がると、鞆をつかみ、クラウンを飛び出していつてしまった。

「うさぎ！」

レイも慌てて立ち上がる。

「急にどうしたんだろう、うさぎちゃん」

「ねえルナ、何か知らないの？」

仲間たちに聞かれ、ルナは困ったような表情になる。

「それが……最近、ちゃんと寝れていないらしいのよ。いつも何かにうなされているみたいで……。けど、起きても何も覚えていないらしいの。それで、たまにあんな風になっちゃうんだけど……」

「何も話さない……か。一人で悩む必要なんてないのに」

レイはうさぎが出て行った自動ドアを寂しそうに見つめると、そう呟いた。

「見守るしかないか。そうだ、ちびうさちゃん。今夜出かける前に、もう一度うさぎちゃん誘ってみてくれないか？もしかしたら気が変わっているかもしれないからさ」

「うん、わかった」

夕刻、うさぎは自分の部屋の窓際に座っていた。お気に入りのうさぎのぬいぐるみを抱え込み、夕暮れに染まっていく窓外の景色をじっと見つめる。

「月の光が消える月食か…」

「こおらあ！一人で悩んでいるなんて、うさぎらしくないぞお！」

思いにふけっていたため、うさぎはちびうさが部屋に入ってきたのに気付かなかった。

「ちびうさー！」

驚いて振り向くと、ちびうさが心配そうな表情で立っていた。

「ねっ、だから一緒にレイちゃんの所にいこ？きつとまこちゃん、おいしい物いっぱい作ってきてくれるよ？」

自分より幼いちびうさに心配をかけている事が心苦しかった。きつと、ちびうさだけじゃない。みんなも心配している事だろう。でもうさぎにはどうする事も出来なかった。困ったようにうさぎは首を横に振る。

「ごめん、ちびうさ。一人で行って？あたし、ちょっと疲れているみたいだから。ちびうさ、ごめんね。あなたの歓迎パーティーなのに」

「ううん。でも、気分良くなったら、来てね？」

「わかった」

「じゃあ、行ってきますー！」

「行ってらっしゃい」

まこことがレイの部屋に入ると、ちびうさの声が飛んできた。

「まこちゃん、おそ〜い！」

実は約束の6時を40分ほど過ぎている。

「ごめん、ごめん。でも美味しいものいっぱい作ってきたからさ。

これで許して？」

そう言つと、テーブルに持ってきたタップを並べ、ふたを取っている。

「うわ〜。おいしそ〜」



「まこちゃん、さつすがあ〜」

美奈子とちびうさの感嘆の声があがる。

「ふふっ。ありがと。うさぎちゃんは…来なかったか。大丈夫なのかい、うさぎちゃん一人にして？」

不安そうな顔をするまことに亜美が答えた。

「ルナが傍にいるわ」

少し暗くなった場の雰囲気を変えるため、レイは元気よく言った。

「あんなおてんばは放っておいて、食べましよう？うさぎの事だから、明日になればきっと、いつも通りになっているわよ」

「それに今日はちびうさちゃんの歓迎パーティーですものね」

美奈子も明るくちびうさに微笑む。みんな、口ではそんな事言いながらも、うさぎの事を心配しているのだ。それでも自分を歓迎しようとしてくれる仲間達に、ちびうさは胸が一杯になった。そんなちびうさの内心を知ってか知らずか、まことはグラスを注ぎ、皆に渡していく。

「じゃあ、まずは乾杯って事で……」

まことは、確認するように一人一人と視線を交わす。レイ、亜美、美奈子はそれに対して笑顔で頷いた。

「ちびうさちゃん、おかえりなさい」

「……ただいま!」

うさぎは寝返りを打つと、目を開けた。部屋の中は暗い。枕元の目覚まし時計は午前3時を指している。うさぎはゆっくりと起き上がった。近くで眠るルナを起こさないように静かに起きたつもりだったが、彼女は眠たそうに頭をあげた。

「うさぎちゃん…?」

「ごめん、ルナ。起こしちゃった?」

ルナは立ち上がると、ピョンとうさぎのベッドに飛び乗った。

「どうしたの？」

「月の光が消えていくの」

月を見上げながら、うさぎはそう小さく呟いた。

「月食ね」

そう、月食だから当たり前の事。けれど月の光が消えるのを見ていて、あまり良い気分はしない。

「みんなも見ているのかな……」

「どうして行かなかったの？」

何も言わないうさぎに、ルナがそつと問いかけた。

「みんな心配しているわよ。何か悩んでいる事があるなら……」

「わかっている！でもあたしにも良くわからないのよ！」

「うさぎちゃん……」

驚くルナに、自分が思いがけず声を荒げてしまった事に気が付いた。気まずくなり、うさぎはベットから抜け出した。

「ごめん、ちよつと顔洗ってくる」

「あたし、どうしちゃったんだろう？」

タオルで濡れた顔を拭き、うさぎは鏡を見つめた。一瞬、何かが見えたような気がして頭を抑える。見える気がするのに、それが何なのかわからない。何かが聞こえるような気がするのに、それが何なのかわからない。掴めそうで、掴めない。

ただ、不安な気持ちだけが強くなっていく。

「まただ……。疲れているのかな？」

流れっぱなしにしていた蛇口を、ふと我に返り閉じる。タオルをたたみ、定位置に置くと、うさぎは洗面所を出て行った。もう少し長くそこにいれば気付けたかもしれない。

黒い影が鏡に映ったことに……。

「あつ、うさぎちゃん……」

次の日、うさぎがクラウンに行くと、いつもの指定席には仲間達  
がいた。

「みんな、ごめん。昨日はちょっと調子悪くて」

「大丈夫、うさぎちゃん？」

「大丈夫。大丈夫。あたしはこの通りピンピンしているわよ」

「何か悩んでいる事があるのなら、相談に乗るわよ？」

「ホント、なんでもないって」

心配そうに聞いてくる仲間達に、うさぎは困ったように、けれど嬉  
しそうに答えた。

「どうせ、お腹でも壊していたんじゃないの？」

「ひっど〜い」

「凶星でしょ？」

「レイちゃん！」

「見ひどい事を言われているようではあるが、これでもレイの心配  
の仕方なのだ。そんな事、うさぎにだってわかっている。」

「あれっ？ちびうさは一緒じゃないの？」

ふと、ちびうさの姿が見えない事に気付き、うさぎは仲間達に聞い  
た。そんな問いに美奈子が何気なく答える。

「朝、お開きにした後、帰ったけど？」

美奈子の答えに、うさぎの顔からは見る見るうちに、血の気が引い  
ていく。

「…うそ」

「うさぎっ？」

「…昨日からまだ帰ってきていない！」

まるで悲鳴のような声をあげると、うさぎはクラウンを飛び出して  
行ってしまった。

「うさぎちゃん？」

「あたし達も行こう！」

四人も慌ててうさぎの後を追う。外に出てみるが、うさぎの姿はす

で見当たらない。

「うさぎちゃん、どこに行ったのかしら？」

亜美の不安そうな声。

「うさぎの取り乱しようは、普通じゃなかったわ」

「ちびうさちゃんの通信機は？」

「だめ、つながらない」

「あたし達も手分けして、ちびうさちゃんを探しましょう」

四人は頷きあうと、別れて違う方向へと走っていく。

「ちびうさー！」

あたし、何しているんだろう？

「ちびうさー！」

どうして、こんなに取り乱しているんだろう？

「ちびうさー！」

でも不安な気持ちで押しつぶされそう。

うさぎは立ち止まり、手を膝につき肩で息をする。呼吸をある程度まで整え、うさぎはまた走り出した。

ちびうさ、どー！

気がつくと、大通りまで来ていた。

「うさぎー！」

道路の反対側を見ると、ちびうさが手を振っていた。隣には衛もいる。うさぎはほっと安心したように息をついた。ちょうどその時、信号が赤から青へと変わり、ちびうさがうさぎの傍へ来ようと走り出す。

「来ちゃだめえー！！」

「えっ？」

突然の叫びに、ちびうさが足を止めた。

「ばかっ！！」

すべてが一瞬の事だった。

うさぎが飛び出し、ちびうさの小さな身体を突き飛ばす。そしてちびうさが立っていた場所には、暴走した車がつっ込んできた。うさぎは跳ね飛ばされ、身体は道路へと放りだされる。

「うさぎ…？」

呆然と座り込んだ、ちびうさは声を掛けた。返事は返ってこない。

「うさぎ！」

「うさぎ！」

衛も我に返ったようにうさぎに駆け寄った。

「うさぎ、うさぎ！」

「うさぎ、しっかりしろ、うさぎ！」

残酷に響き渡る救急車のサイレン。慌しく手術室に運ばれるうさぎ。声を掛けながら付いていく衛とちびうさ。うさぎは手術室に運び込まれ、ドアは無情にも二人を締め出した。そして灯る、『手術中』の赤いランプ。

第一話 月の光 消えるとき、闇の王国 再び！（後書き）

うさぎ：『つて、なんつうストーリーよ?! あたしがいきなり交通事故お?!』

レイ：『ようやく主役交代ね、長かったわ』

亜美：『と言うわけで、次回から【美少女戦士セーラーマーキユリー Memories】をお送りします』

美奈子：『亜美ちゃん、ずるっい。次回、【美少女戦士セーラーヴィーナス Memories】をよろしく!』

まこと：『おいおい、【美少女戦士セーラージュピター Memories】だろ?』

レイ：『みんな、遅れてる。もちろんこの、火野レイちゃんが主役の【美少女戦士セーラーマーズ Memories】で決まりよ』

うさぎ：『いやだ、いやだ、いやだ! ぜえったい、い・や・だ（グズッ）!』

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

ムーンがないのに! セーラー戦士危うし』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第二話 ムーンがないのに！セーラー戦士 危うし

「来ちゃだめえー!!」

「えっ?」

突然の叫びに、ちびうさが足を止めた。

「ばかっ!」

すべてが一瞬の事だった。

うさぎが飛び出し、ちびうさの小さな身体を突き飛ばす。そしてちびうさが立っていた場所には、暴走した車がつっ込んできた。うさぎは跳ね飛ばされ、身体は道路へと放りだされる。

「うさぎ...?」

呆然と座り込んだちびうさは声を掛けた。返事は返ってこない。

「うさぎー!」

「うさぎー!」

衛も我に返ったようにうさぎに駆け寄った。

「うさぎ、うさぎー!」

「うさぎ、しっかりしろ、うさぎー!」

病院の廊下。手術室の前。

傍らのベンチに月野うさぎの両親が座っている。近くの壁には衛が寄りかかり、彼にすぎるようにちびうさが立っていた。月野うさぎ

の弟、進吾は世話しなく廊下を行ったりきたりしている。連絡を受けた仲間達が慌しく走ってきた。ちびうさはそっと衛から離れると、みんなを今にも泣き出しそうな目で見つめる。

「みんな…」

堪えきれなくなったのか、ちびうさはレイに泣きついた。

「うさぎが…うさぎがあ！」

「ちびうさちゃん…」

「衛さん、一体なにが…」

亜美は静かに衛に訊いた。一見冷静そうに見えるが、よく聞くと亜美の声が震えている。衛は頭を抱えながら首を振った。

「すまない。俺にも、何が何だか…」

バルコニーで不安そうに夜空を見上げる彼女を見つけた私は、そつと声をかけた。

「どうしたんだい？」

「あなた……」

彼女は振り向き、そしてまた月を見上げた。

「不安なの」

「スモール・レディの事かい？あの子ならきつと大丈夫さ」

私の言葉に彼女はゆっくりと首をよこに振った。

「そうではないの」

そう言うってから彼女は言葉に詰まる。その胸に抱える不安があまりにも漠然としすぎて、説明しかねている様子だ。

「だったら行ってくるといい」

私の言葉に、彼女は目を丸くする。

「でも私はここを…」

「…離れられない？少しの間だったら私だけでも大丈夫さ」  
それでも渋る彼女に、私は微笑みかけた。



「迷うなんて君らしくないじゃないか。昔の君だったら、もう飛び出していった頃だよ？」

一瞬キョトンとした表情で彼女は私を見つめ、彼女は小さく笑った。「ひどいわ、あなた。私だって、あの頃よりは大人になったつもりよ？」

そして彼女は優しい微笑を私に向けた。

「ありがとう、あなた」

『手術中』の赤いランプが消え、緑の手術服に身を包んだ医師が出てきた。後に続くように、うさぎも運ばれていく。

「うさぎちゃん！」

「うさぎー！」

「うさぎ！」

視線が一斉に医師に集まる。まるでがるように、うさぎの母親がゆっくりと口を開いた。

「先生、娘は…？」

「出来る限りの事はしました。幸い傷は酷くはないものの、頭をかなり打つたのが気になります。目覚めるかどうかは、正直なところ娘さんしだいです」

「そんな…」

あまりにも残酷な言葉に母親は床に崩れてしまう。

「大丈夫ですか?!」

「ママっ！」

「ママっ」

父親と弟が駆け寄る。

「先生、休憩室、お借りできますか？」

「ええ、こちらです」

衛がそつとうさぎの母親を抱き上げた。父親と衛が医師についていく。進吾は自分の姉が運ばれていった先を見ながら、唇を噛み締めていた。どちらに付いているべきか、迷っている様子の進吾を優し

い目で見つめ、亜美はそつと囁いた。

「進吾君、お母さんのところに行ってあげて。うさぎちゃんには私達がついているから」

進吾は心細そうに亜美を見つめたが、何も答えず、衛たちが消えたほうへと走っていった。

「何も言わないで出てきちゃったから、母に連絡してくるわ」

亜美は振り返ると仲間達に言った。

「あつ亜美ちゃん待つて、あたしも行く」

何故か美奈子が慌てたように続く。

「あたしは何か飲み物買って来るね。ちびうさちゃん、付き合ってくれるかい？」

「…でも…」

うさぎの傍を離れたくない。そう思い迷っていると、まことの視線がレイをじつと見ている事に気付いた。釣られてレイを見る。驚きの声をあげそうになったが、ちびうさは押しとどめた。

「少し気分転換も必要だよ。ちびうさちゃんにまで倒られては、うさぎちゃん、悲しむよ？」

「…うん、わかった」

「レイちゃん、うさぎちゃんをお願い」

美奈子が引きつりながらも笑顔を浮かべ頼んだ。レイは静かに頷く。「ちゃんと見ているから」

廊下を歩いていく仲間達を見送り、レイはうさぎの運ばれた部屋に入った。暗く、静かな部屋。医療器具の音だけが無情にも鳴り響いている。レイは椅子を引き寄せると、うさぎが眠るベッドの傍に座った。そつとうさぎの手を取る。

「死んだりしたら、私が許さないんだから」

仲間たちの前では我慢していた涙が、とめどなくあふれ出てきた。

「だから、おねがい。目を覚まして、うさぎ！」

同じ頃。ここではない、どこか。ここ、そこ、あそこ。そんな言葉では表せない場所。明るくて、暗い場所。狭くて、広い場所。そんな全てが矛盾する場所で、女性の声が響き渡った。声をしたほうを見ると、そこには玉座があり、一人の女性が座っていた。

「ジェダイト。ジェダイトはおるか」

その声に音もなく、一人の男が暗がりからスツと姿を現した。

「ここにおります、クイーン・ベリル様」

「一体どうなっている！」

その問いにジェダイトの顔が一瞬、戸惑いの色に染まる。

「手違いにより王女が傷を負い、伏せっております」  
プリンセス

「王女には手を出すな、と私は言わなかったか！この私が受けた屈辱、何倍にもして返すまで、王女に死なれては困る」  
プリンセス

ベリルと呼ばれた女性は、右手を握り締め、怒りで身を震わせる。

「お言葉ですが、ベリル様。あの王女が、そう簡単にくたばるとお  
プリンセス  
思いですか？事はまだまだ修正が効きます。それに……考え方によ  
つては、今回の事はベリル様にとって有利に働きます」

ベリルはジェダイトの言葉に疑わしげな眼差しで答えた。まるで射抜くような眼でジェダイトを睨みつけ、そして疲れたように玉座に寄りかかった。

「まあ、いい。お前の好きにやってみるがいい。だが、わかっているな。全てを奪うのだ。あの憎き王女の全てを」  
プリンセス

「全ては我らが支配者、クイーン・ベリル様の為に」

「ちびうさちゃん、寝ちゃったね」

再び病室。亜美と美奈子は椅子に座り、レイとまことは椅子が足り

ないため、床に座っていた。そしてちびうさは疲れたのが、レイの膝の上で眠り込んでしまっていた。

「無理もないわ。ずっと張り詰めていたみたいだし。それに何だか自分の事もすごく責めていた」

レイはそう言いながら、ちびうさの髪を優しくなでる。まことは握り締めていた右手を振り下ろした。

「くそつ。いったい何があったんだ」

「まこちゃん…」

美奈子は悲しそうにまことを見つめる。きつとこの場にいる全員が思っている事。

「大丈夫よ。うさぎが起きたら、きつと話してくれる」

「レイちゃん…」

病室のドアが勢い良く開いた。膝にちびうさを寝かしているレイ以外、条件反射的に立ち上がる。

「衛さん？」

衛ではなかった。ナースがふらりと入ってくる。

「どっ…」

…したんですか？と続けようとした亜美は途中で言葉を飲み込んだ。

「た…す…：…け…て…」

そう言い終える間もなく、ナースは悲鳴をあげた。黒いオーラに包まれたかと思ったら、見る見る内に姿が変わっていく。一瞬の内に醜い怪物がそこに立っていた。

「カンゴー！」

意味不明な奇声をあげる。

「妖魔？！」

「怪我には包帯をしましよ〜う〜！」

包帯のような白い物が妖魔から眠るうさぎへと伸びていく。

「うさぎ〜！〜！」

「うさぎちゃん〜！」

四人はとっさに間に入った。包帯のようなものに巻きつかれ、身体  
の自由を奪われる。

「力が…」

「ぬけてゆく」

「動け…ない」

呪縛は突然解かれ、四人は膝をついた。床には赤いバラが突き刺さ  
っている。バラが包帯を切り裂いたらしい。

「何者?!」

いつの間にか窓が開き、そこには彼がベッドを守るように立っ  
た。

「ナースは病人を救う白衣の天使。皆を苦しめる悪魔は、この私が  
許さん！」

「タキシード仮面様！」

妖魔は悔しがるように地団駄を踏む。が、突然動きを止めた。

「私の邪魔をする細菌は、殺菌しましょう！」

緑色の液体をタキシード仮面に吹きかける。タキシード仮面はステ  
ッキで攻撃を簡単に防いだ。

「何…?」

騒ぎに目を覚ましたのか、ちびうさが声を挙げた。まるでそれが合  
図だったかのように妖魔が身をひるがえし、標的を瞬時にちびうさ  
に移す。

「キャッ！」

ちびうさは白い布のようなものに包まれた。

「ちびうさちゃん！」

レイは助けに入ろうとするが、妖魔はまた緑色の液体を撒き散らし  
た。反射的に身を避ける。気付くと、ちびうさも妖魔も姿を消して  
いた。

「くそっ」

「みんな、追うわよ！」

四人にタキシード仮面も続こうとした。

「うさぎ?!」

そんな声に四人は驚き、振り返る。意識が戻った様子はない。見るとうさぎの右手が、タキシード仮面のマントをしつかりと掴んでいる。レイは優しく眠っているうさぎを見つめると、前へと進み出た。「タキシード仮面様」

そう、言ってから首を振る。

「いや、衛さん。うさぎの傍にいてあげて。彼女もそれを望んでる」

「ちびうさちゃんなら、あたし達が助けるからさ」

まことが付け加える。

「すまない、みんな」

衛は申し訳なさそうに頭を下げた。

「あたし達にまかせておいて」  
美奈子がウインクをする。

「みんな、行くわよ!」

雨がシトシトと降る中、少女は歩いていた。お気に入りの赤い傘、お気に入りの赤いレインコート。雨は嫌いではなかった。屋根のあるバス停の前を通りかかると、一人の女性が困った表情で空を見上げていた。

「お姉ちゃん、どうしたの?」

「えっ?」

少女に気づいていなかった女性は驚きの声を上げた。そして悲しそうな、不安そうな顔で呟く。

「大切な人のところに行かなければならないのに…雨が…」

少女は「なあんだ」という顔をし、自分の赤い傘を差し出した。

「えっ?」

「私の傘、お姉ちゃんに貸してあげる」

「でも…」

受け取ることを渋る女性に、少女は屈託のない笑顔で笑いかけた。

『大切な人のところ、行かなきゃ行けないんでしょ？私、ここで待っているから、会えたら返しに来て？』

女性は少女の顔をじっと見つめ、やがて傘を受け取った。

『ありがとう…えっと…？』

『私は…』

少女は自分の名前を言う。

『ありがとう…ちゃん…！』

よほど急いでいたのか、女性は礼を言っていると、傘を片手に駆け出していた。

すでにセーラー戦士に変身した四人は走っていた。ビルの間をすり抜け、人気のない工場地区へと入っていく。

「マーキュリー、こっちでいいのか？」

「もうすぐ、追いつくはずよ」

マーキュリーは立ち止まると、ポケットコンピューターとゴーグルで妖魔の位置を確認している。

「いたわ！」

マーズが指差す先に、妖魔がいた。脇にちびうさを抱え、工場の屋根から屋根へと飛び移っている。

「あたしにまかせて！ヴィーナス・ラブ・アンド・ビューティー・シヨックー！」

マーズの声に、ヴィーナスが飛び出す。必殺技は妖魔をかすり、反動でちびうさを落とした。ジュピターがさかさず、ちびうさを受け止める。

「ちびうさちゃん、大丈夫かい？」

ちびうさは朦朧としながらも、ジュピターの姿に気づくと笑顔浮かべた。

「ありがとう、ジュピター」

「よかった…」

安堵するジュピターの表情を確認すると、こんどはマーズが身構えた。

「あとは私が…！マーズ・フレイ…！」

「マーズ、待つて！」

マールキュリーがマーズを慌てて押しとどめる。

「どうして?!」

「あの妖魔は、人間だったのよ！」

マーズの頭にナースの助けを求める姿がよぎり、思わず唇を噛み締めた。

「だったら、どうすればいいの？セーラー・ムーンはいないのよ！浄化する技は私達には使えないわ！」

一瞬の躊躇がいけなかった。二人は包帯攻撃に身を取られ、エナジーを吸われ始める。

「しまった」

「力が…」

「マーズ！」

「マールキュリー…！」

ちびうさの悲痛な叫び。

「あたし達にも出来ないの…?!」

その時だった。

光の攻撃が二人の呪縛を切り裂き、妖魔に炸裂した。

「リフレーツシュ…！」

妖魔は叫び声をあげると、元の姿に戻り、その場に倒れこんだ。

「元に戻った…?」

「今のは…?」

見回していると、男の笑い声が辺りに響きわたった。

「セーラー・ムーンのいない戦士たちなど、雑魚に等しいな」

「誰！」

声をしたほうを振り向くと、屋根の上に声の主が立っていた。



「そんなはずは……！」

マーキュリーが息を飲む。

「私はダーク・キングダム四天王が一人、ジェダイト。久しぶりだな、セーラー戦士共」

ジェダイトは不敵な笑みを浮かべる。

「覚えておくのだな。これは、ほんの始まりでしかない」

そんな言葉と共にジェダイトは消え、不気味な笑い声だけがその場に木霊した。

再びうさぎの病室。

窓の外を見ると夜は終わりを告げ、辺りは明るみ始めている。

「それにしても、ジェダイトなんて……」

「まさか、ダーク・キングダムなんて」

亜美もレイも戸惑いを隠せない。ダーク・キングダム。うさぎを含む、五人が戦士として目覚めるきっかけになった敵。前世からつながる、因縁の敵。全てを賭けて倒したはずの敵。そんな敵が目の前に現れたのだ。戸惑わないほうがおかしい。

「それに、私達を助けてくれた、あの攻撃。セーラー・ムーンの技に似ていたけど……」

「そんなわけ……ないわよね」

まことの言葉に美奈子の視線は、自然と横たわるうさぎへと向かった。

「新しい戦いが、始まるうとしているのか」

衛が何気なく呟いた。まるでそれに答えるかのように、うさぎのまぶたが微かに動いた。

「うさぎ?!」

「うさぎちゃん?!」

「うさぎ?」

まるで呼びかけに答えるかのように、うさぎはゆっくりと目を開け

た。

「よかった、うなぎちゃん。本当によかった」

「うなぎ……」

「うなぎちゃん……！」

第二話 ムーンがいないのに！セーラー戦士 危うし（後書き）

美奈子：『ようやく、うさぎちゃんが目を開けてくれた』

レイ：『本当に、よかった…』

亜美：『でも待って、なんだか様子が変わよ』

まこと：『いったい、どうしちゃったんだい、うさぎちゃん…！』

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

新しい戦いの予感 星々の集うとき』

『月の光は、愛のメッセージ』

### 第三話 新しい戦いの予感 星々の集う時

「よかった、うさぎちゃん。本当によかった」

「うさぎ」

「うさぎちゃん…！」

口々に喜び、涙ぐむ仲間たち。まだ視点があわせにくいのか、うさぎの目は宙を泳いでいる。

「ここは…？」

弱弱しくも、はっきりとした声でうさぎは疑問を口にした。

「病院よ」

目に溜まった涙を拭いながら、亜美は微笑んだ。声に反応し、うさぎの視線は亜美を捕らえる。そしてうさぎの口からは、信じられない言葉が出てきた。

「誰？」

その場にいる全員が固まった。

「何言っているのよ、うさぎ。亜美ちゃんのことわからないの？水野亜美ちゃんよ！」

そんなレイの言葉にうさぎの顔は戸惑いの表情で歪む。

「水野…亜美…さん？」

うさぎは思い出そうと必死に考えていたが、息をついた。

「ごめんなさい…わからない」

「一体どうしてしまったんだい、うさぎちゃん！」

「待って、まこちゃん！」

亜美が取り見出し気味のまこことを遮った。まこことは不満そうな顔で亜美を見返したが、真剣な亜美の表情に黙る。

「この中に名前、わかる人いるかしら？」

うさぎは一人一人見ていく。そして悲しそうに首を横に振った。

「自分の名前は、どう?」

「みんな、私の事をうさぎと…でもわからない、わからない」  
うさぎはまた苦しそうに顔を歪め、横を向いてしまった。

「お願い、一人にして…」

「…うさぎちゃん…」

「私達は少し外に出ていきましょう? うさぎをお願い、衛さん」  
レイは仲間たちを促した。

「でも…」

「行きましよう? ね?」

レイのまっすぐな目で見つめられ、ちびうさは何も言いかえせなくなる。衛を残し、五人は廊下へと出た。

「まさかね…」

まことは前髪を掻き揚げながら、そう呟いた。

「私はお医者様と話をしてくるわ」

亜美が足早に去っていく。

「あたしは…うさぎちゃんの家族に…」

美奈子は亜美を追い、いなくなる。

「…うさぎ…元に、もどるよね…」

ちびうさはためらいがちに聞いた。

「大丈夫よ、ちびうさちゃん。絶対大丈夫」

まるで自分自身に言い聞かせるかのように呟いたレイは、病室のドアをじっと見つめていた。

病室の中。うさぎはまだ一人、部屋の中に残っているのに気が付いた。傍らに座っている男性。やさしい眼をしている。そう、うさぎは感じた。

「大丈夫か、うさこ」

「あなたは…?」

衛は一瞬悲しそうな顔をするものの、温かい笑顔で答える。

「衛だよ。地場……衛」

「地場衛さん？ごめんなさい。わからない」

衛は微笑み、優しく答えた。

「大丈夫だよ。また……知り合えばいいのだから」

「……ありがとう。衛さん」

場面は変わって、場所は何処かのリビング。

ソファの上には天王はるかが横になっていた。ふと一人の女性が部屋に入ってくる。肩まである、ウェーブのかかった綺麗な髪が印象的だ。そう。彼女は天王はるかのパートナー、海王みちる。彼女はソファの上ではるかが寝ているのに気付くと、静かに近づいた。彼女とは対照的に、短く揃えられたはるかの髪をそつとなでる。

「みちる。帰っていたのか」

はるかは目を閉じたまま囁いた。そんな様子にみちるは小さく笑う。「でも、またすぐに出かけなくてはならなくてよ？」

はるかが起き上がったので、みちるは背中を合わせるように、はるかに寄りかかった。

「わかつてる。また、戦いに逆戻りだな」

「それが私達の運命ですもの。つまらない日々を送るより、良くなくて？」

「おいおい。この僕といるのがつまらない、とでもいうのかい？」  
みちるはいたずらっぽく笑うと、答える代わりにそつとはるかの手に触れた。

公園というものは不思議な場所で、たとえ日中でも、時間が合わなければ人通りがなくなる。十番公園もちょうどそんな時間帯だった。人知れず、それは始まった。まるで小石を投げ込んだかのように、ポト乗り場の小さな栈橋を中心に、波紋が広がっていく。波紋は

だんだんと強くなり、ボート乗り場は光の柱に包まれた。まるで幻だったかの様に、光は一瞬で消え、そこには一人の女性が立っていた。彼女はスカートの埃を払うと、あたりを眺めた。懐かしそうに周りを見渡す彼女の口元に、笑みが浮かぶ。けれどそれも一瞬だけ。真剣な目に表情も硬くなる。唇をキュツと結び、女性は公園を足早に出て行った。

そして十番公園はいつもの静けさに包まれた。

再び病室。うさぎはぼんやりと天井を見つめながらポツリとつぶやいた。

「私…悪いことしちゃったな…」

自分の事を心配そうに見ていた人たちを、追い出すような事をしてしまったのだ。まるでそんなうさぎの考えを読むかの様に、衛はずかに答えた。

「大丈夫だよ。みんな、わかってくれる」

突然、うさぎの表情が一変した。

「ちびうさは？ちびうさは大丈夫？ちびうさ」

無理に起き上がろうとして、うさぎは苦痛に顔をゆがめた。衛はあわてて立ち上がり、うさぎの身体を抑える。反動で椅子が音を立てて倒れた。

「うさこ、落ち着け！ちびうさは大丈夫だ。君が守ったんだ」

そんな言葉にうさぎは安心したようにぐったりとなる。

「よか…った…」

うさぎが落ち着きを取り戻したのを見ると、衛は倒れた椅子を起し、再び座った。

「大丈夫か？」

「少し疲れました…」

「眠るといい」

うさぎは目を閉じると、またゆっくりと開き、衛に遠慮がちに聞いた。

「衛さん…?」

「何だい?」

「私が眠るまで、そばにいてくれますか?」

そんな問いに衛は一瞬驚いたようだったが、すぐに笑顔になり頷いた。

「もちろんだよ。安心して休むといい」

「ありがとう…衛さん」

安定した寝息になったのを確認すると、衛はそつと病室をでた。廊下にはレイとちびうさが立っている。

「衛さん…うさぎは?」

「また眠ったよ。他のみんなは?」

「一旦帰りました。敵のことも気になるので、交代で側にいる事にしました」

レイが最初にその役目を買ってでたのだろう。衛は頷くと、今度はちびうさに向き直った。

「じゃあ俺たちも、一度帰ろう、ちびうさ。送っていくよ」

「いや、ここにいる。だってうさぎはあたしのせいだ…」

衛の言葉にちびうさは激しく首を振った。

「ちびうさちゃん…」

衛は困ったような顔を見ると、膝をつき、ちびうさに視線の高さを合わせた。

「大丈夫だよ。うさこは強い。それにちびうさの事は忘れていなかった」

「本当?」



優しくちびうさの頭を撫でながら、衛は繰り返した。

「本当だよ。だから一度、家に帰って休もう？」

まっすぐと見つめられ、何も言えなくなったちびうさはしぶしぶとうなずいた。

「…わかった」

その答えに衛はゆっくりと立ち上がり、レイに頭を下げた。

「うさこを…頼む」

「それじゃあね、まもちゃん」

「ああ」

つらそうな笑顔、そう、ちびうさは思った。見ていられず、まるで逃げるように玄関のドアに手をやる。育子ママが帰っているはずでも、うさぎがないとわかっていただけで、ドアを開けるのをためらわれてしまう。みんな、つらいんだ。自分だけ逃げちゃだめ。そう自分に言い聞かせ、玄関のドアを開けた。

「ただいま！」

家に入ると、育子ママが居間から顔を覗かせた。疲れきった顔をしながらも、微笑んで迎えてくれる。

「ちびうさちゃん、お帰りなさい。お母さんが来ているわよ？」

ちびうさは耳を疑った。ママが来るはずない。ママが、20世紀に…。そう思いながらも、居間へ向かう足が早くなる。

「ママ…！」

ソファーに座っていた人物が振り返った。ちびうさは考えるよりも早く、彼女の胸に飛び込んでいた。

「うさぎがあー！うさぎがあー！」

涙が溢れ出してくる。止まらない。

「ちびうさちゃん…！」

育子ママがあたしのカップを持ってきてくれたことに気づいていたけど、あたしはただ泣きじゃくる事しか出来なかった。そんなちび

うさを抱きとめ、女性は優しくあやすかのように繰り返した。

「大丈夫ですよ。スモール・レディ。大丈夫ですよ」

しばらくしてちびうさが落ち着くと、女性は育子に向き直った。

「育子さん。うさぎさんは、どこの病院に？」

「十番病院です」

「あたしが案内する！」

まだ目を赤らめながらも、ちびうさが答える。そんな様子を女性は眉をひそめ、心配そうに聞き返した。

「帰ってきたばかりですが大丈夫ですか、スモール・レディ？」

「あたしは大丈夫だから」

ちびうさはまっすぐと女性の目を見た。明らかに無理をしている娘を優しく見つめる。そして女性はそっとうなずいた。

「じゃあ、ちびうさちゃん。うさぎの着替え持って行ってくれる？」

私も後から行くから」

「うん。わかった」

大通りを曲がり、二人は病院の敷地内へと入っていく。

女性はうさぎの着替えが入ったかばんを持ち、ちびうさは花束を持っている。

「ねえ、ママ。どうしてあたしをこの時代に…？」

ちびうさはずっと抱いていた疑問を女性にぶつけてみた。けれど女性はちびうさの問いには答えなかった。

「スモール・レディ。一つお願いがあるのですが、いいですか？」

「何、ママ？」

女性は立ち止まり腕時計に目をやる。

「今は11時ですから…そうですね…。3時に皆さんを火川神社に集めてほしいんです。出来れば衛さんと、ウラヌス…いいえ、はるかさん達も」

「わかった」

「私の事は話には出さないでください。あと、うさぎさんの銀水晶も持ってきてください」

ちびうさは再度うなずいた。女性は花束を受け取ると、ちびうさの視線の先にレイの姿が映った。

「レイちゃん!!」

走っていく娘を見送って、女性はまた歩き出す。

ふと誰かが入ってきたような気がして、うさぎは目をあけた。

「…誰？」

近くの椅子に女性が座っている。不思議と懐かしい感じがする。

「私は…セレニティ。こうしてお話するのは、初めてですよ」

透き通った声。考えようとすればするほど、なんだか深い海に落ちていくような気がした。

「でもそれは重要ではないですね。ゆっくり休んでください」  
目を開けていることが出来ず、うさぎはとうとう目を閉じた。

しばらくして再び病室のドアが開いた。

「うさぎ？」

レイが入ってくる。開いている窓のそばで、白いカーテンが風に揺れている。

「また、寝ちゃったか」

うさぎの寝息を確認し、椅子に腰を下ろそうと近づくと、レイは花束に気がついた。

「誰か来たのかしら…?」

花束から一枚のカードがひらりと落ちる。そっと拾い上げ、読み上げた。

『早くよくなってくださいね。セレネ』

「セレネ…?」

「あとは亜美ちゃんとまもちゃん…」

考え込んでいると、車のクラクションがちびうさを現実に呼び戻した。黄色いスポーツカーが隣に止まる。乗っている人物は、もちろんあの二人。

「やあ、おちびちゃん」

「はるかさん！みちるさん！」

「お久しぶり」

「どうしたんだい、そんなに急いで」

はるかか問いに、ちびうさはまだ母親に頼まれた事を、二人には話していないことに気づいた。

「そうだ！今日3時に火川神社に来てください。出来れば、ほたるちゃんと、プーも！」

ちびうさの真剣な眼差しに、はるかの表情も引き締まる。

「わかった。二人も連れて行くよ」

「絶対来てくださいね！」

ちびうさは念をおすと、走り出していった。

「あらあら、行ってしまったわね」

「もう戦いは、始まっているみたいだな」

「とにかく、二人を迎えに行きましょう？」

午後三時。火川神社には衛やセーラー戦士達が集まっていた。

「話って何だい、ちびうさちゃん？」

「うさぎちゃんを一人にしておいても大丈夫かしら？」

まことや亜美の問いに、ちびうさはうつむくしかなかった。話はちびうさも知らないのです、答えられない。

「お久しぶり、子猫ちゃんたち」

「はるかさん！どうして！」

レイの驚きにみちるが答える。

「私達もちびうさちゃんに呼ばれましたのよ？」

「ちゃんと二人も連れてきたよ」

二人の影から、ほたるとせつなが顔を覗かせる。

「皆さん、お久しぶりです」

「ちびうさちゃん」

「プー！ほたるちゃん！」

挨拶が終わり、衛がみんなを見回しながら呟いた。

「これでセーラー戦士が全員集まったことに……」

視線はまた、ちびうさに集まる。

「私が皆さんを呼んだのです」

声が出たほうを見ると、一人の女性が神社の鳥居をくぐる所だった。ゆったりとした足取りで戦士たちに近づいてくる。姿を見て、レイは息をのんだ。よく知った姿が女性に重なる。でも、そんなはずはない。だって彼女は……気づくと、混乱するレイはその疑問を口にしていた。

「あなたは……？」

レイの問いを横目に、ほたる、せつな、はるか、みちるの四人がスツと跪いた。まこと、亜美、美奈子は、ポカンとその様子を見ている。混乱しているのはレイだけではないらしい。

「失礼だぞ、この方は……！」

「あなた方にはすぐに気づかれてしまいましたね。どうか立ってください。はるかさん、みちるさん、せつなさん、ほたるさん」  
そう女性に促され、四人は立ち上がる。

「私は未来の月野うさぎ。そしてスモール・レディの母」

「うそ……」

「……まさか」

「そう。私はネオ・クイーン・セレニティです」

### 第三話 新しい戦いの予感 星々の集う時（後書き）

ジュピター …『そんな？攻撃が、効かない?!』

マーキュリー …『やっぱりセーラー・ムーンがいないと…』

ヴィーナス …『あたし達には何も出来ないの?!』

マーズ …『うさぎ…!!』

うさぎ…『【美少女戦士セーラーMoon Memories】

敵？味方？げんげつ幻月の戦士

クレセント・ムーン現る!』

『月の光は、愛のメッセージ』

#### 第四話 敵？味方？幻月の戦士 クレセント・ムーン現る！

「私はネオ・クイーン・セレニティです」

「えー！？」

まこと、亜美、レイ、美奈子。内部系四戦士達の声が重なった。

「もしかして、セレネって…？」

レイの言葉にセレニティが微笑みながら頷いた。

「私です」

そう答えてから、彼女の表情が悲しみの色に染まる。

「皆さんに集まっていたいただいたのは、今の時代での私。月野うさぎさんの事でお話したいことがあったからです」

うさぎの事と聞き、みんなの顔が引き締まる。

「うさぎちゃんの事で…」

「スモール・レディ。持ってきてくれましたか？」

ちびうさは母親に頼まれたものを取り出した。

「それはうさぎちゃんのブローチ」

セレニティはブローチを受け取ると、そっと開いた。銀水晶が姿を現す。けれど、いつもの強い光は感じられない。

「銀水晶の光が…弱くなっている」

「うさぎちゃんが、あんな状態だから？」

亜美の疑問にセレニティは首を横に振った。

「もちろん、その事も関係しているでしょう。でも本質的な問題は、違う所にあるように私は感じます」

「ネオ・クイーン・セレニティ様。それは一体どういうことですか？」

「私の事は、セレニティだけでいいですよ。でもその前に、スモール・レディに事故のことを話してもらうべきでしょう」  
自然と視線はちびうさに移る。

「そういえば、うさぎちゃんも、ちびうさちゃんの事を探していたよな？」

まことはその日の出来事を思い出していた。

「それは……」

ちびうさが言いかけると、衛が遮った。

「俺が悪いんだ。あの朝、たまたま、ちびうさに会って……」

「それでうさぎが元気ない事を話していたら、遅くなっちゃって」

「入れ違いになっちゃったわけね。でも……うさぎちゃんの取り乱しようも、普通じゃなかったわよね？」

美奈子は確認するように仲間達の顔を順々に見ていく。その場になかった外部系戦士の四人は、静かに話を聞いている。

「それで何があったの？」

亜美がちびうさに先を促した。

「大通りの向こう側にうさぎを見つけて、うさぎの所に行こうとしたら突き飛ばされて……」

ちびうさはその時の事がまた頭に浮かんだのか、うつむいた。ほたるがそっと、そんな彼女の肩に触れる。

「そして目覚めてみると、記憶が……」

美奈子が言いかけて、言葉を飲み込んだ。わかっていること。でもまだ口にするのは怖い。認めるのが怖い。

「うさぎさんが、必死に守ろうとしたスモール・レディの事以外はほぼ全て」

その言葉に場が静まる。しばらくして、みちるが口を開いた。

「セレニティ様、その事とうさぎの銀水晶はどうつながるのです？」

まるでその問いを待っていたかのように、セレニティはうなずいた。

「銀水晶とは、その守護者の心をあらわす、言うならば鏡のような物なのです。そうですね、説明するよりも見ていただいたほうが早いでしよう。皆さん、私に心を合わせてください」

その場にいる全員が目を閉じる。セレニティがうさぎのブローチに手をかざすと、銀水晶がキラリと光った。



レイが目を開けると、そこは暗く何も無い空間だった。

「ここは…」

「うさぎさんの心の中です」

美奈子の疑問にセレニティが答える。

「何もない…」

レイも感じていたことだ。あのうさぎの心が、こんなに暗くて何も無い？見回していると、小さな、でもしっかりとした光が現れた。ちびうさがおそろおそろ触れてみる。するとうさぎの声が響き渡った。

「ちびうさー！ちびうさ、どこー！ちびうさー！」

「うさぎー！」

ちびうさは思わず声をあげ、戦士達は再び火川神社の境内に戻された。しばらくの沈黙の後、考えこんでいた亜美が口を開いた。

「セレニティ様、何もない、というのはおかしくはありませんか？」

「さすが亜美さん、すぐに気づかれましたね」

「亜美ちゃん、どういうこと？」

美奈子の問いに、みちるが代わりに答える。

「つまりこういう事よ。一言に『記憶喪失』と言っても、記憶が消えてしまうことではないの」

みちるの言葉にほたるが続く。

「心の奥底に封印して、思い出せなくなってしまっただけなのです。あんなふうには、何にも無いというのは…」

「…おかしいと言う訳か」

ほたるの言葉に納得したようにまことは頷いた。状況は違うが、自分達にだって同じことが言える。きっかけがなければ、ここにいる全員、戦士して目覚めなかっただろう。けれど『戦士の記憶』は今の自分とは関係なく、存在したのだ。ただ自分では思い出せなかつ

ただけ。

「これが蘇ったダーク・キングダムとどう関係あるのかは、私にもわかりません。でもうさぎさんが何かを感じていたのは確かでしょう。そしてうさぎさんの心は砕けてしまった。記憶喪失はその所為、と考えて間違いないと思います」

「うさぎ…一人で…悩む必要ななかったのに…」

レイが聞き取れないぐらいかすかな声で呟いた。

「バカ……」

見ると唇を噛み締め、握り締めた右手は震えている。レイは怒っていた。何も言わなかったうさぎ。そして自分に怒っていた。悔しかった。また、何も気づいてやれなかった自分が、情けなくてしょうがなかった。

「レイさん、ごめんなさい。心配かけて」

独り言を聞かれていたとは思わず、レイはあわてた。

「セレニティ様、私はそんなつもりで言ったのでは…」

うまく言葉にならず口ごもるレイに、セレニティは優しい眼差しを返す。何も言えない……。落ち着いた雰囲気崩さない彼女に何も言い返すことが出来ず、レイはただ困ったように苦笑いするしかなかった。目の前にいる人物はうさぎであって、うさぎではない。でも全てを包み込む、優しい月の光のようなエネルギーは彼女そのものだ。

「みなさん、変身ペンをだしていただけますか？」

そうセレニティに言われ、戦士たちは変身ペンを手に取った。セレニティは新たなブローチを取り出し、立ち上がった。ブローチをあけると、銀水晶が姿を現した。20世紀の銀水晶ではなく、30世紀の銀水晶。セレニティが触れると、銀水晶は輝き、戦士たちのペンがまるで共鳴するかの様に光った。

「今のは……？」

「皆さんに、銀水晶の力を少し分けました。これで皆さんにも浄化の……」

最後まで言いきることが出来ず、セレニティはふらついた。

「クイーン!」

「セレニティ様?!」

「ママ!」

衛があわてて体を支え、ゆっくりと彼女を座らせる。

「ありがとう、もう大丈夫」

「ネオ・クイーン・セレニティ。まさか、うさぎちゃんの影響が、もう?」

今まで黙っていたルナが心配そうにセレニティの顔を覗きこんだ。少し青ざめたセレニティは優しくルナを撫でる。

「心配かけてごめんなさい、ルナ。うさぎさんがあの状態なので、必然的に私にも影響が出ています。けどまだ心配するほどではありません」

今度は戦士たち一人一人の顔を見ながら、静かに言う。

「これで皆さんにも、セーラー・ムーンほどではありませんが、浄化の力が備わったはずです。使いこなせるかは、皆さんしだいですが、残念ながら私には、これぐらいの事しか出来ません」

セレニティはすっと立ち上がると、頭を深深と下げた。その様子に戦士たちは慌てる。

「皆さんにご心配とご迷惑をおかけしてしまい、本当にごめんなさい。どうか、うさぎさんとスモール・レディをよろしく願います」

「セレニティ様、頭をあげてください」

皆を代表して、美奈子が歩み出た。

「うさぎちゃんの事はあたし達に任せてください!」

プリンス王子とプリンセス王女を守る。そんなセーラー戦士の使命というものもあったかもしれない。けれどそれ以上に、うさぎが戦士たちにとってかけがえのない存在だからこそでた、本心からの言葉だった。美奈子の言

葉に仲間達が次々に頷く。

「ねえ、ママ。いつまでこっちにいるの？」

娘の問いに、セレニティは申し訳なさそうに答えた。彼女が心細そうに自分の事を見つめていたからだろう。

「今晚、戻ります」

ちびうさを気遣ってか、亜美が続ける。

「もう少し、いらっしやればいいのに」

「残念ながら、そういうわけにもいきません」

セレニティは亜美に近づくと、うさぎのブローチを差し出した。

「亜美さん、これを預かっていただけませんか？」

「うさぎちゃんのブローチ。こんな大切な物……」

「うさぎさんが、戻ってくるまで。お願いします」

再度セレニティに頼まれ、亜美はブローチを受け取った。

その様子を安心したように確認すると、今度は衛の腕をとった。

「帰るまでもう少し時間があるので、衛さん、デートしません？」

「はい？」

思いがけない申し出に、衛は間の抜けた返事しか返えせなかった。

「あ、ママ一人でするい！」

「ふふっ。いいではないですか、スモール・レディ。こんなに若いパパとデートできる機会など、そうないのですから」

セレニティの言葉に衛は顔を赤らめる。見知った顔とは言え、やはり違う人物なのだ。

「さっさ、行きましょう、衛さん？」

腕をひっぱりながら、衛と歩いていく。

「あたしも！」

ちびうさの言葉に二人は振り返ると、三人で手をつなぎ、境内から出て行った。

そんな様子を呆気にとられながら見ていたはるかが、突然、愉快そうに笑い出した。

「あの方が、クイーンか。ハハハ…」

「ふふっ」

みちるも一緒になって笑う。

「ネオ・クイーン・セレニティ様って…」

これはレイ。

「…すっごく大人なレディって感じがするんだけど…」

そして美奈子、

「…やつぱりどこか…」

まことが続き、

「…うさぎちゃんなのよね」

最後に亜美。どこかため息交じりなのが、内部太陽系戦士たちの苦勞を物語っているのかもしれない。せつながクスリと笑った。

「あれでもあの方なりの愛情なのですよ？」

「えっ？」

聞き返す美奈子にほたるが続ける。

「ちびうさちゃん、ずっと張り詰めていたから。ずっと自分を責めていたから。だからせめて、せめて少しの間だけでも、三人の間ををと、思ったんじゃないでしょうか？」

「やつぱり、うさぎだ」

困ったような、でも優しげな眼差しで、レイは三人が消えた方向をじっと見つめていた。

彼女は玉座に座り、頭を抱えていた。脳裏にちらつく、遠い日の記憶。向かい合った<sup>プリンセス</sup>王女の眼差し。世界に希望を持ったあの眼。思い出すだけで、虫唾が走る。終わらない痛み。彼女は自分の中のメタリアがエナジーを欲しているのを感じた。

「ジエダイト。ジエダイトはどこにおる！」

「ここに」

彼女の声にジエダイトは暗闇から姿を現した。

「命じていたエナジーはどうなっている。まだまだ完全な復活にはエナジーが足らぬ！」

「心配ご無用です。私の放った妖魔が、ベリル様のためエナジーを集めております」

「その言葉、信じてもいいのだろうか？」

鋭い目つきでジエダイトを睨み付けた。そんな眼差しにもうろたえず、ジエダイトは笑みを浮かべながらうなずいた。

「もちろんでございます」

「まあ、いい。思うようにやってみるがいい」

「はっ」

一礼すると、ジエダイトの姿は再び暗闇の中へと溶け込んだ。

夜。衛はちびうさをおんぶし、セレニティと共に十番公園の中を歩いていた。

「スモール・レディは眠ってしまいましたね」

「いろいろありましたからね…。俺がちゃんと送っていきますから」  
「お願いします」

ポート乗り場の小さな棧橋に到着し、二人は足を止めた。

「衛さん。これは戦いの始まりでしかすぎません。これから皆さんには数々の試練が待ち受けていることでしょう」

そしてセレニティはゆっくりと頭を下げた。

「どうか、スモール・レディとうさぎさんをよろしくお願いします」

「…う…ん？ママ？」

衛が何か言いかける前に、ちびうさが目を覚ました。衛はちびうさをそっと下ろす。

「ちびうさ…」

自分が十番公園にいることに気づき状況を把握したのか、ちびうさはさびしそうにセレニティを見つめた。

「もっ……帰っちゃうんだ……」

「スモール・レディ……」

「帰る前に教えて。どうしてあたしをこの時代に……？あたしの所為でうさぎは……！」

「そっ……かもしれせん」

唇を震わせ、涙を溜めるちびうさ。セレニティはそっとしゃがんだ。まっすぐとちびうさを見つめ、優しく彼女の頬に触れる。

「あの事故はきっかけにしか過ぎません。たとえあなたが引金にならなかったとしても、違う形で何かが始まっていたはずです。スモール・レディ。今はうさぎさんがあなたを必要としています。どうか側にいてあげてください」

「……うん。わかった」

ちびうさの返事に、セレニティは微笑むと立ち上がった。金色の鍵を取り出し、空に掲げる。次の瞬間、棧橋は光に包まれた。光の中、目を凝らすと、光の先に扉があるのがわかった。セレニティはもう一度衛に振り返った。

「衛さん、今日はありがとうございました。デート楽しかったですよ」

「こちらこそ。キングによろしく」

「スモール・レディ。がんばるのですよ」

そう言い残すと、セレニティは光の中に消えていった。

光が消え、公園は再び夜の静寂に包まれた。

「ママ……」

「帰ろうか、ちびうさ」

衛が差し出した右手をちびうさは握り返す。歩き出そうとした瞬間、悲鳴が夜の静寂を引き裂いた。

衛とちびうさは顔を見合わせ、走り出す。広場に出ると、そこには夜のデートに来ていたらしきカップル達が倒れていた。そして中心には今まさに、妖魔まじまが掴んだ女性からエナジーを吸っている最中だった。相手の男性は腰を抜き、口をパクパクさせながら、呆然とその様子を見つめている。

「妖魔！」

ちびうさの声に妖魔は瞬時に掴んでいた女性を離し、攻撃の照準をちびうさに移した。

「ちびうさ！」

反応できずにいたちびうさの前に、衛は飛び出した。まるで枯れ木のように、ひよろりとした妖魔。見た目とは裏腹に、ものすごい力で衛は茂みへと突き飛ばされた。

「まもちゃん！！！」

衛に気が移った一瞬を妖魔は見逃さなかった。骨ばった手でちびうさの首を掴み、エナジーを吸い始める。

「しま…った」

宙ぶらりんの状態では抵抗できない。力だけが抜けていく。

「マーズ・フレイム・スナイパー」

目の前が暗くなりかけた時、ちびうさは凜とした声を聞いた。マーズの必殺技が炸裂すると、妖魔は奇妙な金切り声をあげ、ちびうさを落とした。四人のセーラー戦士たちが妖魔とちびうさの間に割っ  
てはいる。

「ただでさえ、いろいろな面倒な事になっているのに…」

「…ちびうさちゃんまで虐めるなんて…」

「…私達セーラー戦士が…」

「セーラー・ムーンに代わって、お仕置きよ！」

マーズ、ジュピター、ビーナスが交戦をはじめ、マーキュリーは倒



れていたちびうさを助け起した。

「大丈夫、ちびうさちゃん？」

「ありがとう、マーキュリー」

ふらつきながらも、ちびうさは立ち上がる。

「あたしも…戦わなきゃ！」

「無茶よ、そんな体じゃ！」

ちびうさは唇を噛み締める。

「あたしだって、あたしだってセーラー戦士だもん！あたしだって戦える！」

変身が終わると同時に、ジュピターとヴィーナスが突き飛ばされた。

「ピンク・シュガー・ハート・アタック！！」

妖魔は俊敏にちびムーンの攻撃をかわすと、再び掴みかかり、弱ったちびムーンのエナジーを吸い始めた。

「ちびムーン！！」

ヴィーナスとマーズの悲鳴が重なった。

「マーキュリー・アクア・ラプソディー！」

マーキュリーの必殺技が妖魔に命中した。けれど妖魔はひるまない。次の瞬間、技が跳ね返り、放った本人は自分の技に突き飛ばされた。

「マーキュリー！！」

「スパークリング・ワイド・プレッシャー！！」

今度はジュピター。けれど彼女の放った電撃も跳ね返ってきてしまった。どうにか避けると、ジュピターは着地する。

「そんな…技が効かない?!」

「このままじゃ…ちびムーンが！」

ボロボロになりながらも立ち上がる戦士たち。その間にも、ちびムーンはエナジーを吸われ続けている。

「やっぱりセーラー・ムーンがいないと…」

「…何も出来ないの…?!」

『…ちびムーン…』

『…つたぎちゃん』

『つたぎちゃん』

『つたぎちゃん…!』

『…つたぎちゃん…!』

想いが重なった瞬間、光の攻撃が妖魔にあたった。妖魔は悲鳴をあげると、ちびムーンを呪縛から解放した。

「マーズ、今よ!」

振り向くと近くの木の上に、人影が立っている。

「誰?」

マーズが戸惑っていると、人影は厳しい口調で怒鳴った。

「守りたいんでしょ?!自分の力を信じて!」

その言葉にマーズは奥歯を噛み締め、妖魔をまっすぐと見据えた。

「マーズ・フレイム・スナイパー!!!」

マーズが放った炎の矢は、妖魔を貫いた。

「リフレーション!!!」

妖魔は叫び声をあげ、体からは黒い影が抜ける。再び人間の姿を取り戻した人影は、ドサツという音と共に地面に倒れた。服装からして、多分ストリート・ミュージシャンだろう。妖魔が人間に戻ったのを見ると、マーズはまるで気が抜けたようにその場に座り込んだ。

「やればできるじゃない」

声の主の姿を探してマーズはあわてて立ち上がった。木の上の人影は飛び降りると、月明かりの下へ歩み出た。被衣かっぎをベールのようにかぶったその姿は、まるで昔話にでてくる『牛若丸』のようだ。金色の被衣に白い着物。被衣を深くかぶっているため、顔はよくは見えないが、声からして女性だとわかる。

「あなたは…？」

「私は幻月の戦士、クレセント・ムーン」

「クレセント・ムーン？」

聞き返すヴィーナスに、クレセント・ムーンの口元には笑みが広がった。

「じゃあね、セーラー戦士のみんな。また、会いましょう？」

「あつ待って！！」

そう言つて彼女が待つはずもなく、クレセント・ムーンは暗闇に姿を消した。

「幻月の戦士…」

「クレセント・ムーン…いつたい…？」

戦士たちは優しげに輝く月を見上げ、つぶやいた。

第四話 敵？味方？幻月の戦士 クレセント・ムーン現る！（後書き）

美奈子：「…あたしはずっと一人だった…」

美奈子：「…本当はずっと寂しかったんだ…」

美奈子：「…そんな時、あたしはあなたと出会った…」

美奈子：「…だからあたし、決めただ…」

うさぎ 「【美少女戦士セーラームーン Memories】

うさぎちゃん はあたしが守る！美奈子の友情」

「月の光は、愛のメッセージ」

## 第五話 うさぎちゃんはあたしが守る！美奈子の友情

場所は教室。

教壇に立つ教師は名簿を確認し、クラスと見比べていく。

「欠席は、月野だけか」

その言葉に美奈子とまことはぼつんと空いた席を見つめた。一瞬、眠そうな顔をしたうさぎが座っているような錯覚に陥る。でもここに彼女はいない。

「木野。月野と仲がいいだろう？彼女の具合、聞いているか？」

「あと二週間ぐらいで、退院できるらしいです」

「そうか、早くよくなってもらいたいものだな」

まことの言葉に教師は深くうなずいた。

「じゃあ、昨日の続きから。教科書の57ページを…」

放課後、クラウンの自動ドアが開き、亜美とまことが店に入ってきた。レイは飲んでいたコーヒーを置く。それぞれの肩にルナとアルテミスが乗っているのを確認すると、またカップを手を取った。

「そっか、今日は美奈子ちゃんの番だったわね」

「事故から、一週間たったけど…」

座りながらまことが呟いた。

「うさぎちゃんの記憶を消えたままだし…」

彼女の肩からピヨソツと飛び降りたルナが続ける。

「それに敵の動きも気になるしな…」

アルテミスも考え深そうに目を細めた。

「それにクレセント・ムーン…。あたし達を助けてくれたけど…」

「焦ってもしようがないわ。今私達に出来ることをするだけよ」

レイの強い言葉。亜美はふと外を眺めながら呟いた。

「うさぎちゃん…どうしているかしら？」

うさぎもまた、外を眺めていた。開いている窓からは気持ちの良い風が入ってくる。けれどうさぎの表情は暗かった。頭と腕にまかれた包帯が痛々しい。けれども、表情の暗さの理由は、怪我の所為ではなかった。

『わからない…』

うさぎは起こしたベットに寄りかかり、白い天井を見つめた。

『なんだか全てがぼんやりとしていて…』

まるで頭の中にもやがかったようで、思考が働かない。思い出そうとすればするほど、もやが濃く、深くなっていくような気さえする。

考えるのに疲れて目を閉じると、誰かが病室のドアを叩いた。

「はい？」

「こんにちは、うさぎ」

「お見舞いに来たよ、お団子頭」

返事を返すとドアが開き、二人の人物が入ってきた。一人は肩まである、ウェーブがかった髪の女性。手には花束を持っている。もう一人は短く切り揃えられたショートヘアのかっこいい男性？と一瞬思ったが、うさぎは違うと感じた。でもやっぱり二人が誰なのか、わからない。知っているはずなのに、わからない。

「…誰？」

申し訳なさそうに、うさぎは二人に聞いた。

「僕は天王はるか。そしてこっちが…」

「海王みちるよ」

うさぎは二人の名前を心の中で何度も繰り返した。でもやっぱりわからない。うさぎは悲しげに首を振った。

「はるかさんにみちるさん…？ごめんなさい、わからない」

そんな言葉にみちるは優しげに微笑んだ。

「大丈夫よ、うさぎ。焦らなくても」

「少し、外の空気を吸いに行かないか？気分転換にどうだい？」

「……」

何も言わないうさぎを、みちるがもう一度誘った。

「行きましよう、ねっ？」

うさぎは二人を見つめた。二人から強い力を感じる。強くて、まっすぐな力。でも悪い人たちではない。なぜかはわからないが、それだけははっきりと言えた。うさぎがうなずくと、はるかが病室のドアを開ける。

「じゃあ車椅子、借りてくるよ」

「お願い、はるか」

病院の中庭をはるかが車椅子を押しながら、隣をみちるが歩いていく。車椅子に座ったうさぎはゆっくりと深呼吸をした。

「本当…気持ちいい」

「よかったわ」

うさぎの表情が少しでも明るくなったを見ると、みちる安心したように微笑んだ。しばらく歩き、みちるとはるかはベンチに腰掛けた。

「どう、気分は？」

みちるの言葉に、うさぎの表情に影がかかる。

「わからないの。何もかも、よくわからない。自分の事も、みんなの事も」

「大丈夫よ、うさぎ。あなたには心強い仲間がいるのだから」

「仲間…？」

不思議そうに聞き返すうさぎに、はるかはクスッと笑った。

「子猫ちゃん達の事だから、毎日のように来ているんじゃないのかい？」

「レイ、さん、達の事…？」

うさぎの言葉にみちるは何も言わず、そっとうなずいた。うさぎは

晴れ渡った空を見上げる。

「火野…レイさん。水野亜美さん。木野まことさん。そして愛野美奈子さん。みんな良い人だけど…私…何も思い出せない。それが…すぐもどかしい」

うさぎの握り締めた右手が、微かに震えているのに気づいたみちるは、そっとうさぎの肩に触れた。

「大丈夫よ、うさぎ。みんなわかってくれている」

「……みちるさん……」

ふと、うさぎは一つの場面が見えた。公園、だろうか？はるかが座っている。視線の先にみちるが居た。二人とも、制服を着ている。む、げ、ん、学園？聞き覚えのない名前が頭の中に響く。みちるは優雅にヴァイオリンを演奏しながら、はるかはその彼女を優しげに見守っている。そっか。私、二人に憧れていたんだ。いつも優雅で、可憐な二人に。

「うさぎ」

でも心がうずくのはどうしてだろう。何かあったのかな。他にも何か…。

「お団子頭？」

私、すぐ大切なことを忘れている…。思い出せない。

「うさぎ？」

「えっ？」

気づくと、みちるが覗き込んでいた。

「大丈夫、うさぎ？」

「気分が悪いなら、戻ろうか？」

無言になったうさぎを二人が心配そうに見ている。

「あつ大丈夫です」

うさぎは安心させるように笑顔で答えた。そして一瞬考えた後、うさぎはみちるに恐る恐ると聞いてみる。

「…みちるさん？」



「何？」

「ヴァイオリン、聴かせてもらえませんか？」

うさぎの問いに、二人は非常に驚いた表情へと変わった。聞いてはいけなかったのかと思い、うさぎは戸惑った。さっき見えたのは、ただの幻？

「だめ…ですか…？」

うさぎの申し訳なさそうな眼差しに、みちるはあわてて首を横に振る。

「あつ、いや。そういうわけじゃないの。楽器は車においてきてしまつて…」

「大丈夫。僕が取ってきてやるよ、みちる」

そう言つて、はるかはスツと立ち上がった。

思考を働かせようとすると、頭に激痛が走る。

クイーン・ベリルは顔をしかめた。こんな時に限つて、思い出したくもない記憶ばかりが蘇ってくる。

「まだ足りぬのか、メタリアよ」

頭を抱えながら、ベリルは奥歯をかみ締めた。

「ジエダイト！ジエダイトは居らぬか！」

間を置かずに、ジエダイトが現れる。

「エナジーはどうなっている！完全なる復活にはまだまだ足りぬ！」

「私にお任せください」

「最近、失敗続きだが、大丈夫だろうか？」

イラつくベリルにジエダイトはたじろぐ。

「も、もちろんでございます」

「わかっているな？私はそう、気は長くはない」

女王の間を後にしたジエダイトは、乱暴にワインを注いだ。中身を

一気にあおり、グラスを床に叩きつけた。

「くそっ！」

「おっ、荒れているな。ジェダイト」

振り向くと、ネフライトが立っていた。

「何しに来た、ネフライト。俺をあざ笑いにでも来たのか！」

今にも噛み付きそうなジェダイトにも、ネフライトは挑戦的な笑みを崩さない。

「四天王の好みで、助言でもしてやろうかと思ったんだがな」

「貴様が助言だと？」

「クイーン・ベリル様の乾きは底を知らない。ちまちまエナジーを集めていただけでは、満足していただく事は到底できぬだろう」

「どうしろと言うのだ！」

「大量のエナジーを内に秘める銀水晶。その守護者である、プリンセス王女は今や抜け殻も同じ」

ネフライトの言葉に、ジェダイトは目を細めた。

「…奪うのは、簡単と言うわけか…」

「聞くかどうかは、お前の勝手だが」

「ふんっ」

ネフライトはニヤリと笑った。ジェダイトは返す言葉が見つからず、ただ顔を背けた。

みちるが弾き終わると、いつの間にか出来ていた観客の輪から拍手が起こった。みちるは優雅なお辞儀で返す。

「うさぎちゃん〜！」

うさぎが振り向くと、そこには近づいてくる美奈子の姿があった。

「美奈子さん？」

「あっ、みちるさんに、はるかさん」

「やあ」

「こんにちわ」

うさぎは疲れたのか、少しボンヤリとしている。みちるは楽器をケースに片付け、はるかも立ち上がった。

「みちる、僕達はそろそろ失礼しようか？」

「ええ、そうね。うさぎ、早く元気になってね」

「じゃあ、あたし達は病室に戻るうか？みちるさん、はるかさん、さようなら」

うさぎの車椅子を押していく美奈子を見送りながら、みちるが呟いた。

「それにしても驚いたわね…」

「ヴァイオリンの事か…」

「私達の事はわからなかったのに」

「良い傾向じゃないか。今はどんなに小さなことでも大切だ」

「そうね。早く良くなってほしいわね」

「ああ」

病室に戻り、うさぎはまたベットに寄りかかっていた。あたしは持つてきた物を広げていく。

「はい。これが今日のプリント。勉強はやっぱり亜美ちゃんよね。あたしは漫画持つてきたわよ。セーラーVの漫画、面白いんだから！」

「ありがとう、美奈子さん」

目覚めてから、うさぎちゃんの表情があまり変わらなくなった。表情には影がかかり、何に關しても、どこか無関心な表情をみせる。そんな心配をしつつも、あたしは精一杯明るく振舞う。多分、あたしが出るのはこれぐらいだから。だから、今のうさぎちゃんの前では、弱気は見せないって決めた。

「うさぎちゃんの好きなチョコPも買って来たよ。お茶でもいれてこようか？」

そう訊くと、うさぎちゃんは静かに首を横に振った。

「ねえ、美奈子さん」

うさぎちゃんは、しばらくボンヤリと外を見ていた。もう夕方だ。そんな事を考えていると、ふとうさぎちゃんが訊いてきた。

「なあに？」

「美奈子さんはどうして、こんなに優しくしてくれるんですか？」  
思いがけない問いに、あたしは一瞬目を丸くした。あたしには当たり前の事。そんなわかりきった事だったから、聞かれるとは思っていなかった。

でも彼女の不安そうな眼差しに、あたしは理解した。彼女は心細いのだろう。かなり前になるが、彼女に同じ問いをされた事がある。

その時も同じ目をしていた。その時は自分が月の王女プリンセスと知って、心細かったのだろう。

そして今は…。

「うさぎちゃんは、あたしの大切なお友達だからよ。それだけじゃ、理由にならない？」

「どうして、ですか？」

どうして、か。彼女が月の王女プリンセスで、あたしがセーラー・ヴィーナスだから？それも多分あると思う。

けど、それ以上にうさぎちゃんうさぎちゃんの存在はあたしの中では大きい。うさぎちゃんうさぎちゃんに出会う前、あたしはずっと一人だった。

いち早くセーラー戦士として目覚めていたから。セーラー戦士としての使命。そして普通の女の子でありたい、という気持ち。そんな誰にも言えない二つの対照的な感情にはさまれ、あたしは孤独だった。

出会った頃は彼女が月の王女プリンセスだから、そんな気持ちのほうが強かつ

たかもしれない。いや、そう自分に言い聞かせていたのかも少しない。

ふと、初めのころの会話が蘇る。

『感動お〜！憧れのセーラーVちゃんが目の前にいるなんて！』

『じゃーん。えっへん』

彼女は、あたしの全てを認めてくれた。ヴィーナスとしてのあたしも、美奈子としてのあたしも。

だから、決めたんだ。あたしがうさぎちゃんを守るって。どんなことがあっても、守るって。

「美奈子さん？」

少し考え込んでしまったのだろう。うさぎちゃんが不思議そうにあたしの顔を見ていた。

「あたしは明るくて、元気なうさぎちゃんが大好き。いつもあたし達に元気を分けてくれるのですもの。だから早く元気になってもらいたい。そう、思うの。きっとみんなだって、そう思っているわ」

「美奈子さん…」

あたしの本心からの言葉だった。本心すぎる言葉だったため、思わず言った後に恥ずかしくなるくらい。あたしは照れ隠しのために、腕時計に目をやった。見ると、もう五時を廻ろうとしている。

「いつけな〜い！もうこんな時間？そろそろあたし、帰るね？明日はまこちゃんが来てくれるはずだから。きっとおいしいもの作ってきてくれるんじゃないかしら？」

あたしはあわてて荷物をまとめた。五時に火川神社に集合のはずだったのに、これでは遅刻決定だ。

「ありがとう、美奈子さん」

「じゃあね〜」

美奈子が病室を後にすると、うさぎは疲れたようにぐったりと横に

なった。けれど、気持ちは温かった。みちるさん、はるかさん。そして美奈子さん。今日来てくれた人達の事を思い返す。みんないい人だ。何も思いつけず、心細いことが多いけど、一人じゃない。そんな気持ちにみんなはさせてくれる。みんなの事を考えると、自然と笑みがこぼれた。

眠ってしまったのだろう。

しばらくして目を覚ますと、部屋は暗かった。窓の外を見ると、銀色の三日月が輝いている。

「月…?」

どうしてだろう。月を見ると不思議と優しい気持ちになれる。

うさぎは起き上がると、近くのカーディガンを羽織った。周りの家具でうさぎは自分の体を支えながら、ゆっくりと病室を後にした。階段を数段ごとに休みながら上がっていく。

近くで月が……見たい。

「レイちゃん、怒っているだろうな」

火川神社へ走りながら、美奈子は苦笑した。べつに走らなくても大幅遅刻が確定なのに、走ってしまうのは毎朝の癖の所為だろうか？赤信号で一息つく。まっすぐ進めば、すぐに火川神社が見えてくる。右に進めば、うさぎちゃんのいる病院。

「あれ?」

一瞬、めまいに似た感覚に襲われた。妖魔が現れた時に、いつも感じるもの。

「まさか!?!」

美奈子は迷わず、病院へ向かって走り出した。

ようやく屋上に着くと、うさぎは息が切れていた。体力がすっかり衰えている。ベンチに座り、月を見上げながらうさぎは苦笑した。こんな事じゃ、また怒られちゃう。

あれ？誰に？

目を閉じると、声が聞こえてきた。

『まったく、うさぎってホント、のろまなんだから』

そう言いながらも誰かが手を差し出してくれる。

いつも側にいてくれる。あれは…。

面接時間を過ぎた病院で目立つわけにもいかず、美奈子はもどかし  
く思いながらも、足早にうさぎの病室を目指した。そして病室のド  
アに手をやり、勢いよくあける。

「うさぎちゃん?!」

けれど病室のベッドは空だった。部屋の中を見回しても、この主  
は見当たらない。

「うさぎちゃん、どこに行ったの?」

美奈子は唇を噛み締めた。

「美奈子、頭を働かせるのよ。今のうさぎちゃんは、そう遠くに  
いるはずないわ。この病院をでるとは思えない」

美奈子は必死に病室を見回す。

「今のうさぎちゃんだったら、どこへ行く?今のうさぎちゃんだっ  
たら…」

ふと、窓が開いているのに気づいた。外はもう暗く、きれいな三日  
月が空に浮かんでいる。

「月?もしかしたら、月を?」

そこまで考えると、美奈子は病室を飛び出していた。階段を一段飛  
ばしで、駆け上っていく。

おねがい、うさぎちゃん!屋上にいて!

そこでうさぎは現実に引き戻された。男の笑い声がしたからだ。

「誰?!」

「自分から、ノコノコと出てくるとは愚かなやつだ」

その言葉と共にジェダイトが現れた。ただでさえ弱っているうさぎには何も出来なかった。ジェダイトの影から現れた妖魔まじゆまに、簡単に自由を奪われてしまう。

「さあ、吐いてもらおうか。銀水晶はどこにある」

「銀…水…晶？わ…から…ない」

その時、攻撃が妖魔にあたり、うさぎは自由を取り戻した。凜とした声が屋上に響く。

「そこまでよ！」

「誰だ！」

屋上のドアが勢いよく開き、ヴィーナスが姿を現した。

「うさぎちゃんをいじめるなんて、この愛と美貌のセーラー服美少女戦士、セーラー・ヴィーナスが、愛の天罰、落とさせていただきますー！」

「セー…ラー…ヴィー…ナス…？」

朦朧とする頭でうさぎは、ヴィーナスの名前を繰り返した。

「邪魔者が…！後は任したぞ、ドクトル」

悔しそうに舌打ちをし、ジェダイトは姿を消した。残された妖魔まじゆまは大きく咆哮をあげる。

「ヴィーナス・ラブ・アンド・ビューティー・シヨックー！」

巨体なくせに俊敏な動きで技をかわし、ヴィーナスに掴みかかった。彼女は壁に叩きつけられ、エナジーを吸われ始める。

「しまった…体が…」

『あたしは明るくて、元気なうさぎちゃんが大好き。いつもあたし達に元気を分けてくれるのですもの。だから早く元気になってもらいたい。そう、思うの。きつとみんなだって、そう思っているわ』

『うさぎちゃんは、あたしの大切なお友達だからよ。それだけじゃ、理由にならない？』



「美奈子…さん…を…はな…し…て…！」  
呪縛が解かれ、むせながらヴィーナスはしゃがみこんだ。見るとうさぎが妖魔に掴みかかっている。でも弱っているうさぎでは適うはずがない。すぐに形勢は逆転してしまった。

「うさぎちゃん…！」

どうしたら、どうしたら…！うさぎちゃんが！

心の中で何度も叫んだ瞬間だった。光の刃が妖魔に炸裂し、うさぎを落とした。

「今のは…」

まるで一匹の蝶のように、攻撃した主がふわりと舞い降りた。

「幻月の戦士、クレセント・ムーン、ただいま参上」  
げんげつ

「クレセント・ムーン！」

「今よ、ヴィーナス！決めたんでしょ！」

その言葉にヴィーナスはハツとした。そうだ、あたしは決めたんだ。うさぎちゃんを守るって。

「ヴィーナス・ラブ・アンド・ビューティー・シヨック…！！！」

「リフレッツシュッ！」

ヴィーナスの必殺技が炸裂し、妖魔は悲鳴をあげ、人間へと戻った。その様子を確認すると、クレセント・ムーンはクスリと笑った。

「やれば出来るじゃない？また会いましょう、セーラー・ヴィーナス」

現れた時と同様、クレセント・ムーンはまるで月の光に同化するようにふわりと消えた。

「クレセント・ムーン…！」

「うさぎちゃん…！」

ヴィーナスの姿のまま、美奈子は倒れたうさぎに駆け寄り、彼女を

抱き起こした。美奈子の声にうさぎはゆっくりと目を開ける。少し視線が泳ぐが、美奈子の姿を捉えると、うさぎは弱弱しくも笑顔を浮かべた。

「美奈子…さん？」

「うさぎちゃん、良かった…！」

うさぎは美奈子に助けられながら、起き上がる。

「助けてくれてありがとう、美奈子さん」

その言葉に、美奈子はまだ自分が、ヴィーナスの姿をしていることに気がついた。

「うさぎちゃん、そういえばあたしの事を…『美奈子』…って…！」

「違った…？」

キョトンとしながら訊き返すうさぎに、美奈子は首を振った。

うさぎちゃんが、あたしの事をわかった…！！

うれしさのあまり目に涙を溜め、美奈子はうさぎに抱きついていた。

「うさぎちゃん…！」

第五話 うさぎちゃんはあたしが守る！美奈子の友情（後書き）

まこと：『うさぎちゃん、退院おめでとうー！』

レイ：『怪我だけでも良くなってくれて。本当によかった』

美奈子：『みんな気をつけて！追いつめられたジェダイトが襲ってきたわ！』

亜美：『うさぎちゃんにも、銀水晶にも手出しはさせないわ！水でもかぶって、反省しなさい！』

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】  
狙われた銀水晶！うさぎ大ピンチ』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第六話 狙われた銀水晶！うさぎ大ピンチ

眼を閉じると、広がる風景。  
神秘的で、輝いていたあの王国。

私はあの王国を滅ぼした。  
妬ましかったから。  
憎らしかったから。  
……まぶしすぎたから。

滅び行くあの王国の中でも、  
あの人は王女プリンセスを選んだ。  
だから私は…。

そこまで考えると、クイーン・ベリルはふっと息をついた。  
目の前にあの女王が立ちふさがった。一瞬だったが、鮮明に覚えている。あの眼だ。母子おやしして憎たらしい。

二人の幻影を振り落とすかのように、ベリルは激しく首を振った。

「ジェダイト！ジェダイトはおらぬか！」

「ここに」

ベリルの声に間を置かず、ジェダイトが現れる。

「エナジーはどうなっている！」

もはやこの終わりを知らない渴きが、メタリアが欲するがゆえの乾きなのか、自分自身の乾きなのかも、ベリルにはわからなかった。どちらにしても結果的には変わらないこと。

「しばしのご猶予を。今、銀水晶を奪う作戦を進めております」

「ほお。銀水晶だと？」

思いがけないジェダイトの言葉にベリルは眉を上げた。確かに銀水晶なら大量のエナジーを身に潜めている。だがジェダイトごときが扱えるものではあるまい。その事を自覚しているのかどうか……？  
まあ、いい。

ベリルが右手に集中すると、そこには黒い水晶が現れた。指を動かすと水晶は飛んで行き、スッとジェダイトの手の中に納まる。

「これは……？」

「それは銀水晶へと導くもの、黒水晶。銀水晶が近くにあれば、反応するであろう。必ずしも、プリンセスが銀水晶を持っているとは限らないからな」

ベリルの言葉にジェダイトは再び一礼をする。

「ははっ！ かならず、この命に代えてでも」

「期待しているぞ、ジェダイト」

いつもの面々は、いつもどおり、喫茶クラウンのいつもの指定席に座っていた。レイ、亜美、美奈子とまこと。そしてルナ、アルテミス の二匹。

「明日、ようやく退院ね。良かった」

安心したように言う亜美に、まことは同調する。

「本当によかった。怪我だけでも、良くなってくれて」

喜ぶ二人に釘をさすかのように、アルテミスが口を開いた。

「けれど、これからが大変だぞ。敵が銀水晶をねらっているんだからな」

美奈子はこの前の出来事を思い出したのか、表情が硬くなる。

「たしかにそうだけど、今は素直に退院を喜んであげるべきじゃないかしら？」

レイが言う。その言葉に美奈子もまた笑顔に戻った。

「そうと決まったら、やっぱ、パーティーでしょー！」

お祭り好きの美奈子に苦笑しながら、盛り上がる場の雰囲気、涼しげな声が一瞬にして変えた。

「その話、僕達も混ぜてくれないかな？」

「はるかさん、みちるさん！」

内部系戦士達四人の声が重なった。この二人が現れるだけで、場が優雅に変わるのには、やはり、この二人だからだろう。

「みなさん、こんにちわ」

「お元気ですか？」

「せつなさんとほたるちゃんも」

「あら？今日うさぎの所には…？」

みちるは戦士達が全員そろっているのを見ると、不思議そうに首をかしげた。

「今日は衛さんとちびうさちゃんが رفتっているから」

レイはそう答えてから外を見た。うさぎ、何しているかな？

うさぎは病室にいた。

怪我はほぼ治り、今日の検査の結果も大丈夫との話だった。でも……。

「やっぱり、もやが晴れない」

うさぎはそう呟いた。みんながいる時、たびたび聞こえる声。見える風景。けれどまだ、全てがぼやけ、鮮明に見えたことは一度もなかった。考えこんでいると、ノック音がうさぎを現実に戻した。

「はい？」

ちびうさと衛が入ってくる。

「聞いたよ。検査も良好で、明日退院だそうじゃないか？」

ちびうさはうさぎに抱きついた。

「ごめんね、うさぎ。あたしの所為でこんなことに……」

うさぎはそっと、ちびうさの髪を撫でた。不思議と、この子の事だけは、はつきりとわかる。絶対守らなきゃ、そう思っていた子。だから……。

「ごめんね、ちびうさ。私には何があったのか、まだ思い出せない。でも、一つだけはわかるの。私はあなたを守りたかった。だから、

あなたが今こうして無事でいてくれる事が…すごく…うれしい」  
「うさぎ……！」

次の日、うさぎは病院を後にし、母親と共に家に戻った。タクシーから降りたうさぎは、家を見上げる。

「ここが、私のうち…」

見上げている間に、玄関の鍵をあけたのか母親は家に入り、うさぎも後に続く。

「おかえりなさい、うさぎ」

「…た、ただいま」

うさぎはためらいがちに答えた。母親が家を案内していく。

見覚えがあるような、ないような…。けれど、良くわからない。それがうさぎの正直な感想だった。

「ここが、あなたの部屋よ」

ドアを開き、うさぎは中へとはいった。見回すうさぎを一人にしたほうがいいと思ったのか、母親はそっとドアを閉めると一階へと降りていった。

「ここが…私の部屋…」

ベットの上に腰掛け、ゆっくりと部屋を眺める。ふとたんすの上に写真たてが飾ってあるのに気がついた。近づき、手に取ってみる。

一枚目の写真。美奈子、まこと、レイ、亜美。そして真ん中に、自分の姿が写っている。場所は遊園地だろうか？

二枚目の写真。美奈子たち四人に加え、はるかにみちる。ちびうさに衛。そしてこの二人は…そうだ、せつなさんにほたるちゃん。みんな写っている。

そして三枚目の写真。そこにはうさぎ、衛、ちびうさの三人が写っていた。まるで親子、そんなおかしな考えがよぎる。

「そんなはずないのにね」

ふとチャイムがなり、少し遅れて母親の呼ぶ声がした。

「うさぎー！はるかさん達が迎えにきたわよ」

はるかさん達が？

不思議に思いながらも階段を下りていくと、そこにはみちるとはるか二人が立っていた。

「やあ。退院おめでとう」

「迎えにきたわよ」

「ほら、せつかくはるかさん達が迎えに来てくれたんだから、断つたら悪いでしょ？」

意味がわからず戸惑っていると、母親がニコニコしながら声をかけてきた。彼女はこの二人が何故来たのか知っているらしい。

「…うん」

外に出ると、そこにははるかの黄色いスポーツカーが止まっていた。はるかに促され、うさぎは車に乗る。

「はるかさん、一体どこへ？」

「着いてからのお楽しみさ」

はるかはハンドルをにぎりながら、いたずらっぽく笑った。

車を降り、階段を上っていた先で、うさぎは足を止めた。

「火川神社…？」

なんだか知っているような気がする。

「さっ行きましよう？みんな、待っているわよ？」

レイの部屋の障子をあけると、うさぎはみんなの声で出迎えられた。

「うさぎちゃん、退院おめでとうー！」

見ると部屋はパーティー風に飾り付けられ、テーブルには飲み物や食事が置かれている。



「私のために……？」

「さあ、さあ。主役は座った！座ったあ！」

美奈子の声に背中を押され、うさぎは席につく。早速、亜美に重たい紙袋を手渡された。

「これ、私からの退院祝い。うさぎちゃん、入院中、お勉強遅れちゃったからね。良くわかる参考書」

「亜美ちゃん……」

参考書をにこやかに手渡すのが、また亜美らしいというのか、なんというか……。キョトンとするうさぎの隣で美奈子は苦笑した。

「ここにある料理は、あたしが腕によりをかけて作ったんだよ？」

料理の説明をするのは、もちろんまこと。

「あたしとほたるちゃんも手伝ったんだよ！」

「私は何も……」

ちびうさの言葉に少し恥ずかしそうに口ごもるほたる。

「ありがとう、まことさん、ちびうさ。それにほたるちゃんも」

「まずは乾杯といきましょう？」

「そうね」

場はすっかり美奈子のペースだ。仲間達は苦笑しながらも、美奈子に任せる。

「みんな、グラス持ったかしら？」

「じゃあうさぎちゃんの退院を祝って……」

「かんぱーい！」

グラスのぶつかる音。

「ありがとう、みんな」

盛り上がっている最中、うさぎは外の空気を吸いに、部屋を出た。縁側に座り、空を見上げる。あたりはもうすでに暗く、月や星達が輝いていた。ルナも部屋から出てくると、うさぎの隣に座った。

「どうしたの、うさぎちゃん？」

「あッルナ。月が……見たくなったの」

記憶をなくしてからというものの、月を見上げることが多くなった。不思議と心を落ち着かせてくれるのだ。

「月ね…」

うさぎの言葉にルナも空を見上げる。

「あつそういえば、驚かないの？猫の私が喋っている？」  
ルナの問いにうさぎはふきだした。

「そうだね。私、猫と喋っているんだよね」

うさぎはそっとルナを抱き上げ、自分の膝の上に座らせる。

「でもね…不思議とルナと喋っていても、おかしいとは思わないの」  
「うさぎちゃん…」

「見つけたぞ、プリンセス！」

その言葉と共にジェダイトがうさぎたちの前に姿を現した。

「ジェダイト!？」

反射的にルナが飛び掛るが、所詮は猫。簡単に払われてしまう。

「ルナ！」

ルナに気をとられた瞬間だった。ジェダイトがうさぎに黒水晶を向けた。黒水晶からは影が伸び、うさぎに絡みつく。

「キヤー！」

「うさぎちゃん!!」

うさぎの悲鳴に、戦士たちが部屋を飛び出してきた。まことは手に持ったグラスをジェダイトに投げつける。グラスはまるで見えない壁に当たったかのように、ジェダイトの目の前で砕けた。けれど、ジェダイトの気を逸らすには十分だったらしい。うさぎは影から開放される。

「うさぎちゃん、大丈夫？」

「亜美ちゃん、うさぎを連れて逃げて！」

「わかったわ！」

亜美はうさぎを助け起こすと、手を引き、走っていく。

「逃がしはせん！」

「待ちなさい！」

追おうとするジエダイトの前に立ちはだかり、レイたちは変身した。マーズ、ヴィーナス、そしてジユピターが道をふさぐ。イラつきながら、ジエダイトは指をならした。

「お前達の相手など、こいつで十分だ！」

ジエダイトの影から雄一郎が現れた。目が虚ろで、様子がおかしい。雄一郎が苦しげに奇声を上げた。見る見るうちに身体が変化し、醜い妖魔よつまの姿へと変っていく。

「ゆっいちろっ！」

マーズの悲鳴。けれど、もうマーズの声さえ、雄一郎の耳には届かなかった。戦士達はぎりぎりのところで避けると、振り下ろされた妖魔のつめは、地面を深くえぐった。

「しまった！ジエダイトが！」

見るとジエダイトがいない。

「はるかさん達はうさぎちゃんをお願い！」

「わかった！」

はるか達、外部太陽系の四人、そしてちびうさはうさぎたちが走っていた方向へと消える。五人を追おうとする妖魔の前に、マーズは立ちはだかった。

「あなたの相手は私達よ！」

そしてマーズは穏やかに微笑んだ。

「大丈夫。すぐに元に戻してあげるから、雄一郎」

走っている亜美とうさぎの前に、ジエダイトが道をふさぐよううして現れた。

「逃がしはしない」

「追いつかれた?!」

亜美はうさぎを守るように前へと出る。

「うさぎちゃんは、下がっていて」

亜美は変身ペンを取り出し、掲げた。

「マーキュリー・クリスタル・パワー・メイクアップ!!」

亜美は水のようなさわやかな光に包まれ、セーラー戦士へと姿を変えらる。変身を間近で見たうさぎはめまいに似た感覚に襲われた。

「亜美…さん…?」

この感覚…覚えがある。亜美さんはマーキュリー。亜美さんはセーラー戦士。いろんな考えが頭の中をぐるぐると廻る。

「うさぎちゃんにも、銀水晶にも手出しはさせないわ!水でもかぶって反省しなさい!」

「マーキュリー・アクア・ラプソディー!」

ジェダイトはマーキュリーの放った技を簡単に跳ね返した。自分の技で、マーキュリーは突き飛ばされる。

「マーキュリー!!」

「これで邪魔者がいなくなったな」

「えっ」

ジェダイトは改めて、黒水晶をうさぎに向けた。黒水晶から伸びた影がうさぎを包み込むと、黒水晶が妖しく光りはじめた。

「これでベリル様も…」

けれど黒水晶の光はどんどん弱くなり、次第には影も消え、うさぎは地面に倒れた。

「何?プリンセスは銀水晶を持っていない?」

「マーキュリー大丈夫か!」

倒れたマーキュリーを目にし、ウラヌスは彼女に駆け寄った。少し遅れて、マーズたちも現れる。

「マーキュリー!!」

セーラー戦士が集まったの確認すると、ジェダイトはニヤリと笑った。

「ちょうどいい。どうせ、お前達の誰かが、銀水晶をもっているの

だろう。銀水晶をわたせ！さもないと、プリンセスの命はないぞ」  
ジェダイトは右手をいまだ意識を失っているうさぎに向けた。右手からは炎をはなち、今にもうさぎを包みこみそうだ。

「くそっ」

手出しが出来ず、ジュピターは悔しそうに歯を噛み締めた。

「わかったわ」

ボロボロのマーキュリーが立ち上がり、歩み出る。

「いい心がけだ。そこにおいて、下がるんだ。一歩でも動いたら…  
わかってるな」

マーキュリーはうさぎのブローチは言われたままに置き、下がる。

全ては一瞬だった。

ジェダイトがブローチを拾い上げると、銀水晶はまばゆい光を放った。目がくらみ、苦痛の叫びをあげるジェダイト。気づくと、セーラー戦士達の前には人影が立っていた。手にはうさぎのブローチを持っている。

「何?!」

「これはあなたの持つべきものではないわ!」

「誰だ!」

銀水晶の光から回復したジェダイトが彼女をにらみつける。

「私は、<sup>げんげつ</sup>幻月の戦士、クレセント・ムーン」

「こうなったら!」

ジェダイトの右手から巨大な火の玉が現れ、倒れているうさぎを包み込んだ。

「うさぎい!」

「うさぎちゃん!」

戦士達の悲鳴。まるでそれに答えるかのように、炎に包まれたうさぎの身体がゆっくりと浮かび上がった。額には月のマークが浮かび上がっている。

「う、うさぎっ」

うさぎの額のマークが輝くと、炎は術者へと跳ね返った。

「何?!」

ジエダイトは悲鳴をあげ、次の瞬間その姿を消していた。再び倒れたうさぎに、内部太陽系戦士達が駆け寄る。額のマークは、もう見えない。

「おそろしい力だ」

見守っていたウラヌスが呟いた。

「さすが、幻の銀水晶といわれるだけあるわね」

「そして、プリンセス。というべきでしょうね」

「でも…」

「どうしたのです、サターン?」

不安の表情を拭い去れずにいる、サターンにプルートの訊いた。

「心配なのです、あの力。今のうさぎさんは抜け殻も同じ。暗くも明るくもなる」

「サターン…」

一時期、ミストレス9に操られていたサターンだからこそその言葉なのだろう。ウラヌスは返す言葉が見つからず、ただうさぎたちを見守る事しかできなかった。

「うさぎ…」

「うさぎ…」

ちびムーンとマーズの呼びかけにうさぎは目を開けた。

「よかった、気がついて」

「あれ?私、一体?」

うさぎは今の出来事を覚えていないらしい。そんな事を考えていると、マーキュリーは後ろから声をかけられた。

「亜美ちゃん」

振り向くと、クレセント・ムーンが立っている。

「私の名前…!」

クレセント・ムーンは意味ありげに笑うと、うさぎのブローチを差し出した。

「これは亜美ちゃんが持っていて」

「ねえ、クレセント・ムーン。あなたは一体？」

これはマーズだ。

「時が来ればわかるわ。また、会いましょう？」

それだけ言うと現れたとき同様、一瞬で姿を消した。

「行っちゃった……」

「…相変わらず……」

「せっかちな人ね……」

転移が終わり、ダーク・キングダムに戻ると、ぼろぼろのジエダイトは膝をついた。

「くそっ、あの忌々しいセーラー戦士共めが！」

「ジエダイト。銀水晶はどうした」

その声にジエダイトはようやく、自分の置かれている立場を自覚した。自分で転移したわけではなかった。クイーン・ベリルに呼び戻されたのだ。ジエダイトは顔から血の気が引いていくのを感じた。

「今一步のところで……」

「言い訳など、聞きたくはない。やはりお前には荷が重すぎたようだな。しばし眠りにつくといい」

「ベリル様、ご猶予を！」

ジエダイトの言葉には耳を貸さず、ベリルは指をならした。瞬間、ジエダイトは黒い炎に包まれる。

「ベリルさまー！！！！」

断末魔だけをその場に残し、ジエダイトは暗闇へと消えた。スツとネフライトが歩み出る。

「ふっ…俺の出番だな、ベリル様」

「ネフライトか、好きにやってみるがいい」

第六話 狙われた銀水晶！うさぎ大ピンチ（後書き）

美奈子 …『やっぱり、みちるさんのヴァイオリン弾いている姿って、優雅で素敵よね？』

レイ …『まったく、こんなところにも妖魔が?!』

ネプチューン …『コンサートを台無ししてくれるなんて…許さなくてよ?』

マーズ …『ね、ねえ…ウラヌス…?ネプチューンって…（汗）』

ジュピター …『…怒ると…』

ヴィーナス …『怖いんだ』

ウラヌス …『あっああ（苦笑）』

ネプチューン …『皆さん、何か言いました（微笑み）?』

内部系四人 …『いついえ！（汗）』

うさぎ …『【美少女戦士セーラームーン Memories】  
美しい調べは悪夢への誘い?!みちる怒り大爆発』

『月の光は、愛のメッセージ』



## 第七話 美しい調べは悪夢への誘い?!みちる怒り大爆発

ネフライトの持つ水晶から、映像が浮かび上がった。

ジェダイトがブローチを拾い上げると、銀水晶はまばゆい光を放つ。目がくらみ、苦痛の叫びをあげるジェダイト。やけになったジェダイトがうさぎに攻撃を放った。ゆっくりと浮かび上がるうさぎの身体。炎の渦は跳ね返り、術者を業火に包み込んだ。そしてうさぎの額にきらめく、月のマーク。

「私にこんな物を見せてどういっつもりだ、ネフライト」

「俺に言わせれば、エナジーをちまちまと集めたり、プリンセスの影響を濃く受けた銀水晶になど手を出すなど、愚かの一言」

ネフライトの言葉にベルルは目を細めた。

「ほお?お前だったら、どうするっていうのだ?」

「見てのとおり、抜け殻となったプリンセスも、いまだ強大な力を持っている。これを利用しない手はない」

「この私にプリンセスを乗っ取れ、とでもいうのか?」

「いや、彼女のエナジーを利用するのです。そしてプリンセス自身も利用しない手はない。味方同士で戦う。一番、プリンセスが嫌っていた事ではないだろうか?」

ネフライトはニヤリと笑った。

「おもしろい、好きにやってみるがいい」

「じゃあ、うさぎちゃん!また後でね!」

「うん」

うさぎは手を振って、美奈子と別れた。美奈子の姿が見えなくなり、うさぎはふっとため息をついた。公園に入り、うさぎはベンチに座

る。空は晴れ渡り、雲ひとつない。けれど…気持ちがいまひとつ乗らない。そしてその理由もわかっていった。

「どうしたんだい、お団子頭」

「元気ないわね」

凜とした声に顔をあげると、はるか達が立っていた。

「みちるさん、はるかさん」

「せっかくだからお茶でもどうだい？」

「はい」

飲み物をはさみ、うさぎと向かい合ったみちるは話題を切り出した。

「悩み事でもあるのかしら？」

「そういうわけではないんですけど…」

口ごもるうさぎに、はるかは苦笑する。

「そんな顔で言われても説得力ないよ？」

「みんなとケンカでもしたのかしら？」

みちるの言葉にうさぎはあわてて首を横に振る。

「みんなは良くしてくれる。でも…私はいまだ何も思い出せない。

それが…つらいの」

「うさぎ…」

まったく、この子は…。はるかは困ったように苦笑した。

みちるも優しくうさぎを見つめる。

いつもそう、自分よりも周りを一番に考えて…。

優しいすぎるのよ、あなたは…。

心の中で、みちるはうさぎに話しかけた。

でも…だからこそ、『貴方』<sup>あなた</sup>なんでしょうね、プリンセス。

「焦っちゃだめさ。思い出せないなら、これから思い出を作ればいい」

「これから…？」

不思議そうに聞き返すうさぎにみちるが続ける。

「はるかの言うとおりのよ。焦ってもしょうがないわ。あつ、そうだわ」

何かを思い出したように、みちるは鞆から数枚のチケットを取り出した。

「明日、コンサートがあるの。良かったらみんなでいらして？」

「みちるさん、ありがとう。あつ、もうこんな時間？私、行かなきゃ！はるかさん、みちるさん、さようなら！」

チケットを受け取り、うさぎは去っていった。

「あらあら、行ってしまったわね」

みちるがクスリと笑う。

「みちる」

うさぎの姿が見えなくなり、はるかの目つきが厳しいものへと変わった。

「風が…ざわめいている」

みちるはそつと紅茶の入ったカップを口へと運んだ。

「わかつているわ。気をつけてあげなくてはね、彼女の事を」

ネフライトは古い教会の前に立っていた。壁は所々崩れ落ち、ステンドグラスがあったと思われる箇所には、破片しか残っていない。廃墟。そんな言葉がぴつたりとした場所だった。

ネフライトは落ちぶれた様をも気にすることもなく、扉を押した。ズツシリとした木の扉は、ゆっくりと音を立てて開いた。中の様子は外とはあまり変わらず、かつて参拝者たちが座ったはずのベンチは壊れ、十字架は埃をかぶり、床に落ちていた。

ネフライトは教壇まで進んでいくと、上を見上げた。天井のあるベキその場所には、星空が広がっている。ネフライトが集中すると、星空はうずを巻き始めた。しばらくすると、一つの光に影響されて

か、小さな星が光り輝く。

「そうか、今は海王星の影響を受け、モノケルロスが光輝く時。これを利用しない手はないな」

『星は全てを知っている』

それがネフライトの考えだった。星に問いさえすれば、道を示してくれる。星本来の力で全ては動き出す。自分はただ、きっかけを与えればいいだけなのだ。そう、たとえそれが小さな小石だとしても、波紋は起こせる。

「モノケルロスが守護するものは…この男か。朝比奈基成、俺のために働いてもらうぞ」

そんな事を知りもせず、朝比奈はコンサートホールの舞台に居た。正確にはグランドピアノの前に座り、ヴァイオリンと共に美しい調べを奏でていた。演奏が終わり、スタッフの声で、その場の緊張がふっと途切れた。

「OKです。リハはこれで終了です。お疲れ様でした！」  
優雅にヴァイオリンを弾きこなしていた女性が、ピアノ奏者の朝比奈に近づいてくる。

「朝比奈さん、ありがとうございます。明日はいいコンサートにしましょうね？」

「こちらこそ光栄ですよ、海王さん。あなたみたいに才能があって美しい方と共演できるとは」

朝比奈の言葉にクスリとみちるは笑う。

「まあ。お上手ですね。ではまた、明日お会いしましょう。失礼します」

去っていくみちるに、朝比奈は手を振り、見送った。そして少し弾

き足りない朝比奈は鍵盤に手を置き、再び弾き始めた。

しばらくして物音に朝比奈は演奏を中断した。

「誰かいるのか？」

もうスタッフの大半は帰ったはず……？

朝比奈がそう思っている、舞台のそでから、ダンボールを持った見慣れない男が出てきた。スタッフTシャツを着ているところを見ると、彼もスタッフの一人らしい。

「すみません、思わず聞き惚れてしまいました」

「ありがとうございます」

彼はダンボールを床に置くと、近づいてきた。男はまるで壊れ物に触るかのように、そっとピアノに触れた。

「このピアノから、あんな綺麗な音色が……。コンサートがんばってください。応援していますよ」

そう言うと男は去っていった。

朝比奈は静かに笑い、再び弾きはじめた。

次の日。

人であふれるコンサートホールの中で、うさぎはあたりを見回した。

「うさぎ！」

「こつち、こつち！」

手を振っている四人をみつけ、走っていく。

「みんな。遅くなっちゃって、ごめんなさい」

「大丈夫、大丈夫。まだ始まるまで十分時間あるからさ？」

まことは安心させるように言う。

「あら？衛さんは？」

衛の姿が見当たらないので、レイは不思議そうに首をかしげた。

「大学の関係で、今週いないの」

「そう、残念ね」

「子猫ちゃんたち」

はるかあの涼しげな声に五人は振り返った。

「はるかさん！」

「こんばんわ、みなさん」

「みちるさん！」

もちろんみちるも一緒だ。

「光栄だわ、みんなに来てくれて。コンサート、ぜひ楽しんでいらして」

「コンサート、がんばってください」

「ありがとう。コンサートの後にも、また会いましょう？」

コンサートが始まり、一曲、二曲と順調に過ぎていく。

『あら？朝比奈さん？』

三曲目の中盤に入り、みちるはヴァイオリンを弾きながら、二曲目から湧き出した違和感がだんだんと強くなってくるのを感じた。

おかしい…。テンポがかすかだが、狂い初めている。朝比奈に限ってこんなこと…？

残念なことに、違和感はすぐに確信へと変わった。演奏の最中、朝比奈が突然立ち上がったのだ。腕を振り上げ、手を鍵盤に叩きつける。不協和音がホールの中に響いた。耳障りな音がやまない。みちるは思わず耳を覆った。

見ると朝比奈が床に倒れている。

「うっ何？」

「ピアノーン！」

突然グランドピアノが黒い炎に包まれた。驚いたことに、ピアノが動き出す。

「妖魔ヤクモ?!」

みちるは観客席をみた。ほとんどの観客が先ほどの不協和音で気を失っている。エナジーも同時に吸い取られたのに違いない。まことやレイたちが舞台の方へ走りでてくるのが横目で見えた。

「私のコンサートを台無しにしてくれるなんて、いい度胸ね。ネプチューン…！」

変身しようとペンを掲げた瞬間、妖魔はみちるに気づき、襲い掛かってきた。真つ黒な巨体に似合わず、動きが早い。攻撃を避けた反動で、変身ぺんがみちるの手を離れ、遠くに転がる。

「しまった」

変身ぺんに気をとられた一瞬を逃さず、妖魔は攻撃を放った。不協和音と共に、まるで超音波のような攻撃がみちるを襲う。

「みちる…！」

駆けつけたはるかが見たのは、みちるが舞台の端へと突き飛ばされる姿だった。

「ウラヌス・プラネット・パワー・メイクアップ…！」

はるかは瞬時にウラヌスに変身し、必殺技を放つ。

「ワールド・シェイキング…！」

光の球体が地面を這いながら妖魔へと飛んでいく。強力な技は妖魔をひるますのには十分だった。その間にウラヌスはみちるに駆け寄った。レイ、美奈子、まこと、亜美の四人も飛び出す。

「私達も変身よ！」

「大丈夫か、みちる」

みちるは少し咳き込みながらも立ち上がる。

「私は大丈夫。ネプチューン・プラネット・パワー…！」

今度は邪魔されず、みちるはネプチューンに変身した。見ると内部太陽系の四人は交戦しながらも、少し苦戦している様子。

「よくもコンサートをぐちゃぐちゃにしてくれたわね？許さなくてよ！」

ネプチューンはすつと前へと出た。

「デープ・サブマージ！」

ネプチューンに気づいていなかった妖魔は、大きな悲鳴をあげた。

「す、すごい」

技の威力に驚くマーキュリー。

「ね、ねえウラヌス」

ウラヌスが振り向くと、いつの間にか後ろにはマーズが立っていた。

「ネプチューンって…」

「…怒ると…」

これはジユピター。

「怖いんだ」

そしてヴィーナス。

「何か言いました？」

振り向いたネプチューンにマーズたちはビクツとなる。いつもと変わらない優雅な笑顔だが、目が笑っていない。

それが逆に怖い。

「いついえ！」

「ウラヌス！」

「ああ！」

ネプチューンの声にウラヌスは力強くうなずき、もう一度右手に光の球体を作り出す。

「ワールド・シェイキングッ！！」

技は妖魔に炸裂し、断末魔をあげた。妖魔の代わりにポロポロになったピアノが音を立てて、舞台の上に落ちた。

息をつく戦士達の姿を横目に、ネプチューンはうさぎを探した。見つからない。



「うさぎは？」

「あれ、さっきまでいたのに」

胸騒ぎがする。みちるは唇を噛み締めた。

「探しましょう」

ヴィーナスの言葉に5人は肯きあい、散らばっていく。

「うさぎー！」

一階。

「うさぎちゃん！」

そして二階。

「うさぎちゃん？」

ホールの周り。

「うさぎちゃん、どこにいるんだ！」

ホールの入り口に六人の戦士達が集まってくる。

「いた？」

「ううん、いないわ」

「くそつどこに！」

イラついて舌打ちをするウラヌス。ポケコンにずっと何かを打ち続けていたマーキュリーが声をあげた。

「あっ反応があったわ。向こうよ！」

うさぎは気づくと、暗く何も無い場所を歩いていた。

「あれ？私はどうして…」

何も見えない。何も聞こえない。見渡す限りの暗闇だった。

「亜美さん、レイさん？美奈子さん！まことさん…」

うさぎは思わずその場に座り込んだ。

「みんな…どこ…？」

『惨めだな』

「誰？」

突然声が響き、うさぎは立ち上がった。けれど声の主は見えない。

『記憶をなくし、一人になり。友と名乗っていたものはいない。惨めだな』

淡々とした声は、まるで刃のようにうさぎの心に突き刺さる。うさぎは耳を覆った。

「やめて！」

『一人は恐いだろ？一人はさびしいだろう？一人はつらいだろう？

一人は苦しいだろう？』

「やめて…聞きたくない」

うさぎはしゃがみこむ。

『自分の事が知りたいのか？』

しばらくの沈黙の後、声が聞いてきた。思いがけない問いに、うさぎは顔をあげる。

「私の事、知っているの？」

『さあな』

そっけない反応にうさぎは声を荒げていた。

「お願い、教えて！私は誰なの！」

うさぎ！

うさぎちゃん！！

自分の名を呼ぶ声。そしてうさぎは光に包まれた。

目を開けると、うさぎはなぜかホール近くの公園に居た。

「うさぎー！！」

振り向くと、マーズが走ってくる場所だった。少し遅れて、他の五人も姿を現す。

「良かった。本当によかった」

「レイさん…」

うさぎを囲む戦士達、けれど再会は男の笑い声で邪魔された。

「誰だ！」

「姿を見せなさい！」

ウラヌスとネプチューンがうさぎを守るように前へとでる。笑い声は大きくなり、そして声の主が姿を現した。

「あなたは……」

「ネフライト！」

「そう、俺はダーク・キングダム四天王の一人、ネフライト」

「無駄口は聞きたくわないわ！ディープ・サブマージ！」

ネプチューンはネフライトに向かって必殺技を放った。けれどもバリアがネフライトを守っているのか、ネフライトにあたる前に技は消滅した。

「そんな…効かない?!」

「だったら…これならどうだ！」

ウラヌスが飛び出す。右手にはウラヌスのタリスマン、【スペース・ソード】が握られている。

「スペース・ソード・ブラスター!!!」

ネフライトは微動だにせず、右手で刃を受け止めた。

「くっ！」

「初対面の相手に、失礼だな」

「僕達はあの子たちのように、甘ちゃんではないのでね」

挑戦的にウラヌスは笑う。

「いい心がけだ」

ネフライトが剣を離すと、ウラヌスは見えない力で突き飛ばされた。

ウラヌスは空中で体制を立て直すと、どうにか着地をする。

「ウラヌス！」

ネプチューンが駆け寄った。

「せいぜい、プリンセスを守ってやるんだな！」

現れた時のようにネフライトは笑い声だけを残し、夜の暗闇に溶け

ていった。

メンバーは火川神社にもどり、うさぎとみちるは縁側に座っていた。

「ごめんなさいね、コンサート…」

「ううん、みちるさんの所為じゃないから…」

まるで次の言葉を言うのが恐いのか、恐る恐るうさぎは続ける。

「私の…せいなんですよ？」

「そんな事…」

「だって！」

反論しかけるみちるを、うさぎはさえぎった。

「みちるさん、うそ…つかないで！いつもいつも、私を狙っている。

そしてみんな私を守るうとして、危険な目に…！」

うさぎのあまりない取り乱しように、みちるは掛ける言葉が見つからなかった。

「私は誰なんですか！みちるさん！」

そこまで言い切ると、うさぎはハツとしたようにつつむいた。ようやく自分が声を荒げていたことに気づいたのだろう。

「ごめんなさい。私…」

みちるはそっと、うさぎを抱きしめた。

「大丈夫よ、うさぎ。大丈夫よ」

こんなにも苦しんでいるのに、何も出来ないなんて…。声に動揺がでないように、みちるはゆっくりと深呼吸をした。

「きつとつらいと思うわ。きつと苦しいと思うわ。でもね、うさぎ。

あなたは一人じゃない」

うさぎは顔を上げた。

「あなたの側にはあの子達がいるわ。それに衛さんだっているじゃない？せつなやほたる。私やはるかだって」

「一人…じゃない」

うさぎは空を見上げた。月は雲に隠れ、ぼんやりとしか見えない。

うさぎはもう一度だけ、繰り返した。

「私は一人…じゃない」

第七話 美しい調べは悪夢への誘い?!みちる怒り大爆発(後書き)

美奈子：『私達にはそんな表情ぜんぜん見せないけど…』

亜美：『うさぎちゃん相変わらず元気ないわよね…』

まこと：『そうだ、これに誘ってみようよ』

レイ：『植物園?』

美奈子：『あっ確か、今日からバラ園がはじまるんでしょ?』

亜美：『うさぎちゃんバラ好きだから、きっといい気分転換になるわ』

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

悪夢はバラの香り?植物園の恐怖』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第八話 悪夢はバラの香り？植物園の恐怖

ジヨギングから帰ってきた衛は、簡単な朝食を用意し、コーヒーを飲んでみた。そつとカップを置き、郵便受けから取ってきた物をチェックしていく。ふと、衛は一枚のチラシに目が止まった。

【あなたも美しいバラの世界に迷い込んで見ませんか？植物園『プラント』、バラ展 本日OPEN！】

衛の視線は自然と、サイドテーブルの上に飾ってある写真に向かった。うさぎ、ちびうさ。三人で撮った写真だ。

「うさこ、好きだったよな…。誘ってみるか」

同じ頃、うさぎは悪夢にうなされていた。

響き渡る女性の声。

『何故。何故そこまでして私にはむかう？美しき未来を夢見るお前も気づくだろう。この世界はすでに醜く、汚れきつていることを』  
彼女の声がまるで刃のように心に突き刺さる。うさぎは思わず耳をふさぎたい衝動に駆られた。

その時、まるで光のように新たな声が響いた。

『いいえ！！あたし、信じている』

私の声？でもなんだか別人のように聞こえる。

本当に…私？

『いいえ？愛か？友情か？人同士の信頼か』

最初の女性が見下したように笑った。それでも相手はひるまない。

『信じている！みんなが守ろうとしたこの世界を信じている』

強くて、まっすぐな心。そんな想いが伝わってくる。

『馬鹿め！この腐り果てた世界に信じられるものなどないわ！』

全てを飲み込もうとする闇の力、全てを照らそうとする光の力。  
二つの対照的な力がぶつかった。

「うさぎー！」

目を開けると、そこには母親の姿があつた。

「うさぎ？大丈夫？かなりうなされていたようだけど…？」

うさぎは心配させないために、無理やり微笑んだ。そんなうさぎの  
気持ちを知ってか、知らずか、母親はスツと立ち上がる。

「さあ、早く起きて。着替えてしまいなさい。衛さんが来ているわ  
よっ。」

「衛さんが？」

リビングに入ると、衛のうさぎを出迎えた。

「おはよう、うさぎ」

「あつ衛さん！おはよう」

「さあさあ、早く朝ごはん食べちゃって？衛さん、コーヒー、もう  
一杯どうですか？」

「いただきます」

「衛さん、朝からどうしたんですか？」

衛はうさぎにチラシを渡した。

「うさこを誘いに来たんだよ。好きかな？って思ってたさ」

「バラ展？」

肩越しに母親が覗き込んできた。

「せっかくだから行ってらっしゃい、今日はちびうさちゃんも進吾  
もいないし。楽しんでいらっしゃい」

「はい！」

植物園に着くと、チラシの効果もあってか、そこは人であふれてい



た。

「うわっ、人がいっぱい」

「入場券を買ってくるから、うさこはここで待っていてくれ」

それだけ言うと、衛は人の列に向かって走っていった。うさぎは空いているベンチを探し、そっと腰掛ける。

「やあ、子猫ちゃん」

「はるかさん、みちるさん！」

いつもの優雅な二人が近づいてきた。

「ごきげんよう、うさぎ。奇遇ね。あなたもバラ展がお目当てかしら？」

「はい」

はるかが辺りを見回しながら、不思議そうに聴いた。

「おや？今日は一人かい？」

「なわけないじゃないの、はるか。休日こんな場所にいるのは、デートのカップルかハトだけよ」

みちるがクスリと笑う。

「デートかい？」

「ええ、まあ。衛さんと一緒に。今、券を買いに行ってる」

うさぎのまっすぐな言葉に、はるかは微笑んだ。

「じゃあ、僕達は退散しようか、みちる」

「恋人達の一時は邪魔したくはないですからね。ごきげんよう、うさぎ」

みちるは強引にはるかを引っ張っていく。

「ったた…いたいよ、みちる」

「そう？」

みちるはいたずらっぽく、はるかを見上げる。

「もっと、優しくしてほしいな」

「よくってよ。後で二人きりになったらね」

「まったく、あの二人は…」

ルナは去っていくはるか達を木の上から見つめながら、思わず苦笑した。

「おい、ルナ」

隣のアルテミスに言われて、下を見る。衛がちょうど戻ってきたところだった。

「すまない、待たせたな。かなり混んでいて…。行こうか、うさぎ？」

うさぎは立ち上がり、衛と二人で植物園の中へと歩いていく。

「こうして見ると、ぜんぜん前と変わらないのにな…」

アルテミスが呟いた。

「苦しんで、悩んでいるはずなのに、そんな素振り、ぜんぜん見せなかったわね」

心配そうなルナの視線の先には、衛とうさぎが入っていた植物園の入り口があった。

「何もしてあげられないなんて…」

「ルナ…。側にいてあげる事ぐらいは僕達にだって出来るさ。側にいてあげる事ぐらい…」

アルテミスはまるで言い聞かせるように、何度も繰り返した。

衛とうさぎはゆっくりと植物園の中を廻っていく。

「次はどこに…？ん…？うやうや？」

温室で衛が振り向くと、うさぎは小さな植木鉢の前で立ち止まっていた。

「見て衛さん。かわいらしい青い花」

衛は近寄って、うさぎの肩越しに眺め、そして微笑んだ。

「忘れな草だね」

「忘れな草？へえ」

うさぎは花の名前を繰り返した。

「そっだ、うさこ。忘れな草の花言葉、知っているか？」

うさぎは首を横に振った。

「【私を忘れないで】、それに【真実の愛】というのがあったらいい」

「へえ〜。よく知っていますね、衛さん」

「うさこが前、教えてくれたんだよ」

うさぎは驚いたように目を丸くした。

「私が？」

うさぎはもう一度、青い、小さな花に向き直る。

「そっかあ。【私を忘れないで】それに、【真実の愛】か…」

「いい感じじゃない〜」

2メートルも離れていない場所から、二人を見守っている人影があった。正確には、うさぎ達の後ろにある、棚の影からという、あんまり隠れていない場所。

「元気がないことが多かったから、心配していたけど…」

「さっすが、衛さんってよね〜」

「みんな、や、やっぱりいけないわ、覗き見なんて…」

「あつれえ〜？じゃあ亜美ちゃんは、『何故』ここに居るのかなあ〜？」

まことはいたずらっぽく目でニンマリと笑った。亜美は顔を赤く染め、たじたじだ。けれど先頭で覗いているレイが小さな声をあげると、亜美も飛びついた。やはり亜美も好奇心は抑えられないのだ。

「覗き見なんて、感心しませんね」

肩を叩かれ亜美が振り向くと、そこには思いがけない人物が立っていた。

「せ、せつなさん?!」

驚いた拍子に思わず他のメンバーを押してしまう。

「うっ、うわ〜?」

「あつあつ?!」

「うわ、みんな押さないで、キャッ!」

レイがバランスを崩した。そして悲鳴とドタドタという物音。

うさぎと衛が驚いて振り向くと、そこにはレイ、美奈子、まことが倒れていた。一番下になっているレイが不機嫌そうな顔をしている。

「みんな?」

「や、やあ…うさぎちゃん」

とりあえず挨拶をする事にしたのか、まことは軽く手をあげた。困ったように美奈子も笑う。

「ハハ、うさぎちゃん、こ、こんにちわ」

「まこちゃんも…美奈子ちゃんも…いいから早く降りて…」

場所を植物園内のカフェにうつし、7人は丸いテーブルを囲んでいた。

「あたし達もうさぎちゃんを誘おうと思って、家に行ったんだけどさー」

「衛さんに先を越されていたってわけ」

「ハハハ…」

ニンマリとするレイに、衛はただ笑っしかなかった。

「さっきたまたま見かけて、決して覗き見なんて…」

思い切り口を滑らしている亜美を美奈子は大声で遮る。

「う、うさぎちゃん達はもう、バラ迷路行った?」

「いや、これから…」

「せっかくだから、みんなで行こうよ?」

まことの誘いにうさぎは頷く。

「せつなさんもいかがですか?」

「ごめんなさい、私は用事があるのでみなさんで楽しんでいらしてください」

「そっか。残念。じゃあ、いこうっか?」

レイはメンバーの飲み物が空になっているのを確認すると、立ち上がった。

せつなはカフェの前で仲間達と別れると、足早に歩き出した。建物に入り、しっかりとした足取りで廊下を進んでいく。

そして一つのドアの前でとまり、あたりを確認後、スツと部屋に入った。監視モニターやコンピューターなどが並んでいる。ここは警備室のようだ。

「なんだ、せつなか。驚かさないでくれよ」

入ってきた人物がせつなだと分かって、はるかは肩の力を抜いた。

「どうでしたか？」

みちるは首を横に振る。

「そうでしたか…。私も大体はまわってみたんですが、何も。あとは…」

せつなの視線はモニターの一つへと向かう。そこにはバラ迷路に到着した仲間達が映し出されていた。

「うわ、全部バラだ〜」

入り口のバラのアーチを見上げ、うさぎは驚きの声を上げた。

「ほらほら、うさぎちゃん、立って入らないで入りましょう！」

先導をきるのは、もちろん美奈子だ。そんな姿にクスリと笑いながら、うさぎも後に続く。

「右よ」

「左だ」

美奈子とまことの声が重なる。メンバーは数度目の分かれ道で立ち止まっていた。

「この愛と美貌の女神、美奈子様にかせつなさ〜い！絶対、右よ〜」

「へえ〜？どうしてわかるの〜？」

まことが疑わしそうに美奈子を見た。当の美奈子は力強く答える。

「カンよ！女の、カン！」

「ずっこける、まこと。」

「レイちゃんのカンならまだしも、美奈子ちゃんのカンじゃね〜？」

「あーまこちゃん、どういう意味よ？この愛野美奈子様もやるときや、やるのよ！」

こんな二人のじゃれあいにも、一人の笑い声に加わった。見るとうさぎが笑っている。目に涙まで溜めているところを見ると、本当に可笑しく感じたのだろう。美奈子とまことも顔を見合わせ、二人も一緒に笑って笑い出した。

色鮮やかなバラに囲まれ、仲間達は進んでいく。先頭に美奈子とまこと。真ん中には亜美とレイの二人。そして一番後ろに衛とうさぎ。「今日は本当にいい天気になってよかったわね、うさぎちゃん」  
亜美は振り返りながら、うさぎに話を振った。けれど振り返った先には誰もいない。

「キヤー！」

美奈子の悲鳴が響き渡った。バラがまるで触手のように伸び、彼女の右足を絡め取る。逆さづりになった美奈子は抵抗できずに、振り回される。

「ハアアアア！」

まことは飛び出し、こぶしに力を入れた。まことの助けで呪縛を解いた美奈子は、空中でバランスを立て直すと、ふわりと着地した。

「大丈夫かい、美奈子ちゃん？」

「まこちゃん、ありがとう」

「いつたい……」

少し離れていた亜美が走ってくる。

「みんな大変よ、うさぎちゃんたちがいなくなったの」

四人は顔を見合わせた。

「うさぎちゃんが危ない！」

衛とうさぎ。四人の後を歩いてきたはずだったが、角を曲がったところで二人は四人を見失ってしまった。

「みんなとはぐれちゃったね」

「ゴールで待っていれば、合流できるさ」

少し違和感を感じたが、二人は気にせず迷路を進んでいった。しばらくして二人はバラのアーチをくぐりぬけ、迷路を抜けた。

「バラ迷路クリアおめでとございます。チェックポイントは通ってきましたか？」

出口にいた男性に声をかけられ、うさぎはチェックシートを渡した。このバラ迷路ではチェックポイントでスタンプを集めるというスタンプラリーのイベントも開催されていた。

「スタンプは全部埋まっていますね？では、景品のバラです」

うさぎが男性から植木鉢を受け取った瞬間だった。邪悪なエナジーがまるで爆発のように広がる。

「うさぎ！」

とっさに気づいた衛は植木鉢を奪い取ったが、突き飛ばされてしまった。

「衛さん！」

落ちて割れた植木鉢は黒い影につつまれ、形を変えていく。

「ブラック・ローズ！」

変化が終わった影が、奇声を上げた。妖魔まじまだ。水を求めるバラの根のように、うさぎに向かって触手を伸ばしていく。いきなりの出来事にうさぎは反応することができない。

「デット・スクリーム」

うさぎは誰かの声を聞いたような気がした。落ち着いた、静かな声。触手は光に包まれ消し飛んだ。けれど妖魔は弱った様子は見せず、

怒ったように声を上げた。

「何者！」

「天空の星、天王星を守護に持つ、飛翔ひしょうの戦士。

セーラー・ウラヌス」

「深海の星、海王星を守護に持つ、抱擁ほうようの戦士。

セーラー・ネプチューン」

「時空の星、冥王星を守護に持つ、変革へんかくの戦士。

セーラー・プルート」

「外部太陽系三戦士、新たな危険に誘われて、ここに参上！」

「ウラヌス、ネプチューン、プルート…？」

『犠牲者が出るのは知っている』

『それが私たちの使命なのよ』

『その子を殺さない限り、サターンは目覚めます』

耳鳴りに頭痛。さまざまな声がつさぎの頭の中に渦巻く。

「私は…」

「あぶない！」

うさぎはネプチューンに飛びつかれ、一緒になって倒れた。うさぎが立っていた場所を、妖魔の触手がまるで鞭のよう地面をえぐる。

「ありがとう」



うさぎのお礼にネプチューンは嫣然と笑った。次の瞬間、足首に触手が巻きつき、ネプチューンは引きずられる。

「みちるさん！」

「ネプチューン！！！」

ネプチューンの危機に飛び出すウラヌス。

「ワールド・シェイキング！」

突然、呪縛を解かれたネプチューンの身体は宙を舞う。地面に転がった彼女をウラヌスは迷うことなく助け起こした。

「大丈夫か、ネプチューン？」

「ええ。ありがとう」

「よく来たな、セーラー・ウラヌス、セーラー・ネプチューン、そしてセーラー・ブルートと言ったか」

その言葉と共にネフライトが戦士達の目の前に姿を現した。身構える戦士達。

「光荣だね、名前を覚えてくれるなんて」

目の前に現れた男性に対し、ウラヌスは挑発的な笑みで返す。

「ふっ」

けれどネフライトは不敵に笑うと、指を鳴らした。バラの壁がうさぎとセーラー戦士達の間に来上がっていく。

「うさぎさん！！！」

ブルートがガネット・ローブを片手に走り出そうとした。

「あんだ達の相手はアタイだよ！」

妖魔が行く手をふさぐ。

「うさぎー！」

「お団子頭！」

壁の向こうで、うさぎの名を呼ぶ戦士達の声が聞こえた。

「みんな！」

「これで邪魔者はいなくなっ たな」

「あなたは…いったい誰なの!」

うさぎは声が上がらずにそうになる。そんな様子も気にかげず、ネフライトは続ける。

「それより、お前は誰なんだ」

「私は…」

「知りたくないか? いや、そんな事ないだろう?」

そう、自分が誰なのか。見える風景。聞こえる声。けれどそれはいまだにもやに包まれ、はつきりとはしない。

「私の事…知っているの?」

「知っているさ。全て知っているさ、セレニティ」

「セレニティ?」

まるで囁くように、男は自分を『セレニティ』と呼んだ。セレニティ。その名がうさぎの心の中に波紋を広げる。そう、まるで小石を投げ込んだかのように。小さくても確かな波紋。男はゆっくりと手を差し出した。

「俺と一緒に来れば、わかるさ。自分の事も、悪夢のわけも。さあ、セレニティ」

『私の悪夢の事もこの人は知っている?!』

うさぎは無意識の内に手を伸ばしていた。ネフライトの手に触れる寸前、うさぎは手を戻す。

「何故ためらう? お前の仲間達は何かを教えてくれたか? 何も教えてはくれなかつただろう? 何故だかわかるか?」

何も言わない彼女に、ネフライトは淡々と続ける。

「本当は何も知らないからだ。何も。何も知らないから、何も言えない。そしてセレニティ。何故、彼女達が仲間だと言える? もしかしたら本当は敵同士なのかもしれない」

「みんなが敵…?」

思ってもいなかった言葉にうさぎは動揺する。

みんなが敵?

『うさぎちゃん！』

『うさぎー！』

『うさぎ！』

『お団子頭』

『うさぎ』

まるで泡のように浮かんで消える、みんなの笑顔。

「さあ、セレニティ」

『信じている！みんなが守ろうとしたこの世界を信じている』

うさぎはハッと再び伸ばしかけていた手を止めた。明らかな表情の変化にネフライトは目を細める。

「私、やっぱりここにいる」

「何故？」

「確かに今の私には何もわからない。でも……」

「でも……？」

うさぎは顔を上げ、ネフライトをしつかりと見据える。

「みんなの想いはうそじゃない！だから私はみんなを信じる」

ネフライトはふっと微笑んだ。不思議と、優しさを感じさせる微笑だ。

「変わらないな、セーラー・ムーン」

地面が揺れた。うさぎはバランスを崩し、膝をつく。いや、地面が揺れたわけではなかった。視界がゆれ、ぼやけている。

「!?!」

「言い忘れていたが、ここは異空間。変身できないお前には、少しばかりつらいかもしれないな」

ゆっくりと近づいてくる、ネフライト。

「少し強引だが、ついてきてもらおう」

「…いや…!」

その瞬間、まるでうさぎを守るかのように、一本の赤いバラが地面に突き刺さった。同時に締め付けていた重い空気も軽くなっていく。「くっ」

さっそうと現れる、黒いタキシードに身を包んだ彼。うさぎを抱き起こす。

「大丈夫か、うさこ?」

うさぎは不思議そうに、彼の白い仮面に触れた。

「あなたは…衛さん…?」

「そうだよ、うさこ」

「バーニング・マンダラー!」

詠唱の音が響き、バラの壁が燃え上がった。

「うさぎ!!!」

マーズを先頭に、四戦士達が走ってくる。横のバラの壁も消し飛ぶ。

「うさぎ!」

こっちは外部太陽系の三人だ。七人はタキシード仮面とうさぎを守るように、ネフライトとの間に入る。

「形勢逆転のようね」

ヴィーナス。

「まだやるつもりかい?」

そしてウラヌス。

「そうだな、今日のところは退散しよう。また会おう、セレニティ」

ネフライトが消え、うさぎはマーズ達に囲まれた。うさぎはふと輪

からであると、何も言わず去っていきこうとする三人に声をかけた。

「はるかさん、みちるさん、せつなさん！」

呼ばれた三人は振り返る。

「ありがとう」

うさぎの礼に、三人はそれぞれそつと微笑んだ。

そしてメンバーは植物園の出口にいた。頭のうしろで腕を組みながら、まことが不満そうに言う。

「ああ〜あ。散々だったね」

「気分治しにみんなで夕御飯食べに行きましょうよ？」

変わらないハイテンションなのは、美奈子だ。

「いいわね、どこにしようか？」

盛り上がる三人を笑顔で見つめていると、うさぎは亜美に声をかけられた。

「あら？うさぎちゃん、衛さんは？」

「売店でちよつと買ってくるから、待っていてくれ、って…」

話をしていると本人が走ってきた。手には紙袋を持っている。

「すまない」

「衛さん、何を買ってきたんですか？」

亜美の言葉に衛は微笑み、うさぎに紙袋を手渡した。

「うさぎ」

「えっ？」

驚きながらも、うさぎは紙袋を受け取り中身を取り出す。まことは亜美の肩越しに覗きながら言った。

「おや？忘れな草だね」

「ありがとう、衛さん！」

## 第八話 悪夢はバラの香り？植物園の恐怖（後書き）

レイ：『うさぎは、ドジで、まぬけで、おっちょこちょいで。加えて泣き虫』

レイ：『でも友達のことになると一生懸命になる、がんばりやさんで…』

レイ：『今も昔もうさぎは、うさぎ』

レイ：『たとえあなたの記憶が戻らなくても、私はずっと側にいるから』

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

お化け屋敷にご用心！夢ランドは悪夢の王国』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第九話 お化け屋敷にご用心！夢ランドは悪夢の王国？！

「おっそ〜い、美奈子ちゃん」

走ってきた美奈子とアルテミスに、レイは声をかけた。

ここは火川神社。

「ごっめ〜ん！」

走ってきたはずなのに、息も切らさず美奈子は謝った。遅刻常習犯の美奈子にとっては、もう挨拶のようなものだ。レイも本気で怒っているわけではない。

「みんな集まってくれたみたいね」

ルナが見回す。亜美とうさぎはいない。

「今日は亜美ちゃんの番だっけ」

「そう、今日は亜美ちゃんが側にいてくれる。でもこんなこと、ずっと続けていくことはできないから、みんなに集まってもらったの」「そうよね〜側にいるってたって、限界があるし。ルナ、何か案あるの?」

レイの当然の問いにルナは困った顔になる。

「ないから、困っているのよね…。今のうさぎちゃんは戦えないし

…」

「うさぎちゃんが狙われているのは、わかっているのにね」

美奈子は悔しそうに呟いた。三人は考え込む。ふと、まことが不思議そうに口を開いた。

「そっいえば、うさぎちゃんって…『何を』覚えているのかな?」

「どういうこと、まこちゃん」

「考えてもみなよ。事故のあと、うさぎちゃん、あたし達の事さえわからなかったんだよ?でも変身した後の姿でも、彼女はあたし達がわかるみたいだし。それに…よくハツとする事があるんだよ、彼女と話していると」

まことの言うことに思い当たるふしがあるのか、レイも美奈子もう

なずいた。

「たしかに…」

「そういえば、クレセント・ムーン。一体誰なのかしら」  
美奈子の呟きに、二人はまた黙り込んだ。

クレセント・ムーン。

金色の被衣かつぎに白い着物。まるで牛若丸のような姿をした彼女。これまで何度も彼女にピンチを助けられていた。

「結局、わからない事ばかりね…」

三人はふつとため息をついた。

「やっぱり、今は彼女を守る事しかできないみたいだな」

アルテミス言葉に、三人はうなずく。

ふと美奈子が新しい話題を切り出した。

「そうだ、話は変わるんだけどさ、明日、うさぎちゃんとちびっこちゃんの誕生日じゃん！そこで提案があるんだけど…」

所変わって、亜美の部屋。

テーブルの上には教科書やノートが散乱している。亜美は本を閉じながら、うさぎに言った。

「ちょっと一休みしましょうか？」

本を置くと立ち上がり、ジュースを持ってくる。

「亜美さん、ごめんなさい。私の勉強につき合わせちゃって」

「私はぜんぜんかまわないわ。中三の頃だって、みんなでレイちゃん家で勉強会をしていたのよ」

申し訳なさそうにするうさぎに、亜美は明るく答えた。

「みんなで…勉強会？」

「ええ」

「ねえ、亜美さん」



「なあに？」

ふと、うさぎはグラスを置くと、亜美に訊いた。

「亜美さんが、セーラー・マーキュリー。」

美奈子さんが、セーラー・ヴィーナス。

レイさんが、セーラー・マーズ。

まことさんが、セーラー・ジュピター」

うさぎの意図がわからず、亜美は静かに彼女の言葉に耳を傾けた。

「はるかさんが、セーラー・ウラヌス。」

みちるさんが、セーラー・ネプチューン。

せつなさんが、セーラー・プルート。

ほたるちゃんが、セーラー・サターン。

そしてちびうさ。あの子は……セーラー・ちびムーン」

うさぎはそこまで言うと、またグラスを口に運ぶ。そして恐る恐ると疑問を口にした。

「私も……セーラー戦士なの？」

うさぎのまっすぐな目に、亜美は静かにうなずいた。

「ええ、そうよ。うさぎちゃんはセーラー・ムーン」

「私は…セーラー・ムーン……？」

まるで壊れものを扱うかの様に、うさぎはその名前を繰り返した。

「ねえ、亜美さん。私達の事を話して」

突然の質問に、亜美は思わず訊きかえした。

「私達の事？」

「私と亜美さんがどうやって知り合ったのか、亜美さんから見て私はどうだったのか。知りたいの。亜美さんの事。みんなの事。そして……私の事」

「うさぎちゃん……」

あまりにも真剣なうさぎの表情に、亜美は返す言葉がすぐには思いつかなかった。

真剣で、まっすぐな目。それだけは知り合った頃から、変わらないけれど、どこか焦りを感じさせる口調が、亜美は気になった。

うさぎちゃん、どうしたのそんなに焦って？

そんな問いが何度も喉まで出掛かり、声になりそうになる。けれど彼女の眼差しがそれを許さなかった。

もしかして……記憶が戻りかけている？

そんな考えが不意に浮かんできた。根拠は何もない。けれど、思い当たる節はこれまで何度かあった。

話すべきか、話さないべきか。そんな迷いが亜美を惑わせる。

そして

次の日、廊下で受話器を取ると、亜美は電話に出た。

「はい、水野です。あっ、レイちゃん」

「うさぎ、いるかしら？」

「ごめんなさい、昨日うちに泊まることになって、連絡し忘れていたわ」

「いるなら、いいわ。お昼頃、衛さんが迎えに行く事になっているから、彼女、それまで家に引き止めておいて？そして一緒に来て」話の见えない亜美はレイに訊いた。

「彼女のバースデー、夢ランドですることにしたのよ。言っちゃ、だめよ？」

レイのいたずらっぽい口調に亜美は笑顔になる。

「ええ、わかったわ。うさぎちゃん、おはよう」

「亜美さん、おはよう」

起きて来たうさぎに声をかけ、電話にもどる。

「じゃあ、また後でね」

「ごめんなさい、電話していたの？」

「大丈夫。今、終わったところだから。今日、みんなと会うことになったから。後で衛さんが迎えに来てくれるって」

「えっ？でも私」

いきなりの話に戸惑いを隠せないうさぎに、亜美はそつと微笑みかけた。

「みんなからも話を聞く、いいチャンスじゃないの？」

うさぎは納得したようにうなずいた。

私、もう逃げない。そう決めたから。

何がきつかけだったのか、それは自分でもわからなかった。でもみんなを信じる、そう決めた時から、うさぎの心には変化が起こっていた。同時に湧き上がる焦り。

思い出さなきゃ、思い出さなきゃ、思い出さなきゃ。

そんな想いを亜美にぶつけたのだった。亜美は逃げずに受け止めてくれた。心が温かくなると同時に、照れにも混じった笑みがうさぎの口もとに広がる。

「さあ、朝ごはんにしましょう？」

アパートの前で待っていると、赤い車が亜美とうさぎの前に止まった。車からは衛とちびうさが降りてくる。

「おまたせ、さあ乗った乗った」

車に乗り込むと、衛はエンジンをかけた。

「どこへ行くんですか？」

うさぎの言葉に、亜美とちびうさは視線を交わし、小さく笑う。

「ふふっ。着いてからのお楽しみよ」

「さあ、着いたよ」

衛の言葉にうさぎは車をおりた。

「ここは…夢…ランド？」

駐車場の向こうには観覧車が見える。

「うさぎい！早く早く！」

ちびうさがうさぎの手を引き、走り出す。

「あっ、ちびうさー！」

走り出す二人を見守るかのように、衛と亜美は後ろからついていく。

「あつ来た来た」

遊園地の入り口まで来ると、見覚えのある三人が手を振っていた。

「みんな！」

全員集まったのを見ると、レイは確認するように仲間達の顔を見ていく。

そして…

「うさぎちゃん、ちびうさちゃん。お誕生日おめでとう」

「誕生日…？私とちびうさの…？」

「そうよ。今日はあなたとちびうさちゃんの誕生日」

「だから今日はみんなでめいっばい遊びましょう？」

レイに美奈子。

「ありがとう、みんな」

ジェットコースターなどのアトラクション。みんなでソフトクリーム。ちびうさと美奈子に手をひかれ、うさぎは楽しんだ。一時だけは心配事も、不安も、焦りも忘れて、心から楽しんだ。

「つぎはメリーゴーランドに乗ろうよ！」

はしゃぐちびうさに、うさぎは少し疲れたように言った。

「私、少し疲れちゃったから、ベンチで待っているね。みんなと乗ってきなさい」

うさぎの言葉に間髪いれずにレイも続く。

「私もパス。うさぎと一緒に待っているから、みんなで乗ってきてよ」

「そうかい？」

「じゃあ、行きましょう」

「瞬躊躇するものの、レイが側にいるということとで安心したのか、ちびうさ達はメリーゴーランドへと歩いていく。

「まもちちゃんも早くう〜」

「おいおい、待ってくれ」

うさぎは息をつくくと、ベンチに腰掛けた。

「うさぎ、大丈夫？すこし疲れた？」

「うん。でも大丈夫」

顔をあげると、レイがスポーツドリンクを差し出してきている。近くにあった自動販売機で今買ったのだらう。うさぎに缶を手渡すと、レイもプシュツと言う音と共に、自分のドリンクを開け、うさぎの隣に座った。

「ちびうさちゃん以外にも子供みたいにはしゃいでいる人がいるからね」

レイの視線は美奈子へと向かう。その事に気づき、うさぎは小さく笑った。

「ねえ、レイさん」

「なーに？」

「レイさんって、セーラー・マーズなんでしょ？それでいつも私を守ってくれる。でも……どうして？」

うさぎの言葉にレイはそつと微笑んだ。

「うさぎが私にとって大切な人だからよ」

言うてから、レイは自分でも驚いていた。普段のうさぎにだったら、こんなに素直には言えなかったらう。どうしても少しトゲの混ざった言葉になってしまう。

「私が……？ねえ、レイさん。私ってどんな人間……いやどんな人間だったんですか？」

少し驚いた様子のうさぎに、レイは困ったような笑みを浮かべながら答えた。

「うさぎは…ドジで、おつちよこちよいで、まぬけで、泣き虫で…」「ずいぶんな言われように、うさぎは苦笑する。

「けどね。友達の事になると一生懸命ながんばり屋さんで」

「レイちゃん！うさぎい〜！」

見ると、衛と共に木馬に乗ったちびうさが手を振っている。レイは立ち上がると、ちびうさに向かって手を振った。

「でも、今は…」

ボソッと呟くうさぎに、レイは苦笑した。

まったく、この子は…。

「私にとっては同じよ。今も昔もうさぎはうさぎ。たとえあなたの記憶が戻らなくても、私はずっと側にいるわ」

少し目を潤ませるうさぎの肩を、そっと抱き寄せた。

私は…。

「そろそろ帰ろつか？」

「そうね」

まことに同調する亜美。視線は衛の背中では眠っているちびうさへと向かう。遊びつかれ、眠ってしまったようだ。

「え〜？まだお化け屋敷いってないじゃない〜」

「美奈子ちゃん…」

まるで子供のように駄々をこねる美奈子。

「じゃあ、うさぎちゃんに決めてもらおうじゃないか。お化け屋敷、どうする？」

「う〜ん。せつかくだし…」

「さっすがあ〜。うさぎちゃん分かってるう〜」

「俺は外で待っているよ。ちびうさも寝ちゃったしね」

「じゃあ行くつ、うさぎちゃん！」

美奈子がうさぎの手を取り、駆け出した。思わずバランスを崩しそうになるうさぎ。

「うわっ美奈子さん?!」

「ほらほら、うさぎちゃん、早く早くう！」

そんな姿に苦笑しながらも、二人についていくレイ、亜美、そしてまこと。

「うわゝ。結構、気味わるいねゝ」

お化け屋敷に入り、まことはそんな言葉をこぼした。すると前を歩いていた美奈子がクルリと振り返る。

「大丈夫。大丈夫。この愛と美貌の女神、美奈子様にまっかせなさい。お化けが出てきたって、あたしが追い払ってあげるんだから！」

美奈子は自信満々にガッツポーズをする。

「美奈子ちゃん、頼りにしてるわよゝ」

レイの言葉に、美奈子は先陣を切って歩き出す。

そして次の瞬間、お化けに驚かされ、悲鳴と共にレイに抱きつく、というのも美奈子らしいのかもしれない。

「まことさん」

「なんだい？」

隣を歩くうさぎちゃんが話しかけてきた。

顔を見ると彼女は慌ててそっぽを向いてしまった。考えがまとまる前に話しかけてしまった、そんな感じがする。あたしはあえて自分から話題を切り出してみた。

「ちゃんづけは、まだ無理かい？」

事故直後に比べると、心を許すようになってきたけど、相変わらず彼女はあたし達の事を、『さん』づけで呼ぶ。少しだが、寂しく感

じていたのは事実だ。

「ごめんなさい」

申し訳なさそうにするうさぎちゃんにあたしは慌てて首をよこに振った。

「謝る必要なんてないさ」

そこでようやくあたしは気づく。

あたしって鈍感だな。

前髪をかきあげ、思わず苦笑する。

さつき亜美ちゃんと話していたばかりじゃないか。

『多分…うさぎちゃん、確認しようとしているのよ』

『確認？』

『セーラー・ムーン、月の女王、プリンセスそして月野うさぎと言う自分。そんな自分が見えないから、今の自分が立っている場所が見えないから、だから余計焦ってしまうんだと思うの。だから、今どこに立っているのかを、確認しようとしているのだと思うの』

亜美ちゃんとは昨日一緒だったし。さつきはレイちゃんとか話している様子だった。

「思い出に関しても、同じだよ。焦る必要なんてない。あたしからも話を聞きたかったんだろ？」

直球すぎたかな、と一瞬思ったが、そのままの言葉をぶつけてみる。

「……はい」

小さな答えが返ってきた。

「でももうわかっていているんじゃないのかな？あたしの気持ち。きつとみんなと同じだと思うよ」

うさぎちゃんはあたしの顔を、考え込むかのようにじっと見つめた。そして結論に達したのか、違う質問を口にする。

「私、まことさんの事、どう呼んでいたんですか？」



ふと、初めて出会った時の事が蘇る。

あたしが十番中学に転校した一日目。中途半端な季節の転校だったこともあり、クラスの中でも、どうしても浮いてしまっていた。

まあそれ以上に、前の学校でしかしたケンカのうわさで、みんなが怯えていた、というのもあるかもしれないけど……。

そんな時だった。彼女が話しかけてくれたのは。

『ねえ、まこちゃん！』

屈託のない笑顔で、うさぎちゃんはあたしに話しかけてくれた。

その笑顔にどれだけあたしは救われたことが……。

「『まこちゃん』、だよ」

「ま、こ、ちゃん」

たどたどしく、自分の名を口にするうさぎに、まことが頷いた瞬間だった。悲鳴が二人を現実に戻した。

「レイちゃん?!」

レイが悲鳴をあげるのは珍しい。特に靈感のある彼女が、作り物のお化けで驚くことはまずない。

「うさぎちゃん、待って!」

まことが動くよりも早く、うさぎは走り出し、前を歩いていた亜美の横をすり抜けていく。

「亜美ちゃん、あたし達も行くよ」

「ええ!」

角をまがると、少し広めの場所にでた。ダンスホールだ。このお化け屋敷はイベントでもよく使われるため、広く作られている。周りには人が倒れ、真ん中では植物のような怪物が陣取っていた。

「妖魔まじゆま!」

妖魔は触手を伸ばし、女性のエネルギーを吸い取っている。レイだ。

近くで美奈子が座り込んでいる。

「あたしに任せておいて。スパークリング・ワイド・プレッシャー  
!!!」

ジュピターの放った電撃が、触手を焼き切った。レイはむせながら、座り込む。

「レイさん!」

「…私は…大丈夫よ」

駆け寄るうさぎに、レイは気丈な表情を見せた。マーキュリーは美奈子を助け起こす。

「美奈子ちゃん、大丈夫?」

「ごめん、足、やられたみたい」

「怪我人はじつとしていている!うさぎ、美奈子ちゃんを見ていて!」

「レイさん!」

ふらつきながらも立ち上がるレイに、うさぎは心配そうに声をかけた。レイは微笑み、ポンつとうさぎの頭に手を載せる。

「そんな顔しないの、この泣き虫さんが。この炎の戦士、セーラー・マーズ様がそう簡単にやられるわけじゃないの」

「レイさん……!」

「マーズ・クリスタル・パワー・メイクアップ!」

炎のような光に包まれて、レイはマーズへと変身する。そしてマーキュリーと共にジュピターを加勢するため、走っていった。

「あたしだつて…つっつ…セーラー戦士…なのよ…うわっ」

美奈子は無理やり立ち上がろうとして、しりもちをついた。右足首が赤くなっている。

「美奈子ちゃん!!そんな足じゃ無理だよ!」

「えっ?」

思いがけない言葉に美奈子はうさぎをじっと見た。

今あたしの事、『美奈子ちゃん』、つて…。

本人は気づいていないらしい。うさぎは隣に座り込むと、ポケット

からハンカチを取り出した。ハンカチを裂き、包帯のようにしつかりと美奈子の足に巻いていく。

「うさぎちゃん…」

うさぎが巻き終わり、美奈子は足を少し動かしてみる。痛みはさつきよりだいぶ少ない。これなら戦える。

「ありがとう、うさぎちゃん」

「無理、しないでください」

「まったく、きりがないな」

ジュピターは飛びのくと、そう呟いた。触手はいくら攻撃を当てても再生してしまう。

「いい加減に、しにてほしいわね」

マーズが触手の攻撃を避けようとした瞬間だった。視界がゆれ、反応が遅れる。

「危ない！」

ヴィーナスに飛びつかれ、マーズは一緒になって倒れた。

「ヴィーナス?!」

「これで、さっきの借りは返したわよ？」

レイがエナジーを吸われる事になったのは、美奈子をかばったからだった。

「ちゃっかりしているわね」

マーズのいつもの口調に、ヴィーナスはクスリと笑う。

「みんな大丈夫か！」

「この愛と正義の美少女戦士、セーラー・ちびムーンが許さないんだから！」

仲間達の危機を察したのか、ちびムーンとタキシード仮面が現れた。「妖魔の弱点がわかったわ！あの赤い石に、エナジーが集まっている。あれを破壊できれば…」

「よし、私が妖魔をひきつけよう。その間に頼む」

タキシード仮面が飛び出した。

「みんな、セーラー・プラネット・アタックよ！」

ヴィーナスの言葉に戦士達は力を溜め始める。

「ヴィーナス・クリスタル・パワー」

「マーキュリー・クリスタル・パワー」

「マーズ・クリスタル・パワー」

「ジュピター・クリスタル・パワー」

「ムーン・クライシス」

タキシード仮面が飛びのいた。五つの力が一つになる。

「セーラー・プラネット・アタック!!!」

まばゆい光が妖魔を包み、同時に弱点の赤い石が割れた。まるでもやが晴れていくように、妖魔の出現で重くなっていた空気も軽くなっていく。

「やったー！」

妖魔が消えたのを見ると、ジュピターが嬉しそうにガッツポーズをした。

戦士達が息をつくとき、パチパチという手を叩く音があたりに響いた。

「誰！」

声が響き、拍手をした主が姿を現す。

「さすがだ、セーラー戦士達よ」

ネフライトの登場に身構える戦士達。

「やる気？」

強気に構えるのはジュピターだ。

「あなたは一人。不利よ！」

「たしかに俺は一人。そっちはセレニティをいれて七人。けれど、

それが必ずしも不利とは限らないさ、マーキュリー」

マーキュリーの言葉にもネフライトは不敵な笑みを崩さない。まるで勝利を確信しているかのよう。

「どうということー！」

「どうせ、負け惜しみにきまっているさ」

その言葉と共にジュピターが飛び出した。得意の格闘戦に持ち込もうという考えらしい。マーズとヴィーナス、そしてタキシード仮面もジュピターの援護のため交戦を始める。四対一という不利な状況にもかかわらず、ネフライトは華麗に攻撃を避けながら、反撃をする。

マーキュリーは戦闘には加わず、ゴージェル越しにあたりを見回した。ポケットコンピュータで分析も始める。

ネフライトの含みのある言葉がこだまのように、脳裏で繰り返される。何か、何かあるはず。

ふと、ゴージェルが反応した。さっきまでなかった反応。エナジーが一点に集中している。

「もらったー！」

勝ち誇ったようにネフライトは叫び、その姿は空中へと飛び上がった。パチン、と指をならす。

「何?!」

戸惑ったようにあたりを見回すマーズ。

「ちびムーン!!!」

「えっ」

マーキュリーの悲鳴に、ちびムーンはゆっくりと振り向いた。

ちびムーンはまるで時間が止まったかのように思った。

キラリと光る、ネフライトが作り出した氷の刃。尖ったその刃がま

つすぐと自分を狙っているのが見える。  
避けられない。そう、感じた。

そんな中、視界に入ってくる黒い影。黒い影は目の前で、自分を守るかのように手を広げる。

そして次の瞬間、刃が突き刺さり、黒い影は声をあげた。

「うっ」

影が自分に向かって倒れ、支えきれなくなったちびムーンは一緒になつて倒れこんだ。

そしてようやく気づく。黒い影が誰なのか…。

「いやあああああ！……！！！」

悲鳴をあげ、ちびムーンは倒れこんだうさぎを抱き起こし、大声で何度も何度も呼びかけた。

「うさぎ！うさぎい！」

「セーラー……ちび……ムーン……、大……丈夫？怪……我は……ない……？」

ちびムーンの呼びかけに、うさぎはゆっくりと目を開け、一言一言、苦しそうに口にする。

「う……ん……」

「よかった……」

安心したようにほっとするうさぎに、ちびムーンはただうなずく事しか出来なかった。何か言おうとしても、涙があふれてきて言葉にならない。そんなちびムーンの様子を、うさぎは弱弱しくも困ったように笑った。右手でそつとちびムーンの頬に触れる。零れ落ちた涙が、うさぎの手を濡らした。ちびムーンは手をギュッと握り返す。「な……んて……顔……して……いるの……？せい……ぎの……み、かた……なん……でしょう……？し、つか……り、しな……」

うさぎは最後まで言うことができず、意識を失った。ちびムーンの手から、冷たいうさぎの手が滑り落ちる。



第九話 お化け屋敷にご用心！夢ランドは悪夢の王国?!（後書き）

ジュピター : 『ネフライト！うさぎちゃんをどこにやったんだ！』

ネフライト : 『そう噛み付くな、ジュピター。今回の事に関しては、俺はただの傍観者だ』

マーズ : 『おしゃべりは嫌いよ、マーズ・フレイ…』

声 : 『私を撃てる？セーラー・マーズ？』

マーキュリー : 『そんな…』

うさぎ : 『【美少女戦士セーラーMoon Memories】

月を覆う影！闇の剣士の目覚め』

『月の光は、愛のメッセージ』



## 第十話 月を覆う影！闇の剣士の目覚め

「もうすぐキングもお戻りになりますよ」

私が声をかけると、彼女は一瞬遅れて反応した。ここ数日、彼女の体調は良くない。公務にもキングが一人で出ていた。彼女の白い肌が、その白さを増し、まるで今にも消えてしまいそうだ。

「顔色、悪いですよ？大丈夫ですか、クイーン？」

彼女は疲れたように、静かに微笑んだ。

「私は大丈夫。マーズ、二人だけの時は、昔のように話してくれて構わないのよ？」

そう言われて、私は一瞬戸惑う。そんな様子に彼女は小さく笑った。「あなたは昔からそうよね、『レイちゃん』？」

『レイちゃん』か……。

そう呼ばれ、私の心は懐かしさで溢れそうになる。

「スモール・レディはどうしていらっしやるでしょうね？」

「あの子なら、大丈夫」

彼女は優しい眼差しで、水の入ったグラスを口元に運ぶ。

『な…んて…顔…して…いるの…？せい…ぎの…み、かた…なん…  
でしょう…？し、つか…り、しな…』

白いレースのカーテンが、風でなびいた。近くにおいてあった本が、パタツと音を立てて床に落ちる。私は拾い上げるため、しゃがみこみ、本に手を伸した。パリン。小さな音だった。聞こえてきたガラスの割れる音。私は本を片手に立ち上がり、ゆっくりと振り返った。「セレニティ、様？」

手から拾い上げた本が滑り落ちた。パタツと音を立てて、本は再び床に落ちる。

ちびつさは叫んだ。目の前を歩く彼女。一生懸命走っているはずなのに、距離が縮まらない。逆にどんどんと離れていく。

「うさぎー!」

ふとつさぎの姿が消えた。代わりにドレス姿の女性が振り返る。涙を流すその女性は……。

「ママ?!」

女性がすっと消えた。

「ママ、ママ!」

ちびつさの部屋。

声に気づき、ルナが部屋に入ってきた。ベットに飛び乗り、前脚でうなされているちびつさを揺さぶる。

「ちびつさちゃん、しっかり!」

けれど、ちびつさは起きない。ふとちびつさが寝言を呟いた。

「うさぎ…どこにいるの…」

「ちびつさちゃん…」

ちびつさが寝返りをうった。ルナは反応が遅れ、腕の下敷きになっ  
てしまう。

「ちびつさちゃん、重いよ。ちびつさちゃん」

じたばたとルナは暴れた。

「ママ…」

またちびつさが呟いた。

「ちびつさちゃん…」

同じ頃、歩道橋の上で行きかう車を眺めている一組の男女の姿があった。正確には女が歩道橋を見下ろし、男はそんな彼女の姿を見つ

めていた。

「本当にこれでよかったのか？」

女性の後ろに立っていた男性が声をかけてきた。

「いまさら何言っているの？ やったのはあなたじゃない」

「だが提案したのは、お前だ」

女性はうんざりしたように、ため息をついた。

「私が信じられないの？」

「安心しろ。話に乗るといった以上、約束は守る。単なる好奇心だ」  
女性は面倒そうに口を開いた。

「現状では何も動かない。そう感じたから、あなたに動いてもらっただけ。あの子達にも自覚してもらわないと、何も動かないわ」

女性は振り返り、いたずらっぽく男に笑いかけた。

「そういうあなたはどくなの？ あの娘はいいの？ せつかく戻ってこれたんでしょ？」

女の言葉に、男はあからさまに眉をひそめ、顔を背けた。

「過去の話だ」

「そう…」

女性は又手すりに寄りかかると、空を見上げた。街の明かりで星はほとんど見えない。見えるのはボンヤリと光る月だけ。女性はもう一度小さくため息をつくときいた。

「まったく…一人で突っ走るから、こんな事になるのよ、うざぎ…」

場所も時も変わって、次の日の火川神社。

レイ、亜美、まこと、美奈子。そしてアルテミスとルナの二匹。

「そうなのよ。夜もろくに寝ていないらしいし。寝たと思ったらうなされているみたいなの。それでいて起きているときは、元氣そうにしているから、余計つらいのよ」

「かわいそう…」

「そう、でも元氣出せとは、なかなか言い出しにくいし」

美奈子が困ったように言う。

「まだ衛さんがいるけど、衛さん自身も…」

大切な人が目の前で傷ついたのは知っているのに、その安否がわからない。そのもどかしさ、不安、心配。亜美は無意識の内に唇を噛み締めていた。

「まだうさぎの手がかりは見つからないの!」

すこしイラついた声なのがレイだ。

「すまない、ぼくも亜美も手はつくしているのだけど…」

謝るアルテミスに亜美が切り出した。

「実はその事で、気になることが一つあるの」

「なんだい、亜美ちゃん？」

「実は……」

亜美は切り出したのは良いものの、まだ少し迷っている様子だ。

「亜美ちゃん…?」

心を決めたのか、亜美は思い切って話し出した。

「実は今日、ここに来る途中、なるちゃんに会ったの」

「なるちゃんって、うさぎの中学の時の…」

大阪なる。違う高校に入り、今では会う機会は減ってしまったが、うさぎの中学の頃の親友。もちろんこの四人も面識がある。

「彼女、三條院正人さんじょうていじんまほとを見かけたって…」

「それって…」

「ネフライトの使っていた偽名じゃない!」

レイが驚いたように声をあげた。

ネフライトとなる。何があったかは割愛するとして、お互い、面識はあった。いや、面識以上の関係だった、と言うのが正確だろう。

そんな関係だった以上、見間違いという可能性は少ない。

「女の人と一緒にだったという話なんだけど…」

「もしかしてうさぎちゃん?!」

「それはわからなかったらしいの。けど二人を見かけた場所が問題なのよ…」

亜美は小さなため息をついた。

「どこなのよ、それは…」

まるで知るのが怖いかのようには、レイがゆっくりと疑問を口にする。

「ここ…なの」

「そんなはずないわ！それなら私が…」

「わかってるわ！」

取り乱しそうになるレイを亜美は大声でさえぎった。

「だから、気になるのよ」

「実は私も気になることをあるのですが…」

突然の声に振り返ると、せつなとほたるが立っていた。

「つてうわ?!せつなさんにほたるちゃん？」

「いつたい、いつからそこに…」

相変わらず神出鬼没な二人である。

「せつなさん、気になる事とは…」

先を促す亜美。

「実は私達も見かけたのです、うさぎさんらしき方を」

「どこで…」

「十番街にある、ギヤラクシービルをご存知ですか？」

「ギヤラクシービル…」

まことはまるで噛み締めるように、ビルの名前を繰り返した。

「私は十番中学のほうで…」

「十番中学?!」

ほたるの言葉に、そこへ通っていたまことと亜美が反応する。

「もしかして…」

亜美が言いかけた時だった。せつなの通信機が鳴った。かなりノイズが混じっているが、相手がはるかだと言っただけは、どうにかわかる。

「せつな、聞こえるか？十番倉庫まで来てくれ！お団子頭を……。」  
そこで通信は途切れてしまう。

「みなさん！」

「行こう！」

せつなの声に皆は頷き、走り出した。

夕暮れの街を駆け抜けていく。レイ、美奈子、亜美、そしてまこと。その後ろにせつなとほたるが。まことはふと、隣を走る亜美に声をかけた。

「亜美ちゃん、さつき、何を言いかけていたんだい？」

「みんながうさぎちゃんや、ネフライトを見かけた場所で何か気づかない？」

「何かって……」

会話を訊いていたレイが振り返った。

「今はもうないけど、私、ギャラクシービルに入っていた塾に一時期通っていたの。その塾は私とうさぎちゃんが知り合うきっかけになった、って言うても過言ではないわ」

亜美の言葉にレイはハツとする。

「……そういえば、私はうちの神社でうさぎに……」

「あたしは十番中学に転校してきたのがきっかけだったけ……」

まことはその時の事を思い出しているのか、目を細める。

「そして今向かっている、十番倉庫。あそこは私達が初めてヴィーナスに会った場所よ」

「一体どういふことなのかしら……」

美奈子は走りながら、静かに呟いた。

倉庫前、そこは不自然なぐらい妖魔であふれていた。中心で戦っている二人。ウラヌスとネプチューン。背中をあわせ、戦う二人の姿は、まるで二人の信頼を表しているかのようだ。

「ワールド・シェイキング！」

ウラヌスが放った光の球が、敵をなぎ倒していく。けれど、数が減るのは一瞬だけ。すぐに新たな影が現れ、二人を囲む。

「まったく、きりがないな」

うんざりしたように、ウラヌスが言った。そんな様子にネプチューンはクスリと笑う。うんざりした口調でも、彼女があきらめるような人間ではない事を知っている。

「でも戦わなくては、いけなくてよ？だって…」

「わかっている。中には…」

「彼女あの子がいるのですもの」

そう言っつてネプチューンは敵に右手に持ったタリスマン、【ディーブ・アクア・ミラー】を突きつけた。鏡から一直線に光が伸び、敵を消滅させていく。

「ネプチューン！」

「ウラヌス！」

隙ができた妖魔オウホの包囲網を、マーズ達が駆けてきた。

「おそくつてよ」

「うさぎは？」

「あの中だ」

マーズの問いに、ウラヌスが倉庫の一つに視線を向かわせる。

「私達が敵をひきつけます。その間はみなさんは中に！」

「わかった」

ジュピターが頷いたのを見ると、プルートのウラヌスとネプチューンと視線を交わす。

「デット・スクリーム」

「ディーブ・サブマジ！」

「ワールド・シェイキング！」

三人の放った技が重なり合い、敵をなぎ倒していく。

「今です！」

サターンの声に、内部太陽系戦士の四人は倉庫へと駆け込んだ。四人が中に入った途端、まるで待っていたかのように、シャッターが倉庫の出入り口を塞ぐ。

「悪魔でも彼女たちだけ、と言うわけか…おもしろい」

ウラヌスがまるで戦闘を楽しむかのようにニヤリと笑った。そんな言葉にプルートの静かに微笑んだ。

「教えてあげなくてはなりませんね、セーラー戦士たちが彼女達だけではないことを」

倉庫に入った途端、四戦士たちは違和感に襲われた。まるで水中にいるかのように、なんだかフワフワして安定しない。

「みんな気をつけて、空間がゆがめられているわ！」

マーキュリーが叫んだ瞬間だった。炎の柱が戦士達の足元で突如噴出す。どうにか飛びのく戦士達。けれど攻撃は間髪いれず続く。安定しない空間では、避けるしかない。

「くそっ！」

攻撃できないもどかしさに思わず舌打ちをするジュピター。そんな時、マーズが飛び出した。

「見つけたわ！」

手には『悪霊退散』と書かれた御札を持っている。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」

マーズの手から離れた御札はまるで、刃のように空を切る。

「悪霊退散！！！」

御札は何かに張り付き、燃え上がった。途端に空間のゆがみは消え、戦士達はスタッと地面に着地する。

「さすがだな、セーラー戦士たちよ」

その言葉と共に現れたのはネフライトだった。



「うさぎちゃんはどこにいるんだ？」

「そう噛み付くな、ジュピター。今回の事に関しては、俺はただの傍観者さ」

ジュピターの言葉にも、ネフライトは不敵な笑みを崩さない。

「どづいづこと?!」

「無能なジェダイトはお前達に敗れ、四天王の座を失った。そして新しく四天王として加わった剣士」

「おしゃべりは嫌いよ!マーズ…」

詠唱に入るマーズの前に、黒い影が現れた。マーズは目を見開き、言葉を失う。

「私を撃てる?セーラー・マーズ」

ネフライトと同じ軍服に身を包んだ彼女は、そう訊いて来た。

「うそ…」

呆然とするヴィーナス。

後ろで爆発音がするとシャッターが吹き飛び、ウラヌスたちが入ってきた。同じく目を丸くする外部太陽系戦士達。まるで搾り出すかのように、マーズは彼女の名前を口にした。

「う…さ…ち…」

「私を撃てる?セーラー・マーズ」

もう一度彼女が訊いて来る。次の瞬間、マーズは宙を舞った。壁に叩きつけられ、変身もとける。

「レイちゃん!」

ヴィーナスが駆け寄った。

「私はそんな名前ではないわ。私はダーク・キングダム指揮官、セレニティよ」

「そんな…」

絶句するマーキュリー。

「うそ…どうしてなんだい、うさぎちゃん！うさぎちゃん！！」

ジュピターの悲痛な叫び。セレニティは不敵に笑った。そしてジュピターもまた、見えない力に突き飛ばされる。

「ジュピター！！くそっ！！」

地面に転がるジュピターを見ると、今度はウラヌスが飛び出した。

手には宝剣【スペース・ソード】<sup>タリスマン</sup>を持っている。

「ウラヌス、やめてええ！！」

レイの悲鳴。けれどウラヌスはためらわず、セレニティに向かって剣を振り下ろした。切っ先はまるで見えない壁にあったかのように、跳ね返りそうになる。

「一体どうしてしまったんだ。彼女達の声すら、もう君には届かないのか?!」

「セーラー・ウラヌス、好きよ、強い人は」

ウラヌスはようやくマーズやジュピターが飛ばされたわけを知った。セレニティの右手からの波動攻撃。咄嗟に飛びのくが、かすったのか、足がふらつき思わずしゃがみこんだ。

「ウラヌス！」

ネプチューンが駆け寄る。

ボロボロになったセーラー戦士達を見て戦意をなくしたのか、セレニティはつまらなそうにネフライトに振り返った。まるでおもちゃに遊び飽きた子供のようだ。

「帰りましょう、ネフライト」

しよがないな、そんな表情をみると、まずはネフライトが消える。「待って、うさぎ」

振り向くと、ボロボロのレイが無理やり立ち上がった。左腕を押さえ、立ち上がる際にも苦痛で顔をしかめる。

「今日はほんの挨拶代わり。また会いましょう、『レイさん』」

それだけ言うと、セレニティも姿を消した。レイは足がもつれ、倒れこむ。目からあふれ出てくる大粒の涙。そしてレイの悲痛な叫び

だけが、倉庫の中にこまりました。

「しゅわんしゅん……」

第十話 月を覆つ影！闇の剣士の目覚め（後書き）

うさぎ：『レイちゃん』

レイ：『うさぎ…』

声：『私を撃てる、セーラー・マーズ？』

レイ：『うさぎ…！』

声：『セーラー・マーズ！今は迷わないで戦って！』

レイ：『私は…！』

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

守るべきもののため！レイ苦悩の選択』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十一話 守るべきもののため！レイ苦悩の選択

「セレニティ！」

その言葉に間を置かず、呼ばれた本人が現れた。

皮肉だな。ベリルはそう思った。一番滅ぼしたいと思っていた顔が目の前にある。だがセレニティを引き入れたことで、私は以前の力を取り戻しつつある。彼女の心を蝕む闇のエネルギーが、私に新たな力を与える。

「何でしょうか、クイーン・ベリル様」

「まだまだセーラー戦士共への復讐は始まったばかり、完全なる復活のため、エネルギーを集めてきておくれ」

「よろこんで」

その言葉と共にセレニティは消える。ベリルは表情を変えず、側にいるネフライトに声をかけた。

「ネフライト！」

「はっ」

皆まで言わずに、ネフライトはセレニティを追うように消えた。いや、実際追ったのだ。闇のエネルギーで洗脳したとは言え、仮にも彼女は月の王女<sup>プリンセス</sup>。どんな事で洗脳が切れるかわからない。

いや、洗脳が切れても別にかまわない、ベリルはそうも思ってもいた。洗脳が切れた時、認識するであろう。自分が仲間達と敵対したという事実。その事実は消えない。ただそれだけの事が、彼女を悲しみと絶望のどん底へと突き落とすのに足りない。

「それまで存分に私のために働いてもらうぞ、セレニティ」  
まったく、皮肉な話だ。

ベリルはもう一度、そう思った。

声が聞こえた。

「あつきたいた。あの子よ、靈感少女」

誰かの声。心がうずく。

「なくした財布とか、すぐに言い当てちゃうんだって」

「うわゝ気味悪〜い〜」

気にしちや駄目、そう自分に言い聞かせてきた声。

昔から私はカンが鋭かった。人から見たら、鋭すぎたのかもしれない。だから気味悪がれることが多かった。

ふと違う声が響く。

「レ〜イ、ちゃん」

目の前で笑う彼女。

屈託のない笑顔で私に微笑みかける。私は手を彼女に伸ばした。触れると、彼女の幻影は消える。今度は右から声が聞こえてきた。見ると驚いた顔をしながら、私を尊敬の眼差しで見つめる彼女がいた。

「すっご〜い、レイちゃんってがんばり屋さんなんだあ〜？」

あまりにもまつすくな表情に私は苦笑するしかない。

「レイさん」

またうさぎの姿は消え、違う幻影が再び現れる。自分を『レイさん』と呼ぶのは、記憶をなくしてからうさぎだ。

そして……。

「私を撃てる、セーラー・マーズ？」

軍服に身を包む彼女。気づくとレイはマーズの姿だった。ゆっくりと構える。この構えは……！

「マーズ……」

やめて！身体が言うことを利かない。

「フレイム……」  
標的をうさぎに定める。  
「スナイパー」

「やめてええ！……！」  
レイは叫び声を上げ、ガバツと起き上がった。  
一瞬、自分がどこにいるのかわからなくなる。  
「夢……か……」

レイは近くにあったクッションを抱きしめ、顔をうずめた。  
「うさぎ……」

その日の午後。

レイは美奈子、まこと、亜美と共にクラウンに座っていた。まことと美奈子の膝にはそれぞれアルテミスとルナが座っている。

「ダーク・キングダムの指揮官……」

美奈子が呟く。どうしても衛が洗脳されていた時の事が重なってしまふ。

「ちびうさちゃんには言わないほうがいいだろうね」

「そうね、うさぎちゃんとは戦わせたくないですし」

まことの言葉に亜美が同調する。

「レイちゃんもそれでいいだろう？」

上の空で反応しないレイに、美奈子がもう一度声をかけた。

「レイちゃん……」

「あっごめん、聞いていなかった」

「困るなあ、しっ……」

口を開こうとするアルテミスを、美奈子は慌てて押さえ込んだ。

「ごめん、私、帰るね」

レイは立ち上がると、クラウンを出て行った。

「何をするんだ、美奈」

抗議をするアルテミス。

「レイちゃんの気持ちもわかってやれよ、アルテミス」

まことが悲しそうに笑う。外を見ると、ちょうどレイが出てきたところだった。

「なんだかんだ言っつうさぎちゃんの事、一番気にかけているのはレイちゃんだからさ……」

レイの姿を見送りながら、まことはそう呟いた。

レイ、しっかりしなさい。自分に何度も叱咤する。でも……。

「きやつ」

考えこんでしまっていたのがいけなかったのだろう。角を曲がる時、人影とぶつかってしまった。宙を舞うスケッチブック。中からもいるんなイラストが道に散らばる。

「いたたた……」

相手は女性だった。歳はレイより上、せつなぐらいだろうか？

「うわっごめんなさい。大丈夫ですか？」

レイは慌てて立ち上がると、女性に手を差し出した。

「ありがとう」

二人で散らばったイラストを拾い集めていく。

「あちゃー、これは使い物にならないわね……」

大体は埃を軽く払うぐらいですんだのだが、一枚はちょうど水溜りに落ちてしまった所為か、ビショビショだ。

「ごめんなさい。私……」

小さくなるレイ。女性はいたずらっぽい目で、レイの顔をじっと見つめた。

「……そうね……」

「はい？」

「あなた、モデルになってくれない？あなたを見ていたら、なんだ



が良い絵が描けるような気がしてきた」

「モデル？えっ？」

思いがけない申し出に、レイは間の抜けた返事しか返せない。

「あっ、自己紹介がまだだったわね。私は、つきかけゆめみ月影夢見。一応、画家、  
つてとこかな？」

「私、レイです。火野レイ。でも私がモデルだなんて……」

「おねがいっ！」

しぶっている、夢見は手を合わせ頭を下げた。

「そうしたら、これも忘れるからさ？」

彼女は上目使いで、さりげなく濡れたイラストを持ち出した。痛い所をつかれ、レイは苦笑しながらも頷くことしかできなかった。一人、いや二人の顔が思い浮かぶ。まったく、どこかの誰かさん達みたいだ。

「……わかりました」

「ありがとうございます！じゃあ、さっそくうちに行きましょう！」

「時空のゆがみができています。セレニティ様がお倒れになったのは、多分それが原因でしょう」

「どういうことか、説明してくれませんか、プルートの様」

ヴィーナスの言葉に、プルートはつらそうに眉をひそめた。そして  
呟く。

「過去が………変わろうとしているのです」

彼女の言葉に、他のセーラー戦士達は絶句する。

「そんな……まさか……」

「クイーンに影響するほどの危機が過去で起きているというのか？  
！」

ウラヌスも動揺を隠せない。ざわめく部屋に、黙っていたエンディ  
ミオンは口を開いた。

「落ち着きたまえ。君達が慌ててどうする……」

部屋は再び沈黙に包まれる。

「プルト、続きを頼む」

「わかりました」

プルトは頷くと、説明を続ける。

「今、ウラヌスは『クイーンに影響するほどの危機』クライシスと言いましたね？けれどそれは少し違います。時空のゆがみが生じているのは、セレニティ様の存在。過去の世界のセレニティ様の身に、何か起きたと考えるほうが妥当だと思います」

エンディミオンはその言葉に考え込むかのように黙り込んだ。沈黙に耐えられなくなったのか、ジユピターが声を上げた。

「くそっ！あたしたちには、何もできないのか！」

見ると、彼女は悔しそうに右手を握り締めている。

「大丈夫だよ」

まるで語りかけるように、エンディミオンは微笑んだ。

「でも、エンディミオン様！」

「セレニティには、多分視えていたのだろう。だからスモール・レディを過去の世界へと送り出した。私達も信じようじゃないか。過去の世界の君達を。スモール・レディを。セレニティもきっと、信じている」

リビングに入るとそこは絵で一杯だった。

「すごい……。これ、全部夢見さんの作品ですか？」

「そうよ。あっレイちゃん、紅茶で良い？」

「はい！」

キッチンから呼びかけられ、レイは答えた。そしてまるで展覧会を周るかのように部屋を周っていく。なんだか幻想的な絵が多い。初めて見るのに、なんだか懐かしい気分になる。ふと一枚の絵に目が止まった。月明かりに照らされているテラスで踊る、一組の男女。

二人だけの舞踏会。自然と、王子と王女、プリンス プリンセスそんな言葉が思い浮かん

でくる。

「うさぎ……」

「気に入った絵でもあったかしら？」

振り向くと、夢見がテーブルに紅茶を運んできたところだった。

「友達に似ていたので……」

夢見がスケッチブックを持ってきたので、レイは椅子に座った。自由にしていて、そう言われレイはカップを口へと運ぶ。

「その友達、うらやましいなあ」

「えっ？」

スケッチブックから目を上げず、夢見は淡々と鉛筆を動かしながら答えた。

「さっきのあなたの様子。それを見ていれば、あなたがどれだけ想っているのか、わかるわ」

そんなに自分がわかりやすく感情をだしていたかと思うと、レイは照れくささに思わず顔を赤らめた。

「でも、悲しい目。何か悩んでいる目」

「すごいですね、何でもわかっちゃう」

レイはもう苦笑するしかなかった。私ってこんなにまっすぐに感情を出せる人間だったか……？そしてそつと心の中で首を振る。それはあの娘こがいてくれたから。

「ねえ、レイちゃん？画家ってね、心を描くのが仕事だと思うの。」

それが自分の心の事だつてあるし、モデルの心の事もあるわ」

「心を……」

「あつごめん、ちょっと動かないで？」

スケッチができてきたのか、レイは慌てて姿勢を直した。

「夢見さん？もし夢見さんの友達が、間違つたことをしていたら、どうします？」

「まずは話し合おうと思うわね」

「でも話合えるような状況じゃなかったら？」

夢見はスケッチブックを隣に置き、少しさめてしまった紅茶を手に

取った。

「難しいわね……」

ゆっくりと紅茶を口に運ぶ。

「そうね、だったら嫌われてもいいから、ひっぱたくと思うわ。そうして伝わる事もあると思うし」

「強いんですね、夢見さんは」

そんなレイの言葉に彼女はクスッと笑った。

「強くないわよ、私は。でもね、レイちゃん……」

「……？」

「人は大切なもののためなら、いくらでも強くなれるものよ」

夜、玄関前で二人は話をしていた。

「ごめんね、こんなに遅くまで引き止めちゃって」

「あついや、楽しかったですよ。夢見さんとお話できて」

「あつそうだ」

そう言つて夢見はもう一度、家に駆け込んだ。手にチラシを持って戻ってくる。

「今度の土曜、展覧会があるんだ。良かったら来て？」

「はい、ぜひ！じゃあ、おやすみなさい」

手を振つて夢見は答える。そしてレイが十分に離れてから、静かに微笑んだ。

「おやすみ、セーラー・マーズ」

居間に入った夢見は、暗がりに向かって話しかけた。

「レイの部屋に勝手にはいるなんて、失礼よ？」

呆れたような口調に、男性は笑みを浮かべながら姿を現した。肩までの長髪。吸い込まれるような黒い瞳。レイが気づいていたなら、身構えたであろう人物。

「『人は大切なもののためなら、いくらでも強くなれるものよ』か……。ずいぶんと手際がいいじゃないか」

男の言葉に夢見はかすかだが眉をひそめた。

「……」

「別に文句は言っていないさ。ただ意外に思ってたな。『彼女』を知っているから、余計にな」

その言葉に夢見はクスッと笑った。

「前にも言っただはずよ。私は『彼女』とは違う。だって、私は……」

十番公園の前まで来ると、突然レイは強烈な耳鳴りに襲われた。

「つく」

うさぎが公園に入っていく姿が見える。

「うさぎ!!」

幻影だとわかっていても、声をかけてしまう。そして手を伸ばす。

「行つては駄目よ!」

知らない声が響き、レイは振り返った。

「誰?!」

耳鳴りは一瞬で消えた。思わずバランスを崩しそうになる。

「みんな、十番公園で妖魔よしまが……」

マーキュリーからの通信に返事もせず、レイは迷わず公園の中へと走っていく。

広場まで行くと、そこにはすでに何人か倒れていた。そんな中マーズの目に飛び込んだのは、倒れるマーキュリーの姿だった。

「マーキュリー!」

助け起こされたマーキュリーの視線が泳ぐ。そしてどうにかマーズの顔を捉えた。

「マーズ…気、をつけて…、敵の、目を…見ては、だ…め…」

グッタリとするマーキュリーにマーズは血相を変えて揺さぶり、彼女の名を呼ぶ。

「マーキュリー!マーキュリー!」

どうしてもうさぎの姿を重ねてしまう。

「マーキュリー！」

ふとマーキュリーが規則正しい寝息を立てているのに気づいた。

「寝ちゃった…?」

「アク・ムーン!!」

「危ない！」

状況がわからないまま、マーズは突き飛ばされた。自分の上にクレセント・ムーンが覆いかぶさっている。妖魔の攻撃から守ってくれたらしい。

「今は迷わないで！戦って、セーラー・マーズ！やられるわよ!!」  
今度は短剣が飛んできた。クレセント・ムーンは瞬時に立ち上がり、叩き落す。みると右手には横笛のようなものを握っている。短剣が飛んできた先を見ると、イラついた様子の彼女の姿があった。

「あなた、誰！」

「私は…」

金色の被衣かじぎがキラリと光る。まるで蝶のようだ。セレニティに向かっ  
ていく、クレセント・ムーン。後を追おうとするマーズは、妖魔  
に行く手をふさがれた。

「クレセント・ムーン!!うさぎ!!」

「お前の相手は、ワタシ」

マーズは唇を噛み締めた。相手の技を自分の技で相殺し、よける。  
うさぎがすぐ側にいるのに!

そんな思いがちらつき、目の前に集中できない。

うさぎ…!!

「マーズ！マーキュリー！」

見ると、ジュピターとヴィーナスが到着したところだった。

「二人共、妖魔の目を見てはいけない！眠らされてしまうわ！」

「もらったあ！」

二人に警告したときだった。一瞬気を抜いたため、妖魔に肩をつか

まれてしまつ。

「しまった」

勢いそのまま押し倒され、目が合ってしまう。まるで何かはじけるように、変身が解けた。

「変身が?!」

次の瞬間、レイはまぶしいぐらいの光に包まれる。まるで底なし沼のようだ。もがけばもがくほど、身体が沈んでいく。

「レイちゃん!!」

手首を掴まれる。いつのまにか戻ってきたのか、クレセント・ムーンが私の手首を掴み、引きずりあげようとしている。

「放して、クレセント・ムーン!このままじゃ、あなたまで……」

「放さないよ!絶対、放さないから!キャッ」

努力もむなしく、穴は二人を吸い込んだ。

「レイちゃん!クレセント・ムーン!!」

私は落ちていく。

まるで深い海に沈んでいくかのように。

ゆっくりと、そして深く。

もう、どうでもいいや、そう思いかけたときだった。

『絶対、放さないから』

そんな余裕はないはずなのに、彼女は私に笑顔を見せた。

「クレセント・ムーン!!」

彼女の名前を叫んでから、私はあたりを見回した。

ここは、どこ……?

「ここはあなたの心の中よ」

声に出していなかったはずの問いに、誰かが答えた。

「クレセント・ムーンは!」

「あの方なら、大丈夫よ。あの方は特別だから」

あの方……?

「でもあなたは大丈夫、レイ？」

「私…？」

声は静かに訊いて来る。

「あなたは迷っている。迷っているから、油断が生まれる。だからあなたは、ここにいろ」

言い返せない。いつもだったら、避けれた攻撃だっただろう。けど

……。

「彼女とは戦えない？」

困ったような、そして言い聞かせるような口調で、声は私に訊く。

私は……。

うさぎの顔が浮かんでは消える。

私は……！

「レイ、あなたの使命はなに！」

私が何も言わないのに、痺れを切らしたのか、今度は厳しい口調だ。

「私の使命……」

彼女を、プリンセス王女を、守る事。声はまたふつと優しくなる。

「そう、だってあなたは、炎の戦士、セーラーマーズなのですもの」

炎の戦士、セーラー・マーズ。でも……。

「私は守れなかった！彼女を、うさぎを守れなかった！」

「だから戦えないの？だからあきらめるの？」

その言葉にハツとする。うさぎはあきらめなかった。タキシード仮面様が洗脳された時も、ちびうさちゃんがブラック・レディとして操られた時も、ほたるちゃんが沈黙のメシアとして目覚めた時も……。いつだってうさぎはあきらめなかった。

「私は……」

「今だからできる事があるんじゃない？今だからやらなきゃいけない事があるんじゃない？プリンセスを守る戦士として、彼女の友達として」

今だからできる事。今だからやらなくてはならない事。

「きつと、彼女もそれを望んでいる」



「もどらなきや」

すると周りの風景が一瞬にして変わった。今まで自分以外何も見えなかったのに、一面に広がる青い空。そして目の前には声の主が立っていた。少し照れたように、彼女は笑う。

「そんなに驚いた顔、しないで、レイ」

「セーラー・マーズ…」

「私はあなたを守護する者。私は炎の戦士、セーラー・マーズ。私はあなた。あなたは私」

「ごめんなさい、私…！」

謝ろうとする私を彼女は微笑みながら、さえぎった。

「覚えていて、私はいつもあなたと共にいるわ。行きなさい、レイ。みんな、待っているわ」

私は大きく頷いた。ゆっくりと息を吸い、そして叫ぶ。

「マーズ・クリスタル・パワー・メイクアップ!!!」

「うわっ」

攻撃がかすり、ジュピターはバランスを崩した。ニヤリと笑う妖魔。妖魔が連続して攻撃をたたみかけようとした瞬間だった。妖魔は炎に包まれ、悲鳴をあげた。同時にジュピターも瞬時に立て直すと、華麗に避ける。

「何者?!」

「私、もう迷わない」

「マーズ!!!」

凜とした声の持ち主に気づき、ヴィーナスは彼女の名をほっとしたように呼んだ。

「お前は、ワタシの悪夢に囚われていたはず!悪夢から抜け出すことができたというのか?!」

「やっと気づけたから、私のやらなきやいけない事に。だから!」

「だったら、もう一度悪夢の世界へと落としてやる!」

妖魔は口から炎を吐き出す。

「炎で私と勝負しようだなんて、10年早いわよ!」

マーズはクスツと笑った。しっかりと妖魔を見据える。

「マーズ・フレイム・スナイパー!!」

マーズが放った炎の矢は、妖魔の炎さえ身にまとい、妖魔を貫いた。

「リフレーツシュー!!」

断末魔をあげ、妖魔は人間へもどった。それが引き金になったのか、倒れていたマーキュリーも気がつく。

「クレセント・ムーンは?!」

マーズの問いには、爆発音が答えた。

「あっちね!」

「行きましょ!」

セレニティは身を翻すと右手のロング・ソードを振り下ろした。それをクレセント・ムーンは横笛で受ける。

「何故?!あなたを見ていると、イラついてくる」

「その理由、あなたが一番わかっているのではないの?」

「あなたに何がわかるというの!」

セレニティは一気に距離をとり、左手をクレセント・ムーンに向ける。クレセント・ムーンは身構える。けれど波動攻撃は襲っては来なかった。飛んできた炎の刃によって、相殺される。

「マーズ!」

「おまたせ、クレセント・ムーン」

無事なマーズの姿を見て、セレニティは悔しそうに舌打ちをする。

「しくじったわね、アク・ムーン」

右手をかざすと、空間に裂け目が生まれた。

「まあ、いいわ。エナジーは十分手に入れた」

「うそぢー!」

マーズの呼びかけに、背中を向けたセレニティの動きが止まった。

「私はあなたを守れなかった。でもきつと、あなたを救ってみせる！」

「あなたに私が撃てるの、セーラー・マーズ？」

「もう、迷わない。その必要があるなら、撃つわ！あなたが帰ってくる場所を守るため！」

「そう」

それだけ言うと、セレニティは振り向かず、空間の裂け目へと消えた。

「マーズ」

クレセント・ムーンが声をかけてきた。不思議そうに振り返るマーズにクレセント・ムーンは笑顔で続ける。

「ありがとね。吹っ切れたのね？」

「ええ」

この人は相変わらず何でも知っているんだな、そうマーズは心の中で思った。

「あなたは一体……」

二人の会話を見守っていたマーキュリーが、クレセント・ムーンに問いをぶつけた。

「ごめんね、まだ言えない。また会いましょう」

まるでその答えから逃げるように、止める間もなく、クレセント・ムーンは去っていた。

「行っちゃった……」

「そうね……」

ヴィーナスの呟きにマーズも頷く。

「あたし達も帰ろうか」

ジュピターが切り出すと、ヴィーナスとマーキュリーが歩き出す。

マーズはふと足を止め、空を見上げた。

「きつとまた一緒に帰れるよね、しゅんぎっ。」

第十一話 守るべきもののため！レイ苦悩の選択（後書き）

美奈子：「今回は戦う事だけでは駄目だと思うの」

美奈子：「強い想いがなければ、ダーク・キングダムには勝てない」

美奈子：「うさぎちゃんも……帰ってこない」

美奈子：「だから、あたし……！」

うさぎ：「【美少女戦士セーラームーン Memories】

届け、歌に込めた想い！美奈子、熱唱！」

「月の光は、愛のメッセージ」

## 第十二話 届け、歌に込めた想い！美奈子、熱唱！

「はあく。やっぱりあたしには無理なのかな？」

ため息をこぼし、美奈子は机に積みあがった本の山に頭を乗せた。隣には開いたままのノート。書いては消し、書いては消し、結局まだ一行も書けてはいない。

美奈子はもう一度小さくため息をついた。

「お勉強かしら？」

肩越しに声をかけられ、美奈子は飛び上がった。

「うつつわ、亜美ちゃん？！」

開いてあったノートに気がついたのか、亜美は覗き込もうとする。

美奈子は慌ててノートを閉じた。

「珍しいわね、美奈子ちゃんと図書館で会うなんて」

「あ、あたしだって、調べ物ぐらいするわよ」

なるべく見られないように、後ろ手で片付けていく。

「手伝つてあげましょうか？」

「大丈夫だから、今終わったところだから！じゃあね」

本と筆記用具をまとめて持つと、そそくさと美奈子は逃げるように、その場を後にした。

「へんな美奈子ちゃん」

亜美は美奈子を見送ると、苦笑しながら呟いた。そして自分も目的の棚へと向かうため、その場を後にする。

その後によつてきた人物がいた。資料を机に置き、座ろうとする。ふと何かに気づいたかのように机の下を覗き込むと、彼女は一冊のノートを拾い上げた。

「あら…？」

「あーびつくりした」

よくよく考えれば、亜美が図書館にいることはぜんぜん不思議ではない。

「勉強好きの亜美ちゃんだし。だって猫に真珠って言うし」

妙に納得している美奈子に、塀の上を歩いていたアルテミスがつ。

「美奈、それを言うなら、猫にマタタビだろ」

「そうそう、猫に小判！」

「だめだ、こりゃ……」

美奈子の怪しいことわざは、今に始まったことではなかったが、アルテミスは呆れたように首を振る。

「なあ、美奈。相談したらどうだい、みんなに。最近夜もずっとかかりつきりだろ？」

「ううん。これはあたし一人でやりたいの」

心配そうなアルテミスの言葉に美奈子は首を横に振った。

「どうしてだい？」

「この前、レイちゃんが言った言葉、覚えている？」

「レイが…？」

『あなたに私が撃てるの、セーラー・マーズ？』

そんな残酷なほどに冷たい質問をしたうさぎちゃん。レイちゃんはひるむことなく、まっすぐと答えた。

『もう、迷わない。その必要があるなら、撃つ！あなたが帰ってくる、この場所を守るため！』

「その時感じたの、レイちゃんの強い思い。あたしも思ったの、負けてられないな〜って」

思い出すように遠くを見ていた美奈子はアルテミスの方へクルリと振り返る。

「それにね、アルテミス。今回は戦う事だけでは、駄目だと思うの。強い思いがなければ、ダーク・キングダムには勝てない。うさぎち

「やんも……帰ってこない」

「そう言うと美奈子はスカートのポケットから、綺麗に折りたたんだチラシを取り出した。」

「だからね、このコンテストで自分の気持ち、確かめたいと思ったの」

【シンガーソングライターコンテスト あなたの思い、歌ってみませんか？】

「美奈がそこまで考えているなら、僕はもう何も言わない。でもあまり無理はするなよ？」

「わかった」

「チラシをしまおうと、美奈子はカバンを開けた。」

「あゝ！ノートがない！」

「図書館に忘れてきたんじゃないのか？」

「あたし、とつてくる！」

「あれ？ないな」

「机の下にもぐり、あたりを探る。けれども見つからない。」

「ここに落ちていると思ったのにな」

「ふと目の前にノートを差し出された。」

「探し物はこれかしら？」

「あたしのノート！」

「美奈子は思わず机の下にもぐっていたことを忘れ、飛び上がった。当然ながら、ゴンっという鈍い音が続く。」

「いたっあゝい」

「シー！！」

「同時に飛んでくる、うるさいと言う図書館利用者の怖い視線。」

「あらあら、ここじゃお話できないから、外出ましょ？」

「ノートを差し出した女性が、苦笑しながらささやいた。」



「はい… たたた」

美奈子は頭をさすりながら頷いた。

「見つかってよかった〜ありがとうございます、えっと……」

図書館の外にあるベンチに座ると、美奈子はノートを見つけてくれた女性に再度、礼を言った。

「夢見<sup>ゆめみ</sup>よ、月影<sup>つきかげ</sup>夢見<sup>ゆめみ</sup>」

「ありがとうございます、夢見さん!」

「どういたしまして、愛野美奈子ちゃん」

えっ? 予想が浮かぶと同時に、美奈子は自分の顔が赤くなっていくのを感じた。そんな美奈子の表情に、夢見はおどけたように謝る。

「ごめっくん。中、見ちゃった」

「うわ〜はずかしい〜」

「恥ずかしがらなくても大丈夫よ、素敵な歌ばかりだったじゃない」  
美奈子は背もたれによりかかり、空を見上げる。

「そう言ってもらえると、嬉しいです。でもなかなか満足できるものができないんですよ〜。時間がもうないのに」

「時間がない?」

夢見が不思議そうな顔を見ると、美奈子はチラシを取り出した。

「ここに、参加しようと思っっているんです。曲はもうできているのに……」

小さくため息をつく美奈子に、夢見は笑顔でうなぐす。

「ぜひ聞かせてよ、美奈子ちゃんの書いた曲」

「いいですよ」

美奈子はノートをパラパラとめくった。出来上がった楽譜もここにはさんであったのだ。改めて見つかったよかつたなと実感する。取り出し、美奈子はラララでメロディを歌いだした。すると夢見は聞き入るように、目を閉じた。

「どづ……でした……?」

歌い終わり、恐る恐ると美奈子は感想を訊いた。

「素敵な曲！」

夢見は拍手をする。

「でも……」

「でも？」

夢見は何か引つかかっている様子だ。

「ちよつと直してもいい？」

「えっ？あっはい」

そんな風に訊かれて、美奈子は楽譜を渡した。夢見は鉛筆を取り出すと、軽く書き込んでいく。

「すごい！夢見さん、もしかして音楽家さん？」

「違う、違う。ほんの趣味よ。趣味。少し手を加えただけ。まあ、心を形にするってところは似ているかもしれないけどね」

意味が分からず、キョトンとしてしていると、夢見は悪戯っぽく笑った。

「さっきのチラシ、よく見てごらん？」

「えっ？」

思いがけない言葉に美奈子はチラシを取り出し、じっくりと眺めた。イラストの隅に小さなサインを見つけた。『Yumemi』とローマ字で書かれている。

「もしかして、この絵を描いたのも」

「ご名答。それが私の仕事」

「すごい。音楽に絵に。あたしとは大違いだ」

「そんなことないよ。さっきの曲だって私はほとんど何もしていないもの」

夢見は腕を組んで考え込む。

「どう言えばいいのかな？そうね、はつきりさせた、ってところがな？」

「はつきり？」

「そう。せつかくのいい曲なのに、迷いで曇っていた、といえはわ

かかるかしら？きつと、何か気にかかる事があるんじゃないの？」

夢見の言葉に美奈子は言葉を失った。不思議な人だ。さつきから、かなりの確に見ている。まさかあたしの迷いまで気がついていたとは、びっくり。

「美奈子ちゃんが誰かのために歌おうとしているのは、曲やノート見ていればわかるわ。そしてその人が、大切な人だとも、よく伝わってくる。後は迷いさえなくなれば、本当にいい曲になると思うの」

「どうすれば？」

「それはあなた自身で見つけなくてはならないわ。自分の気持ちを、そのままぶつけてみるのもいいんじゃない？」

心配そうな顔をする美奈子にそう言っ、夢見は彼女の背中をポンと叩いた。

「大丈夫、美奈子ちゃんなら、書ける！」

少し離れた木の上で、アルテミスは二人を見下ろしていた。夢見が立ち上がると、美奈子は手を振って別れた。アルテミスは夢見が座っていた場所へと着地する。

「アルテミス？」

「今のは、一体誰だい？」

「月影夢見さん、ノートを拾ってくれていたの」

「そう」

「いったいなんだったんだ、今、感じたのは？」

彼女が立ち上がった時、確かに何かを感じた。

優しい月の波動に似た、何か。

アルテミスはそんな事を考えながら、夢見が消えた方向をずっと見守っていた。

コンテスト当日。

会場はすでに結構な人であふれていた。

「うわ〜緊張してきたあ〜」

「大丈夫、美奈ならできるよ!」

「アルテミスの言うとおりだよ、美奈子ちゃん」

思いがけない声に振り向くと、そこには亜美、まこと、そしてレイの三人が立っていた。

「みんな…」

「本当に水臭いんだから、何も言ってくれないんなんで寂しそうな顔をするまことに美奈子はあわてる。

「ごめん、あたし……」

「な〜んてね!」

表情をコロつと変え、まことは美奈子に微笑みかけた。

「わかつているわ、美奈子ちゃん」

「亜美ちゃんまで……」

思わず涙ぐみそうになるのを必死で抑える。

「それにしても、どうして……ってアルテミス!」

一人、いや一匹しかないじゃないの。あたしが彼の名前を怒ったように呼ぶと、案の定、彼は小さくなる。

「おやおや、やっているね」

「はるかさん、みちるさん!」

近づいてくる二人を仲間達は笑顔で迎えた。

「君達も参加するのかい?」

「参加するのは、美奈子ちゃん。あたし達は応援さ」

美奈子の肩をポンつと叩き、まことが答えた。

「あついたいた〜!美奈子ちゃん〜!」

振り返ると、一人の女性が走ってくるどころだった。

「夢見さん!」

「夢見さん…って、えっ？」

美奈子とレイの声が重なる。思わず二人は顔を見合わせた。

「あっ、レイちゃんも。知り合いだったんだ二人。こっちの二人とは、初対面だね」

「水野亜美です」

「あたしは木野まこと」

「私は月影夢見。よろしくね」

夢見は手を差し出し、亜美とまことに自己紹介をした。

「それにしても夢見。この子達と面識あるとは知らなかったわ」

「お互い様よ、みちるさん」

「えー？夢見さん、はるかさん達とも知り合いなんですか？」

大げさに驚く美奈子に、はるかは半ばあきれながら苦笑する。

「オイオイ、美奈子ちゃん。みちるも夢見も、今日の君にとっては、大切な人なんだぞ？」

「えっ？」

はるか言葉に意図を見出せない美奈子に、夢見は悪戯っぽくみちるに話しかけた。

「しょうがない参加者ね。ちゃんとパンフレットに目を通しておかないや駄目でしょ？そう思いません、『海王』審査員？」

「みちるさん、審査員なんですか?!」

みちるも負けずに切り返す。

「ずるいわ、私だけ正体をばらすだなんて、『月影』審査員？」

「え〜〜!!!」

みちるの言葉に美奈子は大声を上げた。夢見は大げさに耳を押さえながら笑う。

「美奈子ちゃん、驚きすぎ。ごめん、ごめん、隠すつもりはなかったのよ」

話をしていると、あたりを見回していた男性が近づいてきた。

「海王さんに、月影さん。こちらにいらしたんですか。打ち合わせがあるので、控え室のほうへお願いできますか？あつ君は参加者だね。参加者はあつちの部屋に」

「じゃあね、美奈子ちゃん。がんばってね！」

「きつと大丈夫。信じているから」

そう言つて、みちると夢見は男性の後に着いていった。

「あれ？はるかさんは一緒に行かないんですか？」

「僕は審査委員ではないからね。君たちと一緒に客席から見よ」

「じゃあ美奈子ちゃん、応援しているからね！」

「うん、あたし、がんばるから！」

美奈子はまるでモデルのようにクルリと回ると、仲間達にウィンクで返した。

そして本番。

次だ。進行役の声がマイクを通し、はっきりと聞こえる。

「次は五番。愛野美奈子さん！」

その声と共に、舞台の上に出て行く。

「同じくコメントをいただいています。『今は少し遠くに行つてしまった友達の事を思つて、書きました。きつとまた一緒に笑える日が来ることを信じて』。では愛野美奈子さんで『月の光』」

前奏が流れ、歌いだそうとした瞬間だった。いきなりライトが消え、会場は暗闇に包まれる。

「えっ」

「何？」

「どうしたんだ」

周りから聞こえてくる戸惑いの声。

その瞬間、スポットライトが一点を照らした。

誰かが立っている。

「はい みなさん、今日はアタシのために集まってくれて、ありがとう」

語尾にハートマークをつけ、以上に甲高い声。

「なんだ、あいつは」

「つまみ出せ」

そんな様子も気にならず、人影は続ける。

「お礼にアタシの取っておきの歌を、聞かせて、アゲルタイトルは『妖・魔・に・ラブソングを』」

人影は持っていたギターをかき鳴らした。不協和音が会場に響きわたる。

「何これっ……」

「力が……」

客席に座っていた観客達は次々と気を失っていく。意識を失わないでいるのは、戦士達だけぐらいだ。それでも耳を塞ぎ、何もできないでいる。

「デープ・サブマージ！」

凜とした声が響き、不協和音が消えた。

「今よ！」

他の戦士達が変身する中、ネプチューンの隣をウラヌスが飛び出す。

「アタシのコンサートを邪魔する人はお仕置きよ？」

「できるものなら、やってみるんだな」

ウラヌスは一気に間をつめ、格闘戦に持ち込もうとする。けれど妖魔は空中へと飛び上がった。

「逃がさないわよ！ヴィーナス・ラブ・アンド・ビューティー・シヨック！」

妖魔は黄色い悲鳴をあげながら、ヴィーナスの攻撃を器用に避けた。

「もう、あぶないじゃない！」

相変わらず語尾を上げ、ハートマークを連発する妖魔に、ステージに上がってきたジューピターはあきれたように言った。

「いちいち癪にさわる相手だね」

技を繰り出そうとする身構える戦士たち。その時、空間に裂け目ができ、彼女が現れた。

「構わないわ。やってしまいなさい、アイドル！」

「うさぎちゃん！」

「わっかかりまし〜たあ〜セレニティ様」

おどけた返事をして、妖魔はひざまずいた。

一瞬、妖魔の姿がぼやける。そして次の瞬間、妖魔は六体に分かれていた。それぞれセーラー戦士たちに飛び掛っていく。

「どうせ、幻なんでしょ！」

そう思つて、油断したのがいけなかった。

「誰が幻だつて〜？」

ヴィーナスは一気に間をつめられ、突き飛ばされた。

「全部、実体?!」

体制を立て直す間を与えず、妖魔がヴィーナスに飛び掛った。

「ヴィーナス！」

よけられない、思わず顔を背ける。

けれど、攻撃はやっては来なかった。

目を開けると、光の刃が妖魔のギターに突き刺さっている。妖魔の顔から余裕の表情がなくなるのが、手に取るようにわかった。刺さった場所からひびが入り、ギターが砕け散る。同時に妖魔は断末魔を上げ、後を追うかのように消えた。

「だれ！」

まるで金色の蝶のように、クレセント・ムーンが彼女の前に舞い降りる。

「げんげつ幻月の戦士、クレセント・ムーン。ここに参上」

「みんな！妖魔の弱点はギターよ！」



次々と倒されていく妖魔の分身。セレニティは怒ったように手を握り締めていた。

「また、あなたなの？」

そうイラついたように言うと、セレニティはクレセント・ムーンに切りかかっていった。右手にはいつの間にか、剣が握られている。

「あぶない！」

背中を向けていたのにもかかわらず、クレセント・ムーンは瞬時に向き直ると攻撃を受け止めた。

「ヴィーナス！歌って！」

戦いながら、クレセント・ムーンが叫んだ。戸惑うヴィーナスに厳しい言葉をぶつける。

「彼女のために書いたんでしょ！！美奈子ちゃん！！」

「何、ごちゃごちゃ言ってるの！」

鋭い一閃にクレセント・ムーンは体制を崩した。

「クレセント・ムーン！」

マーズが悲鳴を上げた。

「もらった！」

新たな攻撃に、セレニティが剣を振りかぶった時だった。

彼女の動きが止まる。見るとヴィーナスが歌っていた。

最初は戸惑いながら小さな声で。でもだんだんと声は大きくなっていく。大きくなっていく歌声につれ、セレニティが頭を抑え、苦しみ始める。

「歌を…やめ…」

「やめては駄目！歌って、ヴィーナス」

「やめて…！」

セレニティはヴィーナスに右手を向けた。クレセント・ムーンが間

に飛び込む。セレニティの攻撃を一身に受け、クレセント・ムーンはしゃがみこんだ。

「クレセント・ムーン！」

助け起こそうとするヴィーナスの手を乱暴に振り払い、クレセント・ムーンはよろめきながらも、セレニティをしつかりと見据え、立ち上がった。

「あなた自身わかってているはずよ！今のその姿があなたの本当の姿じゃないことぐらい！だから苦しいんでしょ？だから痛いんでしょ？あなたの場所はここよ、うさぎ！」

「私は…ダーク・キングダム of 剣士、セレニティよ！」

叫び返す声には、戸惑いが感じられる。畳み掛けるようにマーズが続けた。

「じゃあ、なぜあなたは泣いているの！」

その言葉にはつとしたように、セレニティは自分の頬に触れた。マーズがそつと手を差します。

「おねがい。戻ってきて、うさぎ」

差し出された手に、セレニティが触れようとした瞬間だった。彼女の身体が黒い影に包まれる。彼女は苦しげな悲鳴を上げた。

「うさぎ！」

「うさぎちゃん！」

力なく倒れる彼女のそばへ駆け寄る暇も与えず、ネフライトが現れた。そして意識のないセレニティを抱き上げる。

「ネフライト、貴様！」

ウラヌスが飛び出す。けれど間に合わず、ネフライトは姿を消した。

「うさぎちゃん…」

悲しそうに呟くヴィーナスに、元気付けるかのようにマーズはポンと彼女の肩を叩いた。

「大丈夫。あなたの歌はちゃんと、うさぎに届いていた」

「マーズ…」

「あれっクレセント・ムーンは？」

ジューピターの声にヴィーナスは辺りを見回した。あたしをかばって怪我しているはずなのに。

「ネプチューンとウラヌスもいないわ」

あたしは思わずマーズと顔を見合わせた。嫌な予感がする。

当のクレセント・ムーンは会場の外に居た。右肩をかばいながら、その場を後にしようとする。けれど柱の影から出てきた二人が、道を塞いだ。

「今日は逃がさないぜ、クレセント・ムーン」

「あなたの正体を教えてもらうまではね」

ウラヌスとネプチューンの二人だ。痛みで顔を引きつらせながらも、クレセント・ムーンはおどけたように答えた。

「あらら、二人には見つかったわね」

「教えて、あなたは一体何者なの！」

にらみ合い。お互い、一步も引こうとはしない。

「言えない…って言ったら？」

「少し手荒なまねをしても、聞きだしてやるまでさ。ワールド・シ  
エイキング」

先手必勝とウラヌスは、技を放った。地面を這っていく光の球体をクレセント・ムーンは咄嗟に避けた。けれど怪我の所為か、体制を崩す。

「やめてええ！！」

ヴィーナスの悲鳴に似た叫びが、張り詰めていた緊張感を破った。クレセント・ムーンが瞬時に二人の間を駆け抜けていく。

「また会いましょう、お二人さん」

「しまった！」

追いかけてよとするウラヌスをヴィーナスが呼び止める。

「ウラヌス、ネプチューン！どうして！」

「クレセント・ムーンは私たちの事を何度も助けてくれた。敵じゃないわ！」

必死に訴えるマーズ。そんなマーズにネプチューンは困ったような目で答え、ウラヌスは厳しい表情を崩さず、マーズにある問いを叩きつけた。

「彼女がネフライトと繋がっていると知っても、同じ事を言えるのか、セーラー・マーズ！」

第十二話 届け、歌に込めた想い！美奈子、熱唱！（後書き）

うさぎぎ…『えへまこちゃん、クッキー作るの〜？』

まこと…『あっうさぎちゃん?!』

うさぎぎ…『一人でずるい、ずるい、ずるい〜あたし出番、少ないの  
に〜』

まこと…『こっ今度作ってあげるからさ、機嫌直してよ〜』

うさぎぎ…『（グスッ）ホント？（上目遣い）』

うさぎぎ…『【美少女戦士セーラームーン Memories】  
クッキーは思い出の味？まことの手作りクッキー』

『月の光は、愛のメッセージ』

### 第十三話 クッキーは思い出の味？まことの手作りクッキー

「気分はどうだ」

目覚めたセレニティはまだ視線が定まらないのか、虚ろな目で俺を見つめた。

「……………ネフ、ライト……………」

「もう少し休め」

ベッドに腰掛け、俺は彼女の額に触れた。彼女のまぶたはどんどんと重たくなり、やがて規則正しい寝息が聞こえてきた。俺はペンダントを開け、枕元においた。優しいメロディが流れ出す。

「一時の安らぎ、誰も文句は言わないだろう」

亜美、美奈子、まこと、レイの四人は珍しく火川神社ではなく、十番公園に集まっていた。ブランコに亜美と美奈子がすわり、まこととレイは側にぼんやりと立っていた。

「彼女がネフライトと繋がっていると知っても、同じ事をいえるのか、セーラー・マーズ！」

「うそ……………」

呆然とするマーズに、ウラヌスはうんざりとしたように、顔をしかめる。

「助けてくれたから、敵じゃない、か……………。相変わらず甘いな」

「ウラヌス」

そんなウラヌスを嗜める<sup>たしな</sup>ように、ネプチューンが彼女の名前を呼んだ。そして困ったような顔で、ネプチューンは内部系戦士達に向き直る。

「助けてくれた。それは認めるわ。でもね、私達は見てしまったの、彼女がネフライトと話している姿を」

『そんな……』

『その時彼女は、私達に気づいた上でこう言ったの。自分の目的のためなら、何だって利用するって……』

『真意の見えない相手を、君達は簡単に信用できるのか？僕はいやだね』

気まずい沈黙が流れる中、話を切り出したのはレイだった。

「やっぱり私は、クレセント・ムーンが敵には思えないわ」

「私も。何度も私たちを助けてくれた。敵だとしたら、銀水晶を狙わないのはおかしいと思うの」

亜美がうさぎのブローチを眺めながら、呟く。

「だったら目的は？あたしたちの正体も知っている様子だったし」  
「まことが髪を？き揚げる。彼女の考えるときの癖だ。」

「もしかして、うさぎちゃんを元にもどそうとしているんじゃない？」

楽観的な見方なのは、美奈子だ。

「だったら、正体を明かしてくれてもいいのに……」

「そうですね」

レイの呟きに新たな声が会話に加わる。

「せつなさん？！」

「いつの間に……」

相変わらずの神出鬼没っぷりに半ばあきれながらも、レイはせつなに意見を求めた。

「せつなさんはどう、思います？やっぱり、はるかさんやみちるさんの様に……」

「確かに二人が警戒するのは、わかります。でもわかってください。それはあなた達より大きな力を与えられたものとしての警戒。それが私たち、外部太陽系戦士のつとめでもあり、使命でもあるのです」  
その言葉に戦士達はうなだれる。やはり考え方では外部系戦士たちと、ぶつかってしまう事が多い。今までだって、何度もあった。

「ネフライトと繋がっていた、その事実は見過ごせませんが……あそこまで警戒はしなくていいと思っています。彼女からは……そうですね、うさぎさんと同じエネルギーを感じるのです」「うさぎと同じ…?」

「プー！みんな！」

そんな声が戦士達に考える間を与えなかった。

「こんにちわ、ちびうさちゃん」

亜美が少女を笑顔で迎える。

「じゃあ、行こっか？」

まことが訊く。するとちびうさは無邪気につなずいた。

「行くつて？」

不思議そうに訊く亜美に、まことは『しまった』という表情で頭をかか。

「あれっ？言ってなかったけ？あたしの知り合いで料理教室やっている人がいるんだ。あたし、たまに手伝っていて」

「今日、クッキー焼くんだ！」

ちびうさがうれしそうに笑った。

「で、ちびうさちゃんを誘ったってわけさ」

「ずっる〜い。まこちゃん言ってくれたら……」

「つまみ食いに行っただかしら？」

レイの言葉に美奈子はこげそうになる。

「レイちゃん、意地悪〜。あたしは……」

美奈子は『彼女』の名前を口にしようになって、あわてて飲み込んだ。

「そんなに食い意地、張ってませんよ〜だ。そりゃ、もちろん食べたいとは思っけど……」

小さく付け足す美奈子にまことは苦笑する。

「ごめん、ごめん。今度みんなの分も焼くからさ？今日は見逃して」



手を合わせ、上目遣いで美奈子を見る。

「しょうがないな、今日だけよ」

「サンキュっ。じゃあ、行こうか、ちびうさちゃん」

「みんな、またね」

レイたちは二人を手を振って見送った。そして二人の姿が見えなくなったところで、レイは咎めるように美奈子に言った。

「美奈子ちゃん、気をつけてね」

「ごめん」

うさぎがいなくなってから数日。衛が大学の関係で急にアメリカに飛んだのが重なったせいか、ちびうさは、うさぎが衛とアメリカにいると思ひ込みはじめた。最初は戸惑いを隠せなかった戦士達だったが、その日を境に戻ってくる彼女の笑顔。うさぎが傷ついたことを忘れ、無邪気に振り舞うちびうさに、とうとう本当の事を戦士達は告げられずにいた。

「でも、ずっと隠し通すことはできないわ」

亜美の言葉は、まるで重りのように伸び掛かった。

『……………』

誰かが呼んでいる。

『……………』

違う。私は……………。

『うさぎ』

温かい光に包まれた誰かは、手を差し出した。

ワタシハ……………。

その手に触れようとした時だった。地面が消え、私は暗闇に投げ出された。

「いやあー！」

ガバツと起き上がり、あたりを見回す。

「ここは……」

自分の部屋。頭が重く、記憶がはつきりしない。

「私は……」

セレニティ。ダーク・キングダム の指揮官。そう、それが私。まるで自分に言い聞かせるように、確認する。

ふと、無意識に動かした右手が硬いものに触った。

「ペンダント……?」

ちびうさとまことの到着を、黄色いエプロンをつけた女性が出迎えた。

「あつまこちゃん、こんにちわ。可愛らしいお客さんつれてきてくれたのね」

「この前話した、ちびうさちゃん。ちびうさちゃん、この人がこの先生の早苗さん」

「ちびうさです。よろしくお願いします」

エプロンで手を拭きながら、早苗はクスリと笑った。

「ふふっ、こんにちわ。そうそう、私のほうもゲストがいるの」

そんな話をしていると、当の本人が入ってきた。

「夢見、こつちこつち!」

手招きすると、彼女がやってきた。

「あっ、まこちゃん」

まことに気づき、夢見が笑顔になる。

「夢見さん、こんにちわ」

「えっ?二人共、知り合いだったの?」

キョトンとする早苗に、まことは夢見と視線を交わした。

「じゃあ、ちようどいいわ。彼女の事はお願い。ちびうさちゃん、

私たちは向こうよ」

「はい」

料理教室は無事終わり、夢見は後片付けをするまことを眺めながら、

手帳に何かを書き込んでいた。

「夢見さん、今日はどうでした？」

まことは後片付けの手を休めずに、彼女に話しかけた。すると、夢見は手帳から目を上げた。

「すごく楽しかったわ。思わず、取材って事、忘れるぐらい」

「取材？」

まことが訊き返すと、夢見は苦笑いしながら手帳を見せた。なにやら下書きのようなものがいろいろと描かれている。

「私がイラストレーターって事は知ってるでしょ？それでちょっと面倒な事引き受けちゃったのよね…。テーマはお菓子」

「へえ」

「でも私、料理はぜんぜんだから、早苗さんに泣きついたわけ」

夢見はまるでいたずらが見つかつた子供のように、ペロツと舌を出した。

「私はどうかしたって？」

自分の名前だけ聞こえたのか、早苗が不思議そうな顔をしながら、部屋に入ってきた。

「何も」

わざと含みを持たせて、夢見は無邪気に笑った。

「まったく……」

早苗は今度はまことに向き直る。手を目の前であわせ、上目遣いでまことを見る。まことは『しょうがないな』、と小さなため息をついた。

「用事が入ったんですね……？」

「そうごつめん、まこちゃん。向こうの後片付けも頼めるかしら？」

「わかりました」

「うわっもう、こんな時間？じゃあ、あとお願い。バイト料はその分プラスするから！」

そう言つて、早苗はあわてて部屋を出て行つた。

「あらら。忙しい人ね」

やり取りを見守つていた夢見は手帳を置くと、苦笑しながら立ち上がった。

「まこちゃん、私も手伝うわ」

「いいですよ。あたしの仕事だし」

「二人でやればすぐでしょ？早く終わらせて、どっか夕御飯、食べるに行こ？」

「はい」

夢見が洗つた料理器具や皿を、まこことが手際よく拭いてしまつていく。夢見は洗う手を休めずに、まことに話しかけた。

「まこちゃんつて、料理…好きでしょ？」

夢見はまるで、恋人の事を訊くかのように楽しげに訊いてきた。そんな問いにまこことは素直に答える。

「好きです」

「やつぱり。見ていてすぐわかつたわ」

「特にクッキーみたいに、みんなで作るのは一番楽しいですよ？クッキーと一緒に思い出もできますし」

あたしは夢見さんの言葉に、自然とみんなでクッキーを焼いた時の事を思い出していた。

レイちゃん、美奈子ちゃん、亜美ちゃん。うさぎちゃんにちびうさちゃん。みんなであたしの家に集まつたときの事。亜美ちゃんはあたしが教えることもなく、手際よく作業していて、レイちゃんも結構うまかつたよな。美奈子ちゃんは…美奈子ちゃんなりにはがんばつていたと思う。けど…やはり彼女らしいというか、なんと言うか。そしてうさぎちゃんにちびうさちゃん。あの二人はクッキー焼きなながらもケンカしていたよな。まったくそっくりな親子だ。

心が温かくなると同時に、当たり前のようにうずく。何もできなかつた無力な自分。そしていまだに変化しない現状。

「ふふっ、クッキーは思い出の味ってとこね」

ふと気づくと、夢見さんがあたしの顔をじっと見て笑っていた。思いついて出している間、作業の手も止まっていたらしい。

「はは、ホントだ」

あんな風にまたみんなと一緒に笑うためにも、あたしは……。あたしは改めて自分に言い聞かせる。

「あたし、ゴミ出していきますね」

このゴミは、外にまとめて置くのが決まりになっている。あたしはビニール袋を片手に、夢見さんに声をかけた。片付けも終わったので、彼女はまた手帳とにらめっこをしている。

「行ってらっしゃい」

外はすでに暗くなり、街灯がポツポツと、明かりを灯し始める時間帯になっていた。そんな中、道を走る一人の少女の姿があった。

「あたしのバカバカ」

彼女は自分を叱咤する。ちびうさだった。

「忘れ物するなんて。これじゃ……」

まるでバカうさぎと同じじゃない。そう心の中で呟いた途端、何故かそれは波紋のように広がった。走る速度も自然と落ちる。

うさぎと同じ。

『うさぎ』と同じ。

『うさぎ』。

彼女の名前が何度も心の中で木霊する。

「うさぎは、まもちゃんとアメリカ。何、変な心配しているんだろ

う

ちびうさはその不安を振り落とそうとするかのように、頭を振り、また足を速めた。

「まだ、まこちゃんか早苗先生いるかな？」

角をまがると、料理教室が開かれた家が見えてくる。ちょうど玄関のところまことが立っていた。

「まこちゃん！」

名前を呼ばれ、道のほうを見てみると、思いがけない少女が走ってくるどころだった。

「ちびうさちゃん？」

どうしたんだい？そう続けようとした時だった。何かが割れるような音に、夢見の悲鳴。庭のほうに夢見がまるで突き飛ばされたかのように、転がり出てきた。

「夢見さん！」

動かないところを見ると、意識を失ってしまったらしい。その後を追って出てくる奇妙な形の影。

「まこちゃん！」

「ちびうさちゃん、とにかく変身だ」

「オルゴール」

ロボットのような姿のその影は、意識のない夢見に触れようとした。「そこまで！」

ジュピターの声に妖魔まじまの動きが止まる。ちびムーンはその間に夢見に駆け寄り、彼女の身体をゆすった。

「夢見さん！夢見さん！」

「あなたたちは……」

少女の姿を視線に捕らえると、頭を抑えながら夢見は立ち上がった。

「ちびムーン！夢見さんを安全なところに」

「わかった！」

ジユピターは妖魔を見据えながらも、ちびムーンが混乱する夢見を連れ、その場を離れたのを確認する。

「それにしても、どうしてこんな所に…？」

でもこれで戦える。そう思った反面、腑に落ちないところもあった。妖魔が襲い掛かってこない。それどころが、ジユピターの事も目に入っていない様子だ。まるで何かを探しているかのよう。

「なんだか調子狂うな」

でも動くたびに、巨体がどこかにあたり、周りを少しずつ壊している。

「考えている暇はないか。早く倒さないと…スパークリング・ワイド・プレッシャー！」

稲妻の攻撃を妖魔は簡単に避ける。いや、避けたのは偶然だったのかもしれない。今まで定めていなかった妖魔の動きが、狙いをつけたように逆方向へと変わった。まるで、探し物が見つかったかのように、巨体に似合わないスピードで走っていく。

「あつこら、待て！」

「ジユピター！」

妖魔との追いかけつこの途中、後ろからヴィーナスが合流した。妖魔は十番公園の中へと入っていく。そして広場にでたところで、まるで妖魔を挟み撃ちするかのように前方にマーズとマーキュリーが現れた。

「ナイス！」

「おまたせ」

「みんな、気をつける！この妖魔、なんだか様子がおかしいんだ！前方の二人を気にすることもなく妖魔はまた立ち止まり、あたりを見回している。

「私に任せて！」

ジユピターの警告に何かに気づいたのか、マーズが飛び出した。手

には『悪霊退散』と書かれた御札を持っている。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」

マーズの手から離れた御札はまるで、刃のように空を切る。

「悪霊退散!!」

御札は燃え上がると、妖魔も姿を変えた。巨大な影はどんどん小さくなり、最後には小さなものがポトリと地面に落ちた。そして子守唄のようなメロディが流れ出す。

「オルゴール…?」

マーズが拾い上げようと近づきかけた時、少女の声が後ろから聞こえてきた。

「みんな!ここにいた〜」

振り返るとちびムーンが走ってくる所だった。

「ようやく見つけたと思ったら、もう倒されていたなんてね」

背後から聞こえてきた声に、マーズは思わず息を飲んだ。目の前のちびムーンの顔から血の気が引いていくのが、手に取るようにわかる。彼女は目を大きく見開き、呆然とオルゴールを拾い上げる人物を見つめていた。

「う…そ…」

「可愛らしい、セーラー戦士ね。あなたとは初めて会うわね」

冷たい微笑を向け、彼女の言葉はちびムーンの心を凍りつかせた。

「う…さ…ぎ…」

「うさぎ? 私は、ダーク・キングダム の指揮官、セレニティよ」

「うさぎい!」

走り出しそうになるちびムーンを、マーズは手で征した。

「今日は別に戦いに来たわけではないわ。私はこれを取りに来ただけ」

セレニティはオルゴールを左手に持ち替え、右手をかざす。一瞬の内に空間に裂け目が出来上がる。

「また会いましょう、セーラー戦士のみんな」



そう言い残すと、セレニティは姿を消した。

「みんな知っていたんだ…」

内部系戦士達は何も言えず、少女を見つめていた。うつむき、握り締めた右手は、かすかだが震えている。

「みんな知っていたのに、何も言ってくれなかったの？あたしには何も！」

夜の十番公園に悲鳴のような少女の叫び声が響いた。

「ちびうさちゃん…」

かける言葉が見つからず、レイは少女の名前を呼んだ。

「みんなのバカア！！！」

「ちびうさちゃん！！！」

涙を溜め走り去る少女の小さな後姿を追うことができず、まことはただ悲しげに彼女が消えた方を見つめていた。

第十三話 クッキーは思い出の味？まことの手作りクッキー（後書き）

はるか：『誰だって犠牲者は出たくない。それで全世界が救われるならば、お前ならどうする！』

みちる：『それが私たちの使命なのよ』

うさぎ：『タリスマンなんなくても、世界は救える！』

うさぎ：『あたしが、救ってみせるから・・・』

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】  
運命の出会い！ウラヌスの遠い日』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十四話 運命の出会い！ウラヌスの遠い日

「みんな、知っていたの……？」

「知っていたのに、あたしには何も教えてくれなかったの？」

少女は膝を抱え込み、呟いた。

「みんなの……バカ……」

蘇ってくる記憶。

あたしを守るために現れた影。

あたしを守るために倒れた影。

あたしの所為だったのに……。

全部、全部あたしの所為だったのに！

こんな、こんな大切な事、忘れていたなんて……！

「一番のバカはあたしじゃん……」

ポツリポツリと振り出した雨は少女の頬を伝い、地面へと落ちた。

いや、それは彼女の涙だったのかもしれない。

大人気なくて、泣き虫で……。

でもまっすぐで、強くて……。

少女の脳裏に彼女の姿が浮かんでは消える。そして……彼女はダー

ク・キングダム指揮官と名乗った。まるで突き刺さったトゲのよ

うに、心をうずかせる。

「うざぎ……あたし、どうすればいいの……？」

頼りなく呟かれた少女の言葉は、強くなる雨音に飲み込まれた。

「行ってやらなくても、いいのか？」

男性の言葉に女性は顔を背けた。

「私に……その資格はないわ」

「資格なら十分あるじゃないか。だってお前は……」

「私と彼女は同じ存在かもしれない。でもやっぱり、私は彼女とは違うわ」

女性は寂しそうに呟いた。彼女の視線の先には座り込んでいる少女の姿がある。

「様はお前がどうしたいか、じゃないのか？お前の顔には、あの子の側にいたい。そうはつきりと書いてあるぞ？」

渋る女性の背中を男性はそっと押す。女性が動きかけた時だった。視線の先に、少女に近づくと人影が写り、女性は足を止めた。

ふと、雨がさえぎられた。赤い傘だ。顔を上げると、心配そうに少女を見つめる女性の顔があった。

「スモール・レディ……」

「プーも知っていたの？」

『プーも知っていたの？』その問いが、いろいろな事を示しているのを、女性はわかっていった。申し訳なさそうに、女性はうなずく。

「どうして……」

小さな身体を震わせ、まるで搾り出すかのように少女はその問いを口にした。抑えていた声もだんだんと大きくなり、最後には叫びへと変わる。

「どうして、何も言ってくれなかったの！どうして！」

「スモール・レディ！」

女性は濡れることも気に留めず、持っていた傘を投げ出した。雨にぬれ、冷えてしまった小さな身体。彼女の口から発せられる悲痛な叫び。全てを包み込むかのように、女性は彼女をしっかりと抱きしめた。少女は始めは抵抗しようとしたが、やがて抵抗をやめ、小さな声で繰り返し呟いた。

「大っきらい。プーなんて大っきらい……大っきらいなんだから……」

「こんな日は……あの日の事、思い出すわね」

「えっ？」

驚いてみちるに目をやると、彼女は紅茶の入ったカップを手に取り、口元へ運ぶところだった。

「あなたも、あの日の事、思い出していたのではなくて？」

優しい、おだやかな表情でみちるが訊いて来る。僕は苦笑するしかなかった。いつもの事だが、彼女には敵わないと改めて思う。

「ああ」

そう答えてから、僕はまた窓の外を見た。空は灰色の雲で覆われ、シトシトと雨は降り続ける。

あの日も、こんな淀んだ日だった。

タリスマンが、そして、聖杯が現れたあの日。

僕達は世界の破滅を阻止するため、聖杯へ導くと言われる、三つのタリスマンを探していた。それを救世主<sup>メシア</sup>に託すため。僕達は何を犠牲にしても、たとえどんな手段を使っても、タリスマンを手に入れるつもりだった。だから僕達は、彼女達ともぶつかりました。

『誰だつて犠牲者は出したくない、だがそれで全世界が救われるならば、お前ならどうする！』

『それが私たちの使命なのよ』

『タリスマンなんかなくても、世界は救える！』

『あたしが、救ってみせるから……』

「大丈夫。彼女は戻ってくるわ」

まるで僕の心を見通すかのように、みちるが言った。そして無意識

の内に握り締めていた僕の手にそつと触れる。

「みちる……」

チャイムが鳴り、みちるが立ち上がった。

「こんな時間に、誰かしら？」

来客の予定はない。僕はみちるの後を追ひ、玄関へと向かう。

「こんばんわ、みちるさん、はるかさん」

ドアを開けるとそこには思いがけない人物が立っていた。

「夢見？」

「二人を連れてきたの」

彼女の後ろから、せつなとちびうさが現れる。

「せつな？ちびうさちゃん？二人共びしょ濡れではなくて?!さっ早く中へ。風邪を引いてしまっわ」

みちるが濡れた二人を中へと促し、二階へと連れて行く。

「ありがとう、夢見。二人を送ってくれて」

そつ礼を言つと、彼女は笑顔で首を振つた。

「別にお礼を言われることはしてはいないわ。当たり前前の事をしただけ。じゃあ、私はこれで」

僕は一礼して、去ろうとする彼女を咄嗟に引き止めた。

「せつかくだから、少しあがつていかないか？」

「…じゃあ、お言葉に甘えて」

居間のソファーに、それぞれ腰掛けてからしばらくすると、みちるが部屋に戻ってきた。

「どうだい、おちびちゃんの様子は？」

「眠ってしまったみたい。大丈夫、せつなが側にいるわ」

「そっか」

「夢見、ありがとう。二人を送ってくれて」

小さく笑つと、夢見は首を振つた。

「はるかさんにも言ったけど、私は別にお礼を言われるようなことしてないわ。当たり前前の事をしただけ」

みちるは紅茶を新しく入れ直し、夢見の前にカップを置いた。  
「ありがとう」

「ねえ、プー」

小さなスタンドランプだけが点る、暗い部屋。ベッドで横になって  
いるちびうさのすぐ側に、せつなは座っていた。

「なんですか、スモール・レディ」

「さつきはごめんなさい、嫌いつて言っちゃって……」

せつなはかすかに微笑むと何も言わずに首を振った。

「プー。あたし、どうしたらいいのかな？」

少女は落ち着いた声で、問いをせつなに向ける。せつなは静かな声  
で、まるで昔話をするかのように語りだした。

「スモール・レディ。人には、それぞれ使命があるものです」

「使命？」

「ええ。それはその人にしかできないこと。私にしかできない事があるように、スモール・レディ、あなたにしかできない事もあるはず  
です」

「あたしにしかできない事」

思いにふけるちびうさに、せつなは優しく声をかける。

「だから、ネオ・クイーン・セレニティ様も、スモール・レディを  
この時代に来るよう、おっしゃったのではないでしょうか」

「訊かないのか？」

一瞬困ったような顔をし、夢見は紅茶を口に含んだ。

「いちおう、踏み入っていい場所とそうじゃない場所はわきまえて  
いるつもり」

その言葉に、はるかほかすかに目を細めたが、何も言わなかった。

代わりに、はるか隣の隣に座ったみちるが話を続ける。

「そういえば、夢見。せつなと面識あったかしら？」

「いいえ、でもちびうさちゃんには会ったことあったし。あの状態の二人を放っておく事は……どうしても出来なかった」

二人に出会った時のことを思い出しているのか、夢見はどこか遠くを見ている。そんな彼女の様子に、みちるは素直な感想を述べた。

「優しいのね、夢見は」

今度は夢見が顔をしかめる番だった。静かに頭を横にふる。その顔がどこか寂しげにも見えたのは、見間違いだっただろうか？

「優しくしないでしょ、私は。目的のためだけに動いている、いやな人間ですよ」

「意外だな。君がそんな風に自分の事を見ていたなんて」

夢見とはもう何度か話をしたことがある。そしてあの子達とも面識がある。その点から、『彼女』みたいな考え方なのかと思っていた。まっすぐすぎて、甘い考え方だと思いが、それでも彼女は、全力で何事にもぶつかっていった。

「お二人だったらどうします？何をしても果たさなければならぬ目的。そんな目的があったら」

寂しげな彼女の表情に、僕は言葉に詰まった。何を言えばいい。僕たちだってそうやって、戦ってきた。だからこそ、言葉に意味がない事がわかっている。そしてその重圧も、決して軽いものではない事も知っている。僕にはみちるがいつも側にいた。一緒に歩んでくれるパートナーがいたからこそ、僕は今日まで歩いて来ることができた。

「少し喋りすぎたわね。そろそろ、私、帰るわ」

「えっ？」



夢見が立ち上がり、僕は現実に戻された。

「もう、こんな時間だし、泊まっていったら？ねえ、はるか？」  
みちるが僕に同意を求めてくる。

「ああ、雨もかなり強くなってきたみたいだし。どうだい？」

雨は話をしている間に強くなり、まるで窓にたたきつけるかのよう  
に降っている。音は聞こえないが、たびたび遠くの空で稲光が見え  
る。

「でも悪いわ……」

「ねっ？」

みちるの説得に夢見はとうとう折れ、うなずいた。

「はるか、部屋に案内してあげて」

「ああ。わかった」

はるかと一緒に居間を出る直前、夢見は振り返った。

「じゃあ、みちるさん、おやすみなさい」

えっ？一瞬だが、彼女の姿が重なる。反応が遅れそうになり、あわ  
ててみちるは返事をした。

「おやすみ、夢見」

彼女が出て行くと、私は窓際の寝椅子に移った。外は暗く、たたき  
つける雨のため、様子はわからない。

今のは一体……？

私は目を閉じ、集中すると手鏡が現れた。私のタリスマン、【デイ  
ープ・アクア・ミラー】。この鏡はいろいろなものも映し出してく  
れる。けれどこの鏡にも捕らえられないものもたくさんある。たと  
えば、夢見。さっき感じた違和感の正体を知るため、鏡を出したが、  
鏡は答えてはくれない。

私は諦めて、鏡を横に置いた。一瞬だが、夢見の姿にうさぎが重な  
った。顔も、髪も、表情も、どこも彼女とは似ていない。考え方だ  
ってそうだ。けれど……。

「どうした、みちる」

気づくと、戻ってきたはるかが、私の顔を覗きこむように、見下ろしていた。

「不思議なのよ」

はるかがかすかに目を細めた。

「彼女が……夢見が、うさぎに見えたの……」

次の日、はるかはガレージでバイクの整備をしていた。誰かが入ってくる気配がした。振り返らず、声をかける。

「みちるか？そのレンチを取ってくれないか？」

手を伸ばすと、レンチが手渡された。けれど、予想とはべつの声が返ってくる。

「どうぞ、はるかさん」

「すまない、夢見だったか」

ポルトを締め、僕は立ち上がった。

「はるかさん、すごいですね。バイクも自分で整備するんですか？」

「まあ、好きだからね。ハンドルを握っているときに一番落ち着く」

「風みたいだから……？」

「えっ？」

彼女が何気なく呟いた言葉に僕は心底驚いた。『風』。僕にとって、

『風』は大きな意味を持っている。僕が戦士だから？それもあるかもしれない。けれど、それ以上に、『風』は僕の目標、そして生き方のつもりでもあった。

「ああ。そうだね」

夢見は楽しむかのように続ける。

「はるかさんが風なら、みちるさんは海かしら？」

朝食が終わり、夢見はふと思いついたように提案した。

「今日、みんなの予定は？近くで展覧会をやるんだけど、来ない？」

「どうだい？せつな、おちびちゃん？」

せつなは笑顔でうなずく。ちびうさは少しためらっているようだ。

「みんなも来るわよ？ちゃんと謝らなくちゃ」

夢見の言葉に、ちびうさはようやくうなずいた。

「僕とみちるはちよつとよる場所があるから、一緒にはいけないけど、後から顔を出すよ」

「じゃあ、早速出かけようか、ちびうさちゃん？」

「…うん」

夢見とちびうさに続き、せつなも立ち上がる。はるかと思が合うと、彼女はそつとうなずいた。

「では、先に行っています」

「そういえば、まだちゃんと自己紹介していませんでしたね」

夢見は笑顔でバックミラーを見ながら、後部座席に座るせつなに声をかけた。

「月影夢見です。えつと一応、画家…かな？」

「私は冥王せつなです。天文台に勤めています」

「二人は親戚なのかな？すごく仲がいいみたいだけど」

そんな夢見の台詞に、せつなの隣に座っているちびうさが会話に加わった。

「親戚じゃないけど、プーは私にとって大切な人だよ！」

少女の言葉にせつなの口元がかすかに緩んだ。

「へえ〜。うらやましいな。大切な人がこんなに近くにいるなんて」

「夢見さんにもきつというはずですよ、大切な人」

夢見は目を細めると、じつと前を見つめながら小さく呟いた。

「大切な人が……」

そしてまるで自分に言い聞かせるかのように、しっかりとした口調で言った。

「今は少し遠くに行ってしまうですけどね。いますよ、大切な人」

目の前で静かに眠る少女を見つめ、はるかは驚きを隠せずにいる。

「まさかここまでとはな…せつなの言っていた通りだな」

「ええ。あと10年もしたら、きつと…」

少女の姿が彼女の姿と重なる。

病室を後にし、廊下を歩いていく。

「なあ、みちる。彼女、僕の事を『風』と言ったんだ…」

意図がつかめず、みちるは不思議そうに首をかしげた。はるかが続ける。

「君の事は、『海』って言ったんだ…」

「私を『海』…」

会場に着くと、そこには夢見たたちを待つ人影が立っていた。

「あつみんな、こつち、こつち」

呼びかけると、五人が近づいてくる。

「あら？そちらの方は？」

いつもの四人の隣に、一人の男性が立っていた。

「地場衛です」

「私は月影夢見。よろしく」

簡単な自己紹介をすませ、夢見は決まり悪いちびうさの背中をそっ  
と押した。

「ちびうさちゃん」

ためらいがちにみんなの前に出る。

「レイちゃん、亜美ちゃん、まこちゃん、美奈子ちゃん、まもちゃ

ん…ごめんなさい」

謝る少女に五人は笑顔でうなずいた。

「おかえりなさい、ちびうさちゃん」

「みんな…」

彼女が仲直りができたのを確認すると、私はメンバーに声をかけた。

「私はちよっと向こうに顔を出さなきゃいけないから、適当に楽し

んでいってね」

向かう先はテラスだ。奥のテラスなら人はあまり来ない。なので、お互い、話をしやすいだろう。

テラスに出て、潮風を胸いっぱい吸い込む。空は昨日と変わって、一面の青空だ。個人的に、このテラスは結構気に入っている。手すりの向こうは、断崖絶壁ですぐに海。ちよつとあぶないかもしれないが、ここなら海も空も一番身近に感じられる。手すりに寄りかかりながら、私はじつと風を感じていた。

「月影、夢見さん？」

しばらく待っていると、私は声をかけられた。少女の声だ。私は振り返らず、答える。

「そうよ、土崩ほたるさん」

「私の名前を…」

「あなたはほたるには会った事はないはずですよ？」

もう隠している必要はない。いや、隠している時間が惜しい。そんな焦りを顔に出さないように、私はゆっくりと振り返った。少女の後ろにせつなが立っている。

「そう、初対面。白状すると、あなたの名前も顔を合わせる前から知っていたわ、冥王せつなさん。それとも時空の門の守護者とお呼びしたらいいかしら、セーラー・プルト？」

予想に反して、彼女の表情はあまり変わらない。こうなることを知っていた？ 変わりにほたるが私を驚いたように見つめる。

「あなたは、いったい…？」

「それは僕たちも知りたいな」

声と共に、はるかともちるも現れた。

「会ってきたよ、本物の月影夢見に。ただ事故にあってからこんな状態で目覚めないらしいが」

「他人とは思えないぐらい、彼女はあなたに似ていた。そして同じ名前……」

「君は一体何者なんだ!」

しばらくのにらみ合いの後、根負けしたかの様に夢見は肩をすくめた。

「あゝあ。もうそんな事までバレているなんてね。さすが外部太陽系四戦士だわ」

その言葉に四人は身構える。

「外部からの侵入者だったら、私たちには強く感じられるはずですがこれはせつなだ。せつなに夢見はおどけたように返事をする。

「だったら、内部なんだろうね?安心して、敵ではないわ」

「敵かどうかは、僕たちが決める」

「私たちが知りたいのは、あなたの正体と目的よ」

みちるの言葉に夢見の表情も鋭くなる。

「私の目的は、彼女が戻ってくることに。私の正体は……もうじきわかるわ。彼女が戻ってくることに、それは私が消えることを意味しているから」

突然、突風が戦士達を襲った。顔を反射的に背ける。

「きつと、もうすぐ」

突風がやむと、夢見の姿も消えていた。

「消えた……」

考える間もなく、中から悲鳴が聞こえてくる。

「みんな、変身よ!」

悲鳴をあげ、四人目の戦士が絵の中に閉じ込められた。

「マーズ!」

見ると、四つの絵が宙に浮かんでいる。それぞれに外に出ようと必死な様子のマーズ、マーキュリー、ヴィーナス、ジュピターの姿。

「くっ」

横目で閉じ込められたマーズを確認した瞬間だった。思いがけない方向からの攻撃で、タキシード仮面は体制を崩してしまう。

「しまった」

「ゲイジューツ！」

額をまるでたたきつけられるかのように、タキシード仮面も絵の中に取り込まれてしまう。

「タキシード仮面様！」

向かい合った妖魔よしまがニヤリと笑った。やられる…！

「ワールド・シェイキング！」

妖魔とちびムーンの間<sup>に</sup>張り詰めていた緊張感を、光の球がなぎ払った。妖魔は飛びのくと、怒ったように叫ぶ。

「何者！」

「天空の星、天王星を守護に持つ、飛翔ひしょうの戦士、

セーラー・ウラヌス」

「深海の星、海王星を守護に持つ、抱擁ほうようの戦士、

セーラー・ネプチューン」

「時空の星、冥王星を守護に持つ、変革の戦士、

セーラー・プルート」

「沈黙の星、土星を守護に持つ、破滅と誕生の戦士、

セーラー・サターン」

「外部太陽系四戦士、新たな危険に誘われて、ここに参上…！」

「みんな…！」

「お待たせ、おちびちゃん」

ウラヌスはウインクをし、ちびムーンに笑いかける。

「忌々しいセーラー戦士達ね。ゲイジューツ、やってしまいなさい！」

「うさぎ!!」

声と共にセレニティが現れた。

「危ない！」

ネプチューンはいきなり影に飛びつかれ、一緒になって倒れる。間髪おかずに、頭上を妖魔の攻撃がかかる。

「ありがとう」

礼を言うと、彼女は照れたように微笑んだ。

「また、あなたなの?!クレセント・ムーン！」

「彼女の事は私に任せて！」

そう叫ぶと、クレセント・ムーンは駆け出していく。二人はぶつかり、また距離をとる。クレセント・ムーンがテラスへと飛び出すと、セレニティが後に続いた。

「うさぎ！」

後を追おうとするちびムーンを、サターンが厳しく呼び止める。

「妖魔が先よ!ちびムーンも手伝って！」

一瞬戸惑いながらも、ちびムーンは妖魔を見据えた。

「デス・リボン・レボリューション！」

「デット・スクリーム！」

「ピンク・シュガー・ハート・アタック！」

サターンの技が妖魔にまわりつき、プルートとちびムーンの技が重なった。妖魔が消滅すると同時に、囚われていた戦士達が絵の中から解放された。ちびムーンは振り返らずに、まっすぐとテラスに駆け出していく。

「スモール・レディ！」

プルートもあわてて少女の後を追う。

「ここは私にまかせて、二人はちびムーンを！」



「わかった」

サターンの言葉にウラヌスが頷く。

セレニティの放った攻撃を受けきれず、クレセント・ムーンは地面にたたきつけられた。入れ替わりに現れたウラヌスが、セレニティに飛び掛っていく。

「大丈夫？クレセント・ムーン」

ネプチューンが倒れている彼女を助け起こす。

「ありがとう」

「ゲイジューツはしくじったみたいね」

「思い出してくれ、お団子！君だってこんなことは望んでいないはずだ！」

「うるさい！」

ウラヌスの言葉にセレニティはイラついたように波動を放つ。ウラヌスは防ぎきれず、壁に叩きつけられた。右肩を抑えながらも、ゆっくりと立ち上がる。

「ウラヌス！」

「うさぎ、おねがい！やめてえ！」

少女の叫びにセレニティは苦痛に顔をゆがませた。

「うるさい……！」

セレニティはちびムーンに向かって、右手をかざした。

「スモール・レディ！」

ブルートは手に持っていたガーネット・ロッドを投げ出し、間に入る。

「プー！」

ブルートは一身に攻撃を受け、倒れこんだ。

「私はうさぎ、ではない。私は、ダー、ク・キング、ダムの指、揮官、セレ、ニティよ」

まるで自分に言い聞かせるように、けれどただとしく彼女は繰り返す。

返し呟いた。

「じゃあ、あなたは何故、そんなに辛そうな目をするの？」  
悲しそうな表情で、ネプチューンはセレニティを見つめる。

「わかっているはずよ！今の姿が本当の姿でない事を！」

クレセント・ムーンの言葉と共に、中にいた仲間達が現れた。

「うさぎ！」

「うさぎちゃん！」

「うさこ！」

次々に呼びかける。

「うるさい、うるさい、うるさい、うるさい！！！」

セレニティは右手を空に向かってかざした。まるで暴走するかのように、エネルギー弾が降り注ぐ。

「きゃっ……」

エネルギー弾の一つがちびうさに当たった。自分の身体が宙を舞うのを感じる。そしてその身体は手すりを乗り越えた。

「スモール・レディ！」

ブルートが気づき、叫びを上げる。

「ちびムーン！！！」

これはサターンだ。

「ちびうさあぁ！」

「しまった！」

誰も動けない。

もう、だめ。そう思って目を閉じた時だった。手首を掴まれる。驚いて目を開けると、そこにはセレニティの顔があった。

「うさぎ…？」

セレニティは無言でちびムーンは引き上げる。そして呆然とし、戸惑った顔のまま空間に裂け目をつくると、彼女は姿を消した。

ふらつきながらプルートのが、ちびムーンに近づいてきた。

「大丈夫ですか、スモール・レディ？」

「プー！うさぎが、うさぎがあたしを助けてくれた！」

その事実には、興奮しながら話すちびムーンに、プルートは優しげな微笑を向ける。

「プー！うさぎ、戻ってくるよね？」

プルートの代わりにクレセント・ムーンがそっと呟いた。

「ええ、きっと。きっともうすぐ、彼女は戻ってくる」

第十四話 運命の出会い！ウラヌスの遠い日（後書き）

夢見　：『まだ、私の事を敵だと思っていますか？』

はるか　：『わからない。僕は彼女のように人を無条件に信用することとはできないからね』

夢見　：『月野うさぎ、セーラー・ムーン、月のプリンセス。そして未来のネオ・クイーン・セレニティ』

はるか　：『彼女の事、ずいぶん詳しいんだな』

夢見　：『きつと彼女以上に…』

うさぎ　：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

亜美、友情の叫び！クレセント・ムーン消失』

『月の光は、愛のメッセージ』

第十五話 亜美、友情の叫び！クレセント・ムーン 消失

私は…。

中身をあおり、私はグラスを壁にたたきつけた。砕け散り、破片が周りに飛び散る。

「私はどうして…」

あの子を助けたんだ。その事だけが頭の中をぐるぐると回る。あの掴んだ手から伝わってきたぬくもり。あれは…。

「わかっているはずよ」

まるで幻影のようにグラスの破片から、影が浮かび上がった。

「く、クレセント・ムーン」

「わかっているはずよ」

彼女は静かに繰り返した。彼女の言葉だけは、いつも確実に私の心をかき乱す。

「私はダーク・キングダム指揮官、セレニティよ！」

私はムキになって声を張り上げた。そんな様子も気にならず、クレセント・ムーンは続ける。

「あなたの居場所はここではないわ」

「うるさい！」

私は短剣を投げつけた。短剣は空を切り、実態のない彼女の身体を通り抜け壁に突き刺さる。

「みんな、待っているわよ、うさぎ」

「今日、みんなに集まってもらったのは、これを見てもらいたかったら」

メンバーは十番公園に集まっていた。細長い木のテーブルを囲み、レイ、ちびうさ、まこと、美奈子が亜美に注目する。亜美は目の前のノート型パソコンを仲間達に向けた。

「うさぎちゃんの写真じゃない？」

事故よりも前の写真、以前みんな海に行った時の写真だ。亜美はゆっくりと写真を表示させていく。

「これは…事故直後の…」

落ち込むうさぎを励ますため、美奈子が無理やり取った写真だ。明らかに前の写真とは表情が違う。以前に比べて、どこか遠くを見つめるようになったうさぎ。どこか暗い影が顔にかかっている事が多くなった。

「こっちは、植物園に行った時のだね」

バラ迷路に入る前のアーチで、みんなで写っている。衛が撮った写真だ。うさぎは戸惑いながらも笑っている。

そして夢ランド。レイは思わず右手を握り締める。ちびうさとじゃれ合ううさぎの姿は、一目見ただけでは以前のうさぎの姿とは見分けがつかない。

次の写真は軍服に身を包んだ、うさぎの姿。二枚の写真が並んで、表示される。ちびうさは思わず顔を背けた。

「亜美ちゃん、それで何が言いたいの？」

「こっちはうさぎちゃんがセレニティとして初めて現れた時の写真。隣がこの前の展覧会での写真。ちよつと比べてみてほしいの」

亜美に言われ、戦士たちはじっくりと見比べる。ふとレイが気がついたように、声を上げた。

「目よ。初めの頃は、闇のエネルギーに染まっている。でも戻ってきている。うさぎの目に」

「それは、うさぎさん。いやセレニティの中で、何かが変わりつつあるからだと思います」

「ほたるちゃん！」

声に驚き、振り返るとそこにはほたるが立っていた。

「変化をもたらしているのは、私達。特にちびうさちゃんです。そして何よりも、彼女」

そう言つて、ほたるは写真の隅を指差した。

「クレセント・ムーン…か…」

まことが考え込むかのように彼女の名前を呟いた。

「そういえば、彼女はいつから現れたんだっけ？」

「ママが来たとき！」

ちびうさの言葉をレイは否定する。

「ちよつと待つて。多分その前よ。うさぎが事故にあつた日だわ。

その時、クレセント・ムーンの姿は見なかったけど、光の攻撃が私達を助けてくれた。あれも多分、クレセント・ムーンよ」

「じゃあ、うさぎちゃんが事故に合つた日と、クレセント・ムーンが現れたのは同じ日…？」

けれど、そこから続かない。

「う〜ん」

「みんなで集まつて、作戦会議かしら？」

考え込む仲間達の前に、夢見が突然現れた。

「ゆ、夢見さん？」

亜美はさりげなくパソコンを閉めた。見せるようなものではない。

「こんな所でどうしたんですか？」

首をかしげる美奈子に、夢見はクスッと笑う。

「打ち合わせの帰りなの。そうだ、せつかくだから宣伝していいのかな。きつと亜美ちゃんとか、いい線、行くんじゃないの？」

そう言つてから夢見は、カバンから数枚のチラシを取り出し、仲間達に配つていく。

「チエス大会…？」

「こりゃ、亜美ちゃんの独壇場だね〜」

仲間の視線は自然と頭脳明晰な亜美へと集中する。亜美は照れたように小さくなつた。

「ほたるちゃんも、どう？」

夢見は少し離れて立っていたほたるにもチラシを手渡した。

「でも私、チエスわかりませんし」

「大丈夫。大会に参加しなくても、初心者コースとかもやっているから。ねっ?」

熱心な説得にほたるはとうとう頷いた。

「じゃあ、みんなで明日行きましょう? 亜美ちゃん参加で、私達応援!」

「賛成!」

「ちょ、ちよつと、みんな?」

話が勝手に進んでいくので、亜美はあわてて立ち上がった。

「みんなもこう言っている事だし、ぜひ参加してよ。私も参加するつもりだし」

「夢見さんも...? じゃあ...」

亜美が頷いたので、夢見はうれしそうに笑った。

「決定! そうだね、明日11時に会場に集合、でどうかな?」  
仲間達からは反論は来ない。

「じゃあ、また明日ね」

角をまがり、六人から見えない場所で、彼女達はまるで私を待ち受けるかのように立っていた。

「やっと見つけたよ、夢見」

「一体どういうつもり? あの子達を誘って」  
みちるとはるかのかの鋭い視線が痛い。

「?!」

こんな時に...!!

私は思わず胸を抑えた。彼女達には見せ...たく...ない...のに! 呼吸が乱れ、嫌な汗が額を伝う。

「二人には敵わないわね。は、るかさ、ん、み、ちる...ゲホッ」

咳き込むと同時に、私はバランスを崩し、思わずしゃがみこんだ。

「おいっ! 大丈夫か、夢見!」



「ゆめ…」

二人が私の名前を繰り返し呼ぶ声を聞きながら、私は意識を手放した。

墜ちていく。深い意識の海の中、私は墜ちていく。

あの日、意識の海に放り出され、何もできなかった私は、あの少女に出会った。

あの子は、私に名前を貸してくれた。

あの子は、私に姿を貸してくれた。

あの子は、私に自分の未来を貸してくれた。

私はずるい人間。

自分の目的のためだったら、何だって利用する、ずるい人間。

浮かんでは消えていく、彼女達の姿。

『あつ、自己紹介がまだだったわね。私は、月影夢見。一応、画家、つてとこかな？』

偽りの名前。

『すご〜い。音楽に絵に。私とは大違いだ〜』  
偽りの姿。

私はずるい人間。自分の目的のためだったら、何だって利用する、ずるい人間。

『だったら何故、はるかさん達にあんな事言ったの？』  
そんな声が聞こえたような気がした。

『優しくないですよ、私は。目的のためだけに動いている、いやな人間です』

隠し通すつもりだった、本音。あれは…ホント、どうしてだろうね？

『本当はわかっているんじゃない？』  
…そうね。私は…

せつなは濡れたタオルで、夢見の額に光る汗をふき取った。まぶたがかすかに動き、夢見がゆっくりと目を開ける。

「気がつきましたか？」

不思議そうな顔をしながら、夢見は起き上がった。

「ここは…？」

「私達の家よ」

見ると、みちるとはるか二人が側に立っている。

「僕達の前で倒れたこと、覚えているかい？」

「覚えているわ」

「それで病院より、ここに運んだほうが良いと判断したのよ」

みちるさんの言葉に私は理解した。きつと二人は見たんだ。改めて私にはもう時間がない事を思いしる。私にも、そして彼女にも。

私はベットから立ち上がった。ふらつくかと思ったが、大丈夫だ。

今は、安定している。でもまたいつ崩れるかわからない。私は一人一人の顔を見つめ、頭を下げた。

「ありがとう、みちるさん、はるかさん、それにせつなさん」

「それにしてもあなたは何者なの。こんなに近くにいるのに、私の鏡でああなたの正体を掴むことができない」

みちるの手には、彼女のタリスマンが握られていた。

私の問いに、夢見は軽く首をかしげ、悲しげに笑った。

「間違っているわ、みちるさん。あなたにはもう、わかっているはず。いいえ、あなただけじゃない。はるかさん、せつなさん、それにほたるちゃん。他のみんなだって。みんなわかっているはず。私が何者なのか」

そついうと彼女は一步一步、確かめるように踏み出す。

「明日、会場に来てください。ほたるちゃんにチラシは渡してあります」

「待ってください」

せつなが呼び止める。その声に彼女は足を止めた。

「明日、きつと…」

それだけを言うと、彼女は部屋を出て行った。私もはるか、彼女を呼び止めることはできなかった。彼女の表情が声をかけることを許さなかった。私は彼女が出て行った扉を見つめながら、気づくと眩いていた。

「夢見…うつん、クレセント・ムーン。あなたは一体どれだけのものを背負っているの？」

次の日。

会場の一角に見慣れた顔を見つけ、美奈子は走っていった。

「じゅめ〜ん！」

「美奈子ちゃん、おっそ〜い」

レイとまこと。亜美が見当たらない。

「あれ亜美ちゃんは？」

「今、夢見さんと参加登録しにいつているわ」

「みんな〜」

ちびうさの元気の良い声に振り返ると、ちびうさ、ほたる、せつな、はるか、みちるの五人が歩いてくるところだった。

「じゅげんよう」

「やあ！」

「おはようございます」

「おっ集まってる。集まってる」

今度は夢見達だ。夢見、亜美、そして衛までいる。

「衛さん？」

「どうして」

当たり前前の疑問に、衛は答えた。

「知り合いに手伝いを頼まれてね。ちょうど、二人と向こうで会ったんだ。じゃあ俺はまだ仕事あるから、亜美ちゃん、夢見さん、がんばって」

衛はみんなに挨拶をするためによつたらしい、足早に戻っていく。

「亜美ちゃんも参加するのか？どのグループなんだい？」

亜美の番号札に気づき、はるかが覗きこむように訊いてきた。

「私はAです」

「じゃあ、私と同じね」

みちるが可笑しそくに微笑んだ。

「夢見は…？」

「私はBよ」

「夢見は、僕と同じか」

はるかも面白がるように笑った。

『予選を行いますので、参加者の方は会場の中へ集まってください』

話をしていると、アナウンスがホールに流れた。

「じゃあ、行こうか？」

はるかが他の三人を促す。

「みんな、がんばってね」

ちびうさの声援に見送られ、四人は会場の中へと入っていく。

『…つねに…』

セレニティは耳をふさいだ。今朝、彼女が現れてから声がやまない。

「一体誰なの！」

『つねに』

「やめてえ！」

足がもつれ、壁に寄りかかる。息が乱れ、頭がガンガンする。浮かんでは消えていく、セーラー戦士達の姿。

『うさぎ』

皆、笑顔で私に手を差し出してくる。

「いや！」

『みんな待っているわよ、うさぎ』

彼女の言葉。クレセント・ムーンの言葉。

「ワタシハ・・・！」

「亜美ちゃんはわかるけど、さっすっが、みちるさんにはるかさんね〜」

チエスの試合は順調に進み、結果を見ながらレイが感心したように呟いた。

「ほんと、かつこいい〜」

美奈子が目をきらめかせながら言った。ちょうど試合が終わった本人と目があつたのか、彼女は元気よく手を降る。

「でも夢見さんも」

今度は夢見の試合が終わつたらしい。席から立ち上がった。彼女の勝利が表示される。

「あつ、つぎ準決勝だよ。Aグループがみちるさんと亜美ちゃん！Bグループがはるかさんと夢見さんだ！」

まさかの身内対決に、戦士達の視線は、試合が表示されるモニターへと集中する。

準決勝から個別の部屋で試合が行われる。試合はモニターで中継されるが、試合中、部屋の中に残るのは当事者の二人だけだ。みちるは席に着くと、向かいに座った亜美に対して微笑みかけた。

「よろしく、亜美ちゃん」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「手加減はしなくてよ？」

「私だって」

係りの男性に説明を受け、亜美がゲームを始めた。亜美が白、そしてみちるが黒だ。

「久しぶりね、あなたとこうやって勝負するなんて」

「プール以来、でしょうか」

二人共、駒を動かしつつも会話を続けていく。

「また是非プールで勝負したいわね」

みちるの一手に亜美は一瞬考える。そしてルークを進め、ずっと考えていたことも躊躇いながらもみちるにぶつけた。

「みちるさんは、まだクレセント・ムーンが敵だと思いませんか？」

「あなたはと思うのかしら？」

まるでその問いが来ることをわかっていたかのように、みちるは落ち着いた声で切り替えした。

「私は……」

亜美は視線をチェス盤から放し、みちるをまっすぐと見つめた。

「私は信じます。彼女の事を信じます。うさぎちゃんだって、きつとそうしたはずだから」

みちるはふつと息をつき、どこか遠くを見るような目で、亜美の言葉に答えた。

「そうね。あの子なら信じたでしょうね。優しすぎる子だから、きつと自分の身を犠牲にしてまで、信じたでしょうね」

そついうと、みちるは黒のキングを倒した。

部屋を出て、仲間たちの元へ戻りながら、みちるは続ける。

「でもこれが私達の戦い方。わかって、とは言わないわ。彼女は優しすぎるから。自分が傷つくとわかっていても、彼女は進んでいてしまうから。だからと言って必要のない傷を、負う事はないわ。それは私達が引き受ける」

何か言葉を返す前に、仲間達のところについたので、亜美はみちる

に何も言えなかった。答える余裕があったとしても、みちるに返す言葉を見つけたか、亜美には自信が持てなかった。

「亜美ちゃん、決勝進出おめでと〜」

「残念でしたね、みちるさん」

「そうね、でも楽しかったわ」

さつきとはぜんぜん違う表情でみちるは笑いながら答えた。

「みんな、次の試合が始まるよ」

「まさか、君とこんな形で勝負することになるとはな…」

少し困った表情をするはるかに、夢見は笑顔で答えた。

「でも私はうれしいですよ、はるかさん」

ゲームが始まり、少しの沈黙の後、夢見は切り出した。

「まだ、私の事を敵だと思っています？」

「わからない、と言うのが本音だろう。僕は彼女の様に無条件で人を信用することはできないのでね」

体制を変えないまま、はるかは視線をチェス盤から放した。そんなはるかの様子を気にかける事もなく、夢見はチェス盤に視線を落としましたまま、駒を掴んだ。

「月野うさぎ、セーラー・ムーン。月の王女、プリンセスそして未来のネオ・クイーン・セレニティ」

「彼女の事までずいぶんと詳しいんだな」

はるかはかすかに目を細めた。

「彼女の事は、多分彼女以上に…」

含みを持つ夢見の言葉の意図がつかめず、黙っていると夢見が顔を上げた。

「はるかさん、あなたは何故戦うのです？王女に仕える戦士としてプリンセスの使命感ですか？」

「使命…確かにそれもある」

はるかはふっと笑うと、過去を思い返していた。確かに世界を沈黙から救う、ただそれだけを使命として動いていた時期もあった。

「でも単純に守りたいからだ。光を。彼女はやさしすぎる。自分が傷つく、犠牲になることがわかっていても、彼女は進んでいくだろう。それが彼女だから。だったら無用な傷は僕達が引き受ける」

「優しいんですね、はるかさんは」

「僕が優しい？まさか」

はるかには眉をひそめ、自嘲するような笑いを浮かべた。夢見はそれに対して首を横に振る。

「みちるさんも、はるかさんも優しい人。それでいて自分には甘えない人」

はるかは諦めたように笑い、一緒にキングを倒した。

「君には本当に適わないよ。僕の負けだ」

「話ができてよかった」

はるかとは夢見が観客席に戻ると、二人は仲間達に迎えられた。衛も仕事が終わったのか、合流している。

「決勝は亜美ちゃんに夢見さんか」

無邪気に喜ぶちびうさ。はるかは小さく笑うと、みちるに話しかけた。

「僕達は相手が悪かったな。なあ、みちる？」

「ふふつ。そうね、はるか」

まるで二人は、負けたことを楽しんでいるかのようにも見える。

「決勝まで時間があるから、みんなでお茶しに行こう？」

「賛成」

美奈子の言葉に率先して明るく賛成するのは夢見だ。レイが無邪気に騒ぐ二人に苦笑する。

「夢見さんまで、美奈子ちゃんみたいなんだから」

二人の言葉で決まった午後のお茶会に移るため、歩き出した時だった。会場のシャッターが突然落ちるようになっていく。

「何?!」

足場が安定せず、戦士達はふらついた。



「空間が…！」  
「これは…」

「ようやくわかった。全て壊してしまえば、私はもう苦しまなくてすむ」

声が響いた。声の主もすぐに姿を現した。顔は蒼白で、目は虚空を見つめている。

「だから、私が殺してあげる」

セレニティは戦士達に向かって、右手をかざした。まるで重力が変わったかのように、戦士達を地面へと押し付ける。

「く、そっ…！」

「う、ごけない」

「ヒキガエルのように、地面に押しつぶされて、死んでしまえばいいのよ！」

セレニティのヒステリックな笑いがあたりを包んだ。

「う、さ、ぎ…！」

押し付けられていた力がふっと消えた。顔を見上げると、そこには戦士達を守るかのように夢見が立っていた。身体は優しい光に包まれ、その後ろ姿は彼女を彷彿とさせる。

「セーラー・ムーン…？」

「みんなは私が守るから。守って見せるから」

夢見はまっすぐと、セレニティを見据えた。そのまま光のベールに包まれ、姿が変わる。金色の被衣かじぎに白い着物。

「…夢見さん…」

『大切なもののためなら、いくらでも強くなれるものよ？』

『だから苦しいんでしょ？だからつらいんでしょ？』

『大丈夫、美奈子ちゃんなら、書ける！』

『今は迷わないで戦ってー！』

『まこちゃんって、料理…好きでしょ？』

『げんげつ幻月の戦士、クレセント・ムーン、ただいま参上』

『みんなもこう言っている事だし、ぜひ参加してよ』

『みんなは私が守るから。守って見せるから』

「夢見さんが…クレセント…ムーン…」

言葉を失い、戸惑う戦士達に、クレセント・ムーンは厳しい口調で叫んだ。

「今のうちに变身して！早く！」

变身した戦士達を憎憎しげな目で見つめ、セレニティが指を鳴らした。黒いもやのようなものが集まってくる。一気に分かれ、やがてある形をかたどっていく。

「そんな…！」

立ち上がったもや達の姿に、戦士達は絶句する。

「ドッペルゲンガー達よ！やってしまいなさい！」

まるで鏡のように、戦士達の姿を写し取ったドッペルゲンガー達が襲い掛かってきた。

「うわっ」

ジュピターが声を上げた。見ると、二人のジュピターがもつれ合っている。

「ジュピター…！」

ヴィーナスは思わず叫んだ。ドッペルゲンガーの姿はまるで鏡のようで、見分けがつかない。攻撃したら、本物に当たってしまうかもしれない。

「よそ見していると、死ぬわよ」

偽ヴィーナスが放った、光のチェーンが脇をかする。

「！」

「どう？一緒に戦えないもどかしさは！手を出したら、仲間を傷つ

けてしまつかもよ!」

セレニティは自嘲的な笑いを浮かべ、叫んだ。その表情は明らかに無理をしている。

「うざぎ!」

「どこを見ているの? あなたの相手は私よ」  
もう一人のマーズが立ちふさがる。

「邪魔よ!」

けれどももう一人のマーズは攻撃を同じ技で相殺してきた。

ドッペルゲンガーに戸惑い、苛立ちを感じていたのはマーキュリーも同じだった。攻撃を避けながら、同時にゴースルを通し解析を進める。

早く、早く、早く。どこかにあるはず。何かがあるはず。こんなに正確に技を写すのには、かなりのエネルギーが必要なはず。その場所さえわかれば……!

ふと、ゴースルが反応した。

「みんな! ティアラの石が弱点よ!」

クレセント・ムーンとタキシード仮面が、本人のドッペルゲンガーを倒したのを横目で確認しつつ、マーキュリーは仲間達に叫んだ。

「余計な事を……!」

明らかに余裕をなくしている偽者が飛び掛ってくる。

「偽者になんか負けないわ! マーキュリー・アクア・ラブソディ!」

必殺技が炸裂し、石が割れた。同時にドッペルゲンガーが消滅する。マーキュリーの指摘に、他の仲間達も、次々と自分のドッペルゲンガー達を倒していく。ほっと息をつき、戦況を見守っていたマーキュリーは、背後に迫る影に気づかなかった。

「マーキュリー! 後ろ!」

「えっ?」

振り返ったマーキュリーは、金色の被衣かじぎが、まるで花が散るかのよう  
うに、舞い落ちるのが見えた。セレニティの攻撃を一身に受け止め  
たクレセント・ムーンは、一步、そしてもう一步とふらつき、床  
へと崩れ倒れた。まるで共鳴するかの様に、セレニティも頭を抱え  
苦しみ始める。黒いもやのようなものが彼女の身体から抜けていき、  
やがて彼女もまるで力が抜けたかのように、ゆっくりと倒れた。タ  
キシード仮面がさかさず彼女を抱きとめる。

「うさぎ！夢見さん！！」

「クレセント・ムーン！！クレセント・ムーン！！…夢見さん！！」  
自分をかばい、倒れた彼女の名前を繰り返し呼び続ける。  
ふと、あることに気づいたマーキュリーは息を飲んだ。

彼女の身体が、身体が透けて見える。

「亜美…ちゃん…チエス…勝負……でき…なかつ…た…ね…」

夢見は申し訳なさそうな顔をしながら、微笑んだ。話している間に  
も、身体はどんどん透け、見えなくなっていく。

まるでシャボン玉が割れるかのように、夢見の身体は無数の光の粒  
になって、はじけた。光はグツタリとするうさぎの身体に降り注ぐ。

「夢見さん…ゆめみさああんん！！！！」

「うさぎ…！！うさぎい！！目を開けなさいよ、うさぎい！！」

タキシード仮面の腕の中で、グツタリとするうさぎの肩を、マーズ  
は揺り動かしている。マーズはハッと気づき、涙をぬぐうのも忘れ  
叫んだ。

「うさぎ、息してない！！」

まるで戦士達の不安に呼応するかのように、空間がゆがみ始める。

「ここは危ない！！とりあえず脱出だ！！」

『夢見ちゃん…傘、返しにきたよ…』

おねえちゃん…？

少女はゆっくりと目を開けた。

「夢見?!」

何かが割れる音。音のしたほうを向くと、そこには少女の母親が目を大きく見開き、立っていた。床には粉々になった花瓶が散らばっている。

「ママ…?」

「夢見!」

母親に抱きつかれ、少女はまた彼女の声を聞いたような気がした。

『夢見ちゃん…本当にありがとう…』

第十五話 亜美、友情の叫び！クレセント・ムーン 消失（後書き）

声：『うさぎを、うさぎを助ける事は、できないんですか！』

声：『黙ってみているだけだなんて、私達にはできない！』

声：『信じていたよ、うさぎちゃん』

声：『うさぎ、ごめん…守れなくて…。』

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

迷い込んだ戦士達 うさぎ、心の迷宮<sup>ラビリンス</sup>』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十六話 迷い込んだ戦士達 うさぎ、心の迷宮

衛の部屋。リビングには亜美、ちびうさ以外の戦士達が集まっていた。

「くそっ何で、何で…」

まことは感情をぶつけられる先を探して、何度も何度も呟いていた。「ようやく戻ってきてくれたのに」

「うさぎ…」

その場に居たはるかは何も言わなかったが、硬く手を握り締め、震わせている。みちるがはるかのそんな様子に気づき、そっとはるかの手に触れた。ドアが開く音がして、亜美と猫の二匹が入ってきた。

「亜美さん、うさぎさんの様子は？」

はたるの質問に亜美はうつむいた。

「残念ながら、あまりよくないわ。彼女のエネルギーが異様に低いの」

「そんな…!」

「今は、ちびうさと衛を、うさぎにリンクさせただけ…」

「…それは一時しのぎにしかないわ。早く何か手を打たなければ」

追い討ちをかけるような二匹の言葉。

「でも一体、どうすれば…!」

亜美もソファーに座り、気まずい沈黙が流れる。沈黙を破ったのは、レイだった。

「それにしても一体、どうして…」

「私が説明しましょう」

自問自答する言葉、別に返事は期待していなかったらう。けれど、透き通った声が部屋の中に響いた。見ると、テーブルの上においた、うさぎのブローチが光っている。

「銀水晶が…？」

銀水晶はまるでホログラムのように、一人の女性の姿を映し出した。「あなたは…」

「クイーン・セレニティ様！」

せつなが驚いたように叫んだ。そこに映し出されていたのは、はるか遠い昔、月の王国、シルバーミレニアムに君臨した女王の姿だった。前世のうさぎ、プリンセス・セレニティの母親、クイーン・セレニティ。

「皆さん、お久しぶりです。それに嬉しいことです。まだ私が必要とされていることは」

「それで、クイーン・セレニティ様、うさぎの身に何が？」  
みちるが切り出した。クイーンの顔が曇る。

「それにはプリンセスの身に起きた、あの事故まで遡らなければなりません。あの事故もダーク・キングダムの仕事なんだものだったのです」

「あの事故も？」

「はい。もともとは彼女の娘を狙ったものでした」

ちびうさちゃんを？その言葉にまことは納得した。

あの時、何が起こるかわかっていなくても、うさぎちゃんは本能的に感じていたんだろう。あの時のうさぎちゃんの取り乱しよう。何もできなかったことが余計、悔しい…。

「そして、その時、セレニティの心はバラバラになってしまいました。後の事はみなさんのほうが、ご存知でしょう。そして先日、離れていた心が戻ってきたことで、元に戻りつつあります」

「じゃあ、何故うさぎは目を覚まさないのよ！」

レイは声を荒げた。言ってから、ハツとする。叫びだしそうになりそうになるのを、押し殺しているのに出してしまった。

「それはセレニティの中にいまだ、ベリルの邪悪なエナジーが残っているからです。心のかげらはそろいました。けれどまだ、その邪悪なエナジーが彼女が目覚める邪魔をしています」



「うさぎを、うさぎを助ける事は、できないんですか！」  
これはレイだ。

「黙ってみているだけだなんて、私達にはできない！」

亜美。そんな二人にはるかともちるが微笑んだ。

「だって、お団子頭は…」

「大切な光ですもの」

「今度は、私たちが彼女を助ける番です」

そしてほたる。

クイーン・セレニティは仲間達の反応に、静かに微笑んだ。

「本当に、セレニティは素敵な仲間を持ったものです。わかりました。私が<sup>わたくし</sup>セレニティの心へと導きましよう。プルト、手伝っていただけますか？」

せつなは頷くと右手をかざした。彼女のタリスマン、ガーネット・ロッドが現れる。

「どうか、私<sup>わたくし</sup>に、いえ、銀水晶に心を合わせてください」

その言葉と共に、銀水晶の光が強くなる。まるで共鳴するかのよう  
に光りだす、ガーネット・ロッド。そして戦士達はまばゆい光に包  
まれた。

気づくと戦士達は見知らぬ場所にいた。いや、知っている。初めて  
見るその風景は、何故か懐かしさを思い起こした。

「見て！」

亜美が指差す先には、見慣れた銀の月ではなく、青く輝く地球があ  
った。

「じゃあ…！」

「そう、ここはシルバーミレニアムです」

まるで故郷に帰ってきたかのように、せつなが懐かしそうに呟いた。

「ここが…」

「あたしたちが居た場所…」

戦士達が感傷深くあたりを見回す。

「見て、ムーン・パレスよ！」

美奈子が指差した先には、宮殿があつた。同時にあがる煙。一瞬の間をおき、聞こえてくる爆発音。

「ムーン・パレスが攻撃されている！」

「みんな！」

ムーン・パレスの前。

妖魔オウゴンに囲まれながらも、ボロボロで一人戦う戦士の姿がそこにあつた。近づいてきた妖魔をなぎ払い、攻撃を防ぐ。

「きりがないわね…」

肩で息をしながら、ポツリと呟いた。

やっと戻ってこれたけど…。歯を食いしばり、技を放つ。べつに狙わなくたって、敵にはあたる。その事実が妖魔の数を物語っているといつても過言ではないだろう。いや、まだあきらめられない。だって、やっと戻ってこれたんだから。

「あきらめ…」

目の前の景色がゆがんだ。体制を立て直そうと必死になる。けれど身体が言うことを利かない。うご…かない。

クレセント・ムーンは前のめりに倒れるしかなかった。

うさぎ、ごめん…守れなくて…。

「ワールド・シェイキング！」

「ディープ・サブマージ！」

「デット・スクリーム！」

抱き起こされ、私は目を開けた。心配そうに覗き込むマーズの顔が目に入ってくる。

「マーズ？」

「大丈夫？」

「来て、くれたんだ…」

「早くパレスの中に！」

サターンの言葉に、ジュピターが私を軽々と抱き上げた。離れたくはなかったが、抵抗することもできず、私は苦笑するしかなかった。でも少しの間ぐらいなら大丈夫のはず。パレスの中に入り、扉を閉めると、静けさに包まれた。外の妖魔など、うそみたいに思える。

「ジ、ユピター。下ろして」

そう言うと、ジュピターが私を柱に寄りかからせるようにして、下ろしてくれた。

「そろそろ、説明してくれるわね、クレセント・ムーン。いえ、夢見」

ネプチューンが私を見つめながら言った。けれど前のような厳しい視線ではない。思わず笑みが広がる。認めて、くれたのかな？

「ここまで来れたということは、少しは知っているんじゃないの？」  
そう訊くとマーキュリーが頷いた。

「クイーン・セレニティ様に」

目を閉じ、ゆっくりと深呼吸をする。少しずつ身体に感覚が戻ってくる。大丈夫。まだ戦える。

「そう。じゃあ、彼女は言っていたはず、月野うさぎの心はバラバラになってしまった。そして、その心が戻ってきたと」

戦士達を見ると彼女達は頷いた。

「それが私。月野うさぎの心の一部。私は月野うさぎの本質」

「夢見さんが、うさぎちゃんの心？」

「うさぎの本質？」

ヴィーナスはキョトンとした顔で私を見つめる。

「私はうさぎと同じ存在。けれどわたしと彼女は違うの。普段は彼女が起きていて、私が眠っている。月野うさぎは私の事は知らない」  
戦士達は何も言わず、私の言葉に耳を傾けている。戸惑いの表情。

意味がわからない。そんな表情だ。

「セーラー・ムーンを側で見えてきたあなた達なら知っているはずでしょ？彼女の想い。彼女の願い。それも元々私から来る感情。そしてその感情が事故で薄れたのを感じなかった？彼女から表情が無くなった、そう感じた事はなかった？」

私は戦士達の顔を一人一人見回す。予想外にウラヌスが口を開いた。「君はお団子の原型。そう考えていいのか？」

「そうね。そう考えてもらって構わないわ。月野うさぎが光だとしたら、月影夢見、クレセント・ムーンは影なの。本来は外に存在してはいけないもの」

そこまで言い切ると、私は息をついた。そろそろだ。

「でも、みんなに会えて、本当によかった」

私が立ち上がると同時に、<sup>パレス</sup>宮殿が鈍く揺れた。戻らなくちゃ。

「敵か？」

「みんな急いで！彼女は奥にいるはずよ。敵は私にまかせて」

それだけ言うと私は飛び出した。後ろでマーズが呼ぶ声があったけど、私は振り向かなかった。

「クレセント・ムーン！」

私は大声で彼女の名前を呼んだ。けれど、彼女は止まらず出て行った。あんなにボロボロなのに、まだ戦うだなんて……！私が動く前に動いた影が四つあった。ウラヌスたちだ。

「マーズ！クレセント・ムーンは僕達に任せろ」

「みなさんは奥へ行ってください！」

プルトの声にジュピターが頷き、駆け出す。私は一瞬迷ったが、みんなの後を追ひ、奥へと走り出す。

一瞬だったはずなのに、かなり距離を迫られている。宮殿のバリアが限界だ。みんな、急いで！私は右手に集中する。もうかなり集中しないと、詠唱もできない。私の放った光の刃は、妖魔を切り裂き

飛んでいく。足がもつれた。

駄目！後ろを！そう思ったが遅かった。避けれない。

「デープ・サブマージ！」

海のような暖かい光に包まれ、後ろから襲い掛かってきた妖魔が消えた。

「ワールド・シェイキング！」

今度は光の球が風のように、妖魔を消滅させていく。

「みんな…」

守るようにプルトとサターンが私の前に立ちはだかる。

「私たちにも…」

「…手伝わせてください」

「さあ、行くぞ！」

中庭を抜けると、扉が並ぶ廊下へと出た。ヴィーナスが立ち止まり困ったように見回した。

「奥まで来たのはいいけど」

「これじゃ、手間取りそうだな」

「いったいどこから、探し始めたらいいのかしら？」

そう言つて四人はゆっくりと進んでいく。

「でもどうしてかしら。初めて見るはずなのに、すごく…懐かしい」

不思議そうに言うマーキュリーに、ヴィーナスがクスリと笑った。

「きつとあたしたちにも前世の記憶があるのよ」

前世の記憶と言っても、別に全ての事を思い出せるわけではない。たとえば、前世のセラー・マーズが何を考えて、この宮殿パレスで生活していたのかなんて、私にはわからない。でも、この戦士の力は確かに前世から受け継がれたもの。

『レイちゃん…』

ふとつさぎの声が聞こえたような気がした。目の前の扉が目に残まる。右手で扉に触れてみる。

「マーズ、どうした？」

立ち止まった私にジュピターが声をかけてきた。

「この先に、いるわ」

何故かわからないけど、私はそう確信した。

「じゃあ、迎えに行かなくちゃいけないわね」

「みんなだね」

私たちはみんなで扉に触れ、一緒に扉を開いた。

「まぶしい！」

中から、光があふれてくる。光が消え、ふたたび目を開けてみるとそこはさつき通ってきた中庭だった。でもみんなの姿がない。

「みんな？ ヴィーナス！ ジュピター！ マーキュリー！ つさぎ！」

返事は返ってこない。

殺気を感じ、私は条件反射で飛びのいた。見ると、私が立っていた所には、剣が刺さっている。

「待っていたわ、セーラー・マーズ。決着をつけましょう」

彼女だ。偽りの軍服で身を包んだ、彼女。

「どうして！ どうしてあなたを戦わなければいけないの！」

「問答無用！」

「まもちゃん！」

ちびうさは思わず衛に呼びかけた。握ったつさぎの手がどんどん冷たくなっていく。衛はつさぎを握り締める手を強め、噛み締めた唇からは彼女の名が零れ落ちた。

「つさぎ」

気づくとちびうさは叫んでいた。

「うさぎの夢見る明日は、まもちゃんといつも一緒になんでしょ！目を覚ましてよお、うさぎ！こんなところで、負けないで！」  
うさぎの肩を揺さぶり、呼びかける。けれどうさぎは変わらず眠り続ける。

「うさぎい……………」

涙を溜めながら、ちびうさはうつむいた。

「大丈夫だよ、ちびうさ」

「えっ？」

衛の声にちびうさは顔をあげる。

「セーラー・ムーンは無敵の戦士だ。こんな事で負けたりしない」

「まもちゃん」

「絶対、戻ってくる。信じよう」

「……………うん」

ちびうさは涙をぬぐうと、大きく頷いた。

「うぐっ」

クレセント・ムーンは胸を掴み、しゃがみこんだ。ネプチューンが心配そうに駆け寄る。

「クレセント・ムーン！あなたは中に！」

「そういうわけにも、いかないのよ。私が中に入れば、バリアが消える」

みんなが彼女に会うまでは、それは絶対にできない。

「だったら下がってる。敵は僕達でどうにかしてみせる」

私はウラヌスをじっと見つめた。決して引かない、そんな意思が感じられた。

「じゃあ、お願い」

ウラヌスはネプチューンと視線を交わす。それだけで通じたのか、ウラヌスはまた敵の中へと飛び込んでいった。

「立てる、夢見？」

情けないことに、力がはいらぬ。

「ごめん、肩かして」

「みんな、どこに行っただんだ！」

あたしの声は、洞窟にこだまするだけ。扉を開け、光に包まれたところまでは覚えている。気づいたら、あたしは洞窟の様な場所にいるた。

「考えていても、しょうがないか」

少し進むと、広い場所に出た。今までの洞窟の風景とは打って変わり、人工的な建造物。不自然な円形の間を囲むのは切り立った崖。まるで闘技場。そんな言葉が不思議と出てきた。円形の間を踏み入れると、通ってきた橋が崩れ落ちた。閉じ込められた？あたしは咄嗟に身構える。

まるであたしを待っていたかのように、声が響いた。

「よく来たな、セーラー・ジュピター」

目を凝らしてみると、暗闇から人影が浮かび上がった。

「貴様は、ベリル」

集中し、詠唱に入る。けれど、遮るようにベリルは笑った。

「おっと、まだ自分が置かれている状況をわかっていないようだな」その言葉と共に、あたりが明るくなる。ベリルは一人ではなかった。隣に彼女が立っている。

「セーラー・ムーン！」

けれど、セーラー・ムーンの眼がうつろだ。あたしの声にも反応しない。

「セーラー・ムーンがどうなってもいいのか？」

ベリルがセーラー・ムーンの頬を撫でる。けれどセーラー・ムーンやはり反応しない。

「くっ」

「セーラー・ムーンの命はわが手の中にある。忘れるな」



勝ち誇ったように笑うベリル。

「さあ。セーラー・ムーン。ジュピターを倒すのだ」

「はい、クイーン・ベリル様」

セーラー・ムーンは虚ろな目で頷いた。

「セーラー・ムーン！」

返事の代わりに返ってきたのは、攻撃だった。

「さあ、どうする？セーラー・ジュピター」

「みんな、どこよ？」

ヴィーナスが声を上げると、凜とした声が戻ってきた。

「誰です？」

周りの様子がおっきりとしてくる。寝室のようだ。窓の近くに、白いドレスを着た女性が立っている。

「あなたは……」

「どうしたのですヴィーナス、こんな夜更けに？」

「うさぎちゃん……」

「うさぎ？誰の事ですか」

あつ、そっか。

「あなたはプリンセス・セレニティなのですね」

キョトンとするセレニティに、ヴィーナスは変身を解いた。

「あたしは……」

「みんなどこに行ったのかしら？」

そう呟いたのは、マーキュリーだった。扉を開き、光に包まれたところまでおっきりとしている。けれど、そこで他の3人とはぐれてしまったのだ。

「マーキュリー」

私を呼ぶ声。

「誰？」

テーブルがその場に現れた。両側には椅子が置いてある。そして片

方の椅子には、彼女が座っていた。

「私よ、セーラー・マーキュリー」

「夢見さん」

「また、会えたね」

静かに笑う夢見。夢見に促され、亜美は座った。

「でも、どうして？」

「クレセント・ムーンが外にいるのに、どうして私がここにいるのか、と言うことかしら？」

手を組み、悪戯っぽく亜美を見つめる。亜美は頷いた。

「それは外の私が、ここにいる私の一部だからよ」

夢見はテーブルの上に手をかざした。チェス盤が現れる。

「チェスの相手になってもらえる、水野亜美さん？」

「勝負できませんでしたからね」

「ありがとう」

交互に駒を動かしていく。

「話を戻すけど、あなたの目の前にいる私が、夢見またはクレセン

ト・ムーンの本体」

「どういうことですか？」

「私も、月野うさぎの心の一部。ここに帰ってきた今、私も宮殿からは動けないの。でも宮殿のバリアが弱っている今、私がどうにかするしかなかったの」

「強いんですね」

マーキュリーがそういうと、夢見はさびしそうに笑った。

「そうね、私は言うのであれば、月野うさぎの想いを具体化したような存在だから。でもみんなが来てくれなければ、正直危なかった」  
夢見がゆっくりと語りだした。一緒にビショップの駒を動かす。

「月野うさぎが事故にあい、私は彼女の心からほうりだされた。戻ろうと思ったけど、すぐには戻れなかったの。私がすぐに力をコントロールできなかった、っていうのもあるかもしれないけど」

夢見はふつと息をついた。ポーンを動かし、亜美のルークを脅すが、簡単に返される。

「そうしている内に、彼女がダーク・キングダムに奪われてしまった。いや、そう言ったら語弊があるわね。そう仕向けたのは、私」  
「そのためにネフライトと？でもどうして？」

「状況が動かない。そう、感じたから。もしかしたら、もつと簡単な道もあったのかもしれない。けれど私には時間がなかった。それにあなた達にも、戦士として改めて自覚してもらおう必要があった」  
私は息をついた。

「結果的にうさぎには邪悪なエナジーが植えつけられ、彼女を内からも蝕むようにもなったの。だから、ピースがそろった今も、まだうさぎは目覚めることができないでいる」

亜美は真剣な目つきで私の話に耳を傾けている。ふと彼女が聞いてきた。

「私たちを導いてくださった、クイーン・セレニティ様は？あの方も、うさぎちゃんの記憶なの？」

「あの方は違うわ。もちろん、クイーン・セレニティ様もうさぎの記憶としてあるわ。うさぎの前世、プリンセス・セレニティの記憶としてね。みんなが会ったクイーン・セレニティ様は、銀水晶の記憶」

「この宮殿パレスはいつたい…？」

「さつきも言ったとおり、月野うさぎの心、その物というところでしようね。この宮殿パレスの奥で、本来の月野うさぎが眠っているわ。今頃、みんなも会っている筈よ、うさぎのバラバラになった心たちにみんながみんな、穏便で済むとは思わないけど。そう心の中で付け加える。」

「今度は私から訊いてもいいかしら？」

「何、ですか？」

亜美はビシヨップを持ち上げる。ゲームはもう終盤だ。

「マーキュリー。ううん。亜美ちゃんは何故、今まで戦って、うさぎを守るうとしてきたの？ やっぱり、あなたがセーラー戦士で、うさぎが王女、プリンセス 未来の女王だから？」

亜美は一瞬考え、ビシヨップで私のポーンをとる。

「それも、もちろんあるわ。セーラー戦士の使命は、プリンセス 王女と王子をプリンセス 守る事。でも…」

「でも…？」

私はわざと意地悪っぽく訊きかえす。

「うさぎちゃんは、私にとって大切な人だから。うさぎちゃんがいなければ、私はずっと一人だった。うさぎちゃんは優しい子だから、光のような子だから。みんなのために一生懸命になっってくれる子だから…だから…」

亜美にはめずらしく、感情そのままに話しているのが感じられる。

「だから私は戦ってきた。だから私は戦う」

必死になる亜美に私の口元に笑みが広がる。

「そう。本当にいい友達を恵まれたわね、うさぎは…」

少しうらやましい。私はそっとキングを倒した。

「私の負け。やっぱり強いね、亜美ちゃん」

「夢見さん…」

「この先に進めば、扉があるわ。その扉の先に彼女が眠っている」

亜美が立ち上がったので、私も立ち上がる。私は手を差し出した。

「亜美ちゃん、最後にチエスができてよかった」

「夢見さん、私、忘れません」

事情を話すと、プリンセス・セレニティは静かに微笑んだ。うさぎちゃんとは又違う雰囲気の彼女。あたしはこの人に仕えていたんだ。改めてそんな実感がわいてくれる。

「そういう事だったのですか。私の生まれ変わりが…」

「何かご存知ありませんか、プリンセス・セレニティ様」

プリンセス・セレニティはじっとあたしの顔を見つめる。あたしが

顔を逸らさずいると、彼女は訊いてきた。

「どうして、そこまで必死なのですか、ヴィ…いや美奈子さん？」

「あたしはうさぎちゃん友達です。それだけじゃ、理由になりません？」

そう答えると、プリンセス・セレニティは愉快そうに小さく笑った。

「セーラー・ヴィーナス、生まれ変わってもぜんぜん変わりませんね、あなたは」

「えっ？」

「この先にいるはずですよ、あなたのお探しの方は」

そう言つて、彼女は奥の扉を指差した。

「ありがとうございます、プリンセス・セレニティ様」

「さあ、どうするジュピター。もう後はないぞ。まだ戦わないつもりか？」

ベリルが見下すように笑った。セーラー・ムーンの攻撃を避けているうちに、ジュピターは崖っぷちに追い詰められてしまった。

「戦うつもりはない」

「やれ、セーラー・ムーン」

ベリルの命令にセーラー・ムーンがゆっくりと近づいてくる。そんなセーラー・ムーンに、ジュピターは静かに微笑みかけた。

「信じているから、セーラー・ムーン」

セーラー・ムーンは動きを止めた。虚ろなセーラー・ムーンの目にかすかな光が灯る。

「何をしている」

ベリルの声にも、セーラー・ムーンは動かない。

突然、大きな揺れが闘技場をおそった。

「うわっ」

崖っぷちに立っていたジュピターはバランスを崩した。身体は何もない空中へと投げ出される。

「キヤッ」

落下は長くは続かなかった。温かい光に包まれ、ジュピターは眼をあけた。そこにはセーラー・ムーンの顔があった。

「セーラー・ムーン…」

「ごめんね、まこちゃん」

謝る彼女の目には光が戻っていた。

「信じていたよ、うさぎちゃん」

「どうして、戦わなければならぬの！うさぎ！」

「その名で、呼ばないで！」

鋭い切っ先は私をかすりそうになる。避けるのは難しくはない。少しヒステリックな彼女の攻撃は読みやすい。けど…。いまだ私は戦いの意味を見出せないでいた。

『レイ、あなたの使命は何！』

そんな言葉が脳裏で再生される。私の使命…。私が戦ってきた理由。『今だからできる事があるんじゃない？今だからやらなきゃいけない事があるんじゃない？<sup>プリンセス</sup>王女を守る戦士として、彼女の友達としてだから私は戦ってきた。彼女が戻ってくるべき場所を守るため。私はまっすぐとうさぎを見た。次の攻撃のため、彼女は剣を振りかぶる。

私は変身を解いた。切っ先は私の右肩を切りつけた。言葉にならないほどの痛み。私が避けると思っていたのだらう、驚いた表情をするうさぎ。剣が彼女の手から滑り落ちると同時に、消えた。うさぎ自身の勢いも、行き場を失い、私たちは一緒になって倒れこむ。

「どうして…！」

「あ、あなたに、帰ってきてほしいからよ…うさぎ」

痛みを顔を引きつらせながらも、私はそっと微笑んだ。

「レイちゃん…」

「うわぁ…」

そつと彼女の髪を撫でた。うさぎの目から涙があふれてくる。そして私にすぎるように泣き出した。

「レイちゃん、レイちゃん、レイちゃん！」

「おかえり、うさぎ」

次の瞬間、マーズ、マーキュリー、ヴィーナス、ジュピターの四戦士たちは、ひときわ大きな扉の前に立っていた。

「みんな！」

「この先に……」

「うさぎちゃんがいるはずね」

「みんなで、たたき起こしに行きましょう」

四人は顔を見合わせ、うなずいた。

「これで、片付いたな」

ウラヌスはプルートとサターンと視線を交わした。かすり傷を居っているものの、二人共無事だ。

ネプチューンに肩を支えられ、クレセント・ムーンが近づいてきた。

「ウラヌス、プルート、サター……」

ネプチューンから離れ、自分で歩きかけるが、クレセント・ムーンはゆっくりと前のめりに倒れた。地面に倒れる前に、ウラヌスがさつと受け止める。

「夢見……！」

クレセント・ムーンは弱弱しく笑った。

「あり、がとう。その名前で呼んでくれて、身体が少しずつ透けていく。」

「身体が！」

サターンが叫びをあげると、クレセント・ムーンは困ったような口調で言った。

「ははは、この身体も限界みたい。でも安心して、みんなは、間に合ったわ」

不安そうな顔をする戦士達に、クレセント・ムーンは静かに微笑むかける。

「大丈夫。私は本来いるべき場所に、戻るだけ。私は眠りにつき、彼女が目覚める」

「夢見さん！」

クレセント・ムーンは一人一人の顔を見ていく。

「セーラー・ウラヌス。セーラー・ネプチューン、セーラー・サターン、セーラー・プルート。月野うさぎの事を、お願い。泣き虫で頼りないけど…」

戦士達をみると、目に涙を溜めている。あのウラヌスさえ、涙をこらえている様子だ。クレセント・ムーンの身体はもうほとんど消えかかっている。

「私の、こと、も…おぼ、え、て…いて、くれ…ると…、うれ…しい…な…」

まるで泡がはじけるように、クレセント・ムーンの身体は無数の光になって消えた。

「ゆめみい！！」

そして全ては光に包まれた。

目を開けると、そこは衛の部屋のリビングだった。

「ここは…?」

「僕は、戻ってきたのか?」

「うさぎ！」

レイは声をあげると、戦士達はまるでなだれ込むように寝室に入った。衛とちびうさが驚いたように目を丸くする。

「みんな?」

二人に答えず、レイは横たわるうさぎを揺さぶった。

「うさぎ、うさぎ！」

まるで彼女の声に反応したのかのように、うさぎはゆっくりと目を



開けた。少し視線が泳いでいたが、レイの顔を捉えると口元に笑顔が広がった。

「レイ、ちゃん…」

彼女の視線は、ゆっくりと移っていく。

「まもちゃん、ちびうさ、亜美ちゃん、まこちゃん、美奈子ちゃん。はるかさん、みちるさん、せつなさん、ほたるちゃん」

美奈子はベットの側に駆け寄った。隣で亜美がほっとしたように泣き崩れる。

「うさぎちゃん…！」

泣き崩れる亜美の背中をまことがそっと押した。レイは涙をぬぐうのも忘れ、戻ってきた彼女を迎えた。

「おかえり、うさぎ」

第十六話 迷い込んだ戦士達 うさぎ、心の迷宮（後書き）

声 …『セ、レニ、テイ』

うさぎ…『お母様！』

声 …『あなたは、いま、しあ、わせ、ですか？』

うさぎ…『幸せです、お母様！レイちゃんがいる。』

まこちゃんも、亜美ちゃんも、美奈子ちゃんも！  
はるかさん、みちるさん、

せつなさん、ほたるちゃん！

まもちゃんに、ちびうさ！みんな！

みんな、私のそばにいてくれます！』

うさぎ…『だから幸せです、お母様！』

うさぎ…『【美少女戦士セーラームーン Memories】

うさぎ涙！月の王国、最後の日』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十七話 うさぎ涙！月の王国、最後の日

私はバルコニーにでると、空を見上げた。そこには美しく光る、白い月が浮かんでいる。

「エンディミオン様」

きつとあの方はまた、月の女王と一緒だ。プリンセスそう考えると、何かに締め付けられているかのように、息苦しくなる。

『エンディミオンヲ、ワタシノモノニ……』

はつと我に返り、私は頭を抑えた。震えが止まらない。まただ……。私の視線は月を離れ、あの彗星がいるであろう場所へと向かう。あの彗星が近づいてくるのは、ずいぶん前からわかっていた。でもこれは予想はしていなかった。彗星が近づくとつれ、強くなっていく邪悪な波動。私は唇を噛み締めた。ここ数日頭が重く、気をつけていないと意識を持っていかれそうになる。

「誰です！」

気配を感じ、振り返るとそこには召使いが立っていた。あまりにも厳しい表情になってしまっていたのか、怯えた目で私を見ている。

「ごめんなさい。驚かせてしまったようね」

「よ、夜の風はまだ冷たいです。お体に触ります。中に入られたほうが……」

私を心配そうに見つめる彼女に、私はそつと微笑んだ。

「ふふ、ありがとう。でも大丈夫だから。あなた、初めて見る顔ね？」

「先日からお世話させていただくことになりました、ラビットと申します」

ラビットはそう言うと深々とお辞儀をした。彼女の透き通るような目は、どこかあの人を彷彿とさせる。だからだったのか、私は気づくと、自分でも思いがけない言葉を口にしていった。

「ねえ、ラビット。少し話し相手になってもらえないかしら?」

「私わたくしで良ければ、喜んで」

私の問いに、ラビットは一瞬戸惑った顔をしたが、すぐに微笑むとバルコニーに出てきた。

「ねえ、ラビット。今地球に向かって、邪悪な彗星が近づいているわ」

「邪悪な彗星……」

「その所為で地上でも、邪悪なものが発生してきているわ。そしてもうすぐ、流星雨が降り注ぐことでしょうね」

ラビットは何も言わず、静かに私の言葉に耳を傾けている。私は苦笑しながら、また空を見上げた。

「きつと綺麗でしょね……不吉の前兆なのに……」

私はため息をついた。

「じきに暗黒の神が目覚めるわ」

「暗黒の神……」

「本当ならその暗黒の神を封じなければならぬというのに……」

私だったら……。全て壊れてしまえば良いと思っている  
言ってしまったから、私は顔を背けた。

「月の王国も、地球の王国も……私もみんな……」

自分でも何故、召使いのラビットに向かってこんな話をしているのか、わからなかった。けれど何故かやめられない。

「そして……」

私は彼女に向き直った。

「そしてあの人をどんな形でもいいから手に入れたい。そんな邪悪な事を考えてしまおうの」

私はもう一度、彗星がいるはずの場所を見上げた。

「あの彗星の力に、影響されてしまったのかしら?」

私は自嘲気味に呟いた。わかっている。彗星はきっかけにしか、過ぎない。この気持ちは私自身のもの。

「ダメですよ！」

ラビットが思いがけず大きな声を上げたので、私は目を丸くした。彼女自身もその事に気づいたのか、声が極端に小さくなる。

「ダメですよ。邪悪な力で愛を掴んでも、それは本当の愛ではありません。負けないでください」

ラビットは必死に私に訴えかけてきた。まっすぐな目。本当に似ている。彼女に。月の王女プリンセスに。多分、彼女も同じことを言うのに違いない。

「ありがとう、ラビット。もう下がっていいわ」

私は扉の前に立ち止まると、ノックをした。返事は返ってほこない。ちよつと思議に思ったものの、私は声をかけ、扉を開けた。

「失礼します」

中に入ってみると、明かりはついてなく、部屋は暗かった。部屋の主を探して、少し見回す。ふと白いベールのようなカーテンが、風になびいているのに気がついた。

「セレニティ様」

私はバルコニーに出ると、思いにふけり、空を見上げていた彼女に声をかけた。白いドレスを着た彼女は、ゆっくりと振り返る。

「ヴィーナス」

振り返った彼女の表情はどこか暗かった。多分、彼の事プリンセスを案じていたのだろう。

彼女の思い人。地球の王子、プリンス・エンディミオン。

直接かわりのない私達から見ても、彼は申し分のない人間なのだが、残念な事に、最近、地球の王国について、あまり良い噂を聞かない。

「大丈夫ですよ、セレニティ様。クイーンも、地球の王国の事は気にかけていらつしゃいます。それに私達、セーラー戦士もいます」  
こんな言葉で彼女の不安を取り除けたとは思わなかったが、彼女は

微かに笑った。少し間をおいて、彼女は訊いて来た。

「ねえ、ヴィーナス？どうしてあなたは、こんなにまで優しくしてくれるの？私が月の王女で、<sup>プリンセス</sup>あなたがセーラー戦士だから？」

思いがけない問いに、一瞬反応が遅れる。

「突然どうしたのですか、セレニティ様？」

彼女の目を見て、ようやく私は理解した。彼女は不安なのだ。あの女王の娘といっても、彼女はまだ14歳。そしてなるべく彼女には伝えないようにはしているが、最近漂っている不穏な空気には、彼女も気づいているだろう。特に地球の事。<sup>プリンセス</sup>王子の事。

「セレニティ様が私の大切なお友達だからですよ。それだけじゃ、理由になりませんか？」

よほど私の答えが意外だったのが、彼女は一瞬キョトンとし、そして小さく笑い出した。

「ありがとう、ヴィーナス。そういえば、何か用事があつて来たのでは？」

「あつ、忘れていました。お母様がお呼びですよ？来週の式典の事で話があると」

彼女が玉座に姿を現すと、二人はひざまずいた。

「楽にしてください、二人共」

その言葉に二人は立ち上がる。

「久しぶりですね、ウラヌス。ネプチューン」

「お久しぶりです、クイーン」

「お久しぶりです、クイーン・セレニティ様」

白いチュニックに身を包んだ二人は、女王の言葉に頭を下げた。

「海王星、天王星は変わりありませんか？」

「おかげさまで平和なものです。こうして僕達が自由に動けるほどウラヌスの言葉にネプチューンもうなずく。」

「そうですか。それは喜ばしいことです」

女王のどこか疲れた表情に、ネプチューンの視線が厳しくなった。

「クイーン、やはり地球ですか？」

クイーン  
女王は悲しそうにうつむいた。

「ウラヌスにはまた、甘いと怒られてしまいそうですね」

「僕は別に……」

反論しようとするウラヌスを、女王は静かにさえぎった。

「甘いのは、私自身わたくしわかっていません。けれどセレニティのため、そして月の民のため、来週の式典は絶対に成功させたいのです」

クイーン  
女王の表情からは一途な願いを読み取ることができた。

「サターンとプルートには別の勤めがあるため、外せませんでした。代わりにあなた方を呼び戻しました。協力してはいただけられないでしょうか？」

クイーン  
女王の問いに二人は答えず、同時にひざまずいた。

「二人共ありがとう。長い旅路で疲れたでしょう？とりあえず休んでください。他のセーラー戦士達にも、ぜひ顔を見せてあげてください。きっと喜びますよ」

そこには肩までのそろえられた黒髪の少女が座っていた。けれどどこか心ここにあらずという様子。突然、彼女は立ち上がると、部屋の扉へと向かった。手をかけると扉は開き、長い髪の女性が現れる。「どこに行くつもりですか、サターン」

小さく溜息をつき、彼女は困ったようにサターンを見つめた。

「プルート、私……」

サターンの考えを分かっているかのように、プルートは悲しそうに首を横に振った。

「ダメです。クイーンという言葉、忘れたのですか？」

「でも！」

諦めきれないサターンは声を上げた。そんなサターンにつられたのか、プルートの声も大きくなる。

「私に時空の扉の守人という使命があるように、あなたには巫女としての使命があるはずです！」

その言葉にサターンは思わず息を飲んだ。その様子にプルートもあわてて顔を逸らす。彼女も分かっているのだ。つらい気持ちは自分と同じ。

「プルート、ごめんなさい、私……」

「いいですよ。あの二人もいることです。信じましょう、サターン」

「ええ。そうね、信じましょう」

部屋を出たところで、誰かとぶつかりそうになった。両手に書類を抱えていたため、咄嗟にバランスを保つこともできず、よろける。誰かに支えられ、耳元にささやかれた。

「おっと大丈夫かい、子猫ちゃん？」

甘い声に思わず顔が赤くなりそうになった。上擦りそうになる声を、あわてて抑える。

「ウ、ウラヌス様、お久しぶりです。相変わらずのようで」

クスクスという笑い声とともに、ウラヌスの影からネプチューンも顔を出した。

「お久しぶりですわ、ヴィーナス」

「ネプチューン様も、お元気そうで」

「ずいぶんな荷物だね？どこまで？持ってあげるよ」

「えっでも」

「久しぶりなんだからさ。手伝うよ」

「じゃあ、離宮の資料室まで、お願いできます？」

そう言っただけはウラヌスに、持っていた書類を半分手渡した。

三人で会話をしながら、<sup>パレス</sup>宮殿の廊下を歩いていく。

「最近、どう？」

ネプチューンの言葉に、ヴィーナスはため息をついた。

「やっぱり、平和、とは言い切れませんね。お二人も来週の式典の事で呼び戻されたんでしょう？」



ネプチューンがうなずくと、ヴィナーヌは少し疲れたように続ける。  
「ついでに彗星が近づいているのを、お二人はご存知ですか？ 妖魔の出現率も上がって、頭の痛いことだらけですよ」

ムーン・パレスと離宮を結ぶ渡り廊下にでた。ヴィーナスは立ち止まり、ふと空を見上げた。地球が青く、輝いている。

「そういえば、あの娘たちを見ないけど……妖魔のせいかしら？」

「マーズたちの事ですか？ ええ。私は式典の準備で手が離せないの  
で、彼女達に出てもらいました。もうすぐしたら、戻ってくるはず  
ですよ？」

三人はまた歩き出し、離宮に入る。

「ヴィーナス、ずいぶんと急がしそうだけど、僕達に手伝えること、  
他にも何かないかい？」

資料室につき、ウラヌスが訊いて来た。

「大丈夫ですよ。式典の準備は、ジュピターが戻ったら、手伝って  
くれることになっているし、お二人は今朝ついたばかりでしょう？  
今日は休んでください」

ヴィーナスの言葉にネプチューンはクスリと笑った。

「クイーンにもそう言われたのだけど、ウラヌスはやることがない  
と、落ち着きがなくて」

「おいおい、ネプチューン。それじゃまるで僕が子供のようじゃな  
いか」

「あら、違ったかしら？」

半ばあきれながらも、じゃれ合う二人を見ていて、ヴィーナスの口  
元にも笑みが浮かんだ。この二人は本当に仲が良い。

「じゃあ、セレニティ様にも顔を見せてあげてください。きっと喜  
びますよ」

「ジュピター！」

マーキュリーの声にジュピターはニヤリと笑った。目の前に迫って  
くる妖魔。

「こいつはまかせておいて！スパークリング・ワイド・プレッシャ  
ー！」

放たれた電撃は妖魔を消し去った。

「やったわね。って、キャ！」

電撃は勢いを失うことをなく、マーズをかすりそうになる。そして電撃はようやく暗い空へと消えた。

「もう、ジユピター……！！！」

「ごめんごめん。でも、おかしいな……」

ジユピターは、怒るマーズをなだめながら、不思議がっていた。ここまで技の軌道が外れるのは珍しい。

「見て！」

「えっ？」

「あつ……」

声をあげたマーキュリーの指差す方向を見ると、そこには空間の裂け目ができていた。裂け目にバチバチと音を立てながら見える小さな閃光。

「あちゃ～もしかして、あたしの所為？」

次の瞬間、裂け目から人影が現れた。グツタリとした様子の人影は、重力に引かれ、落ちてくる。

「うわっ危ない！」

ジユピターは瞬時に走り出し、まるで滑り込むかのように人影を受け止めた。

「……たたたた。君、大丈夫かい？」

女の子だった。彼女はグツタリとし、返事は戻ってこない。

「ジユピター、大丈夫？」

マーズとマーキュリーが遅れて走ってくる。

「その子が裂け目から落ちてきた子？」

「あつ裂け目は?!」

「大丈夫よ。その子が現れると同時にふさがったわ。安定しているから、そうすぐに開くことはないわ」

マーキュリーはゴーグルで確認しながら言った。

「それより……」

「問題は彼女よね……」

「どうする？」

三人は思わず顔を見合わせた。

「放っておくわけにもいかないし、とりあえず宮殿パレスに戻りましょう」

「ここは……」

目を開けると、そこは白い天井だった。起き上がり見回す。知らない場所だ。はつきりしない思考に戸惑っていると、声が聞こえてきた。

「良かった、気がついたのね」

そこには白いチュニツクを着た亜美が立っていた。チュニツクと言っても、現代のモダンなものとは程遠く、どちらかと言つと、ギリシャで着られていた服に似ている。まるで女神のようだ。

「亜美ちゃん……？」

「あら、お友達にでも似ていたのかしら？ 私はマーキュリーよ」

亜美にそっくりな女性は、小さく笑うとそう答えた。しぐさもそっくりだ。うさぎが目を丸くしていると、扉が開き、声と共に一人の女性が入ってきた。やはり、見覚えのある女性。スラリとした彼女もまたチュニツクを着ていた。長身の彼女には、マーキュリーとは違った意味で白くて長いワンピースは栄える。

「マーキュリー、さっきの子……って目を覚ましたみたいだね」

「まこちゃ……じゃなくて……もしかしてジュピター？」

「光荣だね、あたしの事を知っているなんて」

ジュピターは照れたように前髪を掻き揚げた。

「あたしはいつたい……。それにここは……」

少し余裕ができたうさぎは、部屋を観察した。

まるでどこかの宮殿のような豪華なつくり。

でも…何故かなつかしい。

「あちゃー。君、何も覚えていないのかい？」

「ジュピター？元はと言えば、あなたの所為でしょ？」

ジュピターはマーキュリーに怒られ、小さくなる。そんな様子にうさぎはクスッと笑った。まことと亜美、そのままだ。笑い出すうさぎに一瞬キョトンとする二人だったが、顔を見合わせ、一緒に笑い出した。

話を聞いてみると、妖魔との戦いで、ジュピターが放った技が反れたらしい。けれどそれだけに収まらず、空間に裂け目を作り…。

「そこから、あたしが落ちてきた？」

驚くうさぎに、ジュピターはコクリと頷いた。

「まったく、ジュピターの馬鹿力には困ったものよね。空間に裂け目まで作っちゃうなんて」

新しい声がしたと思ったら、扉には新たな人影が立っていた。レイちゃん！そんな言葉がうさぎの喉元まででかかる。

「マーズ！」

「あたしだって、わざとやったわけじゃないのに…」

マーズの辛口な口調に、ジュピターは口を曲げる。

「はいはい、拗ねるのはあと、あと！ジュピター、ヴィーナスが怒っていたわよ？式典の用意、手伝うんじゃないの？」

「あついけない」

ヴィーナスもいるんだ。うさぎはそんな事を考えていた。

やっぱりここは、過去の世界。多分、ムーン・パレスだろう。みんなの前世の姿。あまりにもそのままなので、自然と笑顔になった。

ジュピター、マーキュリー、マーズ、ヴィーナス。彼女達が転生して、うさぎの知るまこと達が生まれる。たぶん、自分の前世や衛の

前世も、この宮殿にいるに違いない。月の王女、プリンセスセレニティ。そして地球の王子、プリンセスエンディミオン。その事を考えると、心が痛んだ。

この先に待っている未来。わかっているけど、つらい。

マーズの言葉にジュピターはベットからスツと立ち上がる。

「じゃあまた後でね、あっえっと……」

あっ、そういえばあたし、まだ名前、言っていない。

「うさぎ。あたし、うさぎ」

「うさぎちゃんだね。じゃあ、またね」

ジュピターは人差し指と中指をたて、軽く挨拶をした。

「調子いいんだから、ジュピターは」

マーズは苦笑しながら、あたしに向き直った。

「はじめまして、うさぎ。私は……」

「マーズでしょ？」

マーズはキョトンとした顔になる。

「私の事まで知っているなんて、不思議な子ね、あなたは」

「マーキュリー？もう大丈夫でしょ、この子」

「怪我もないようだし、大丈夫よ」

「いらつしゃい。クイーンが会いたがっていたわ」

クイーンって……。そんな言葉を飲み込み、うさぎはマーズに連れられて、マーキュリーの部屋を後にする。

階段を降り、中庭を通っていく。バラが咲き乱れる中庭。初めて見るはずなのに、懐かしい気分になる。ふと空を見上げた。そこには青く美しく光る星、地球があった。

「うさぎ……？」

振り返ると、彼女は足を止め、空を見上げていた。似ている、そう思った。プリンセスもいつもあんな表情で空を、地球を見上げている。ふとキラリと何かが光ったのが見えた。見間違い？

「大丈夫、うさぎ？」

もう一度声をかけると、彼女は向き直った。見間違いではなかった。彼女の目から、一筋の線が光に反射する。

「うさぎ、泣いているの？」

私の問いは彼女は驚いたように自分の頬に手を触れた。私は苦笑しながらも近づき、彼女を抱きしめる。途端に堰を切ったように泣き出す彼女。

「レイちゃん。レイちゃん」

知らない名前を彼女は何度も何度も呟き続けた。

『レイちゃん…』

私はもう一度、強く彼女を抱きしめた。

「落ち着いた？」

あたしは目を逸らしつつも、頷いた。

「良かった。じゃあ、行きましょう。クイーンがお待ちだわ」

マーズは笑顔で微笑んだ。泣いてしまったのに、理由は聞かず、ただ抱きしめてくれた。前を歩く彼女に、あたしは心の中で呟いた。

『ありがとう、レイちゃん』

「クイーン・セレニティ様、お連れしました」

「お入りなさい」

凜とした声が帰ってくる。マーズが扉をあけると、そこは女王の寝室クイーンだった。立ち上がる女性。わかっていたこと、わかりきっていたこと。それでももうさぎは息を呑んだ。

「ありがとう、マーズ。しばらく二人にしてもらえるかしら？」

「はい、では私は外で待っています」

マーズはさっとお辞儀をすると、部屋を出て行った。そして女性はあたしに向き直った。

「もしかやと思っていましたか…」

「あたしは…！」

あたしは唇を噛み締めた。ダーク・キングダムがこの月の王国を滅ぼし、ベリルを封印するため、この人は死んでしまうのだ。

「わかっていきます。この事は私の胸わたくしの内にだけにとどめておきましょう」

「でも…！」

「私わたくしはこうして、あなたに会えただけで嬉しいのですよ。さあ、お行きなさい」

全てを悟ったかのようなその笑顔。あたしは直視できずに、気づくと部屋を飛び出していった。

マーズが驚いたように追いかけてくる。

「うさぎ！どうしたの、うさぎ！」

マーズがうさぎの腕を掴んだ瞬間だった。爆発音が宮殿を揺らした。

「まさか！」

マーズは躊躇せず、うさぎの腕を掴んだまま引っ張っていく。

「マーズ、痛いよ、放して」

抗議しても、マーズは何も言わない。厨房につくと、床の戸を上げ、うさぎを無理やり中へと押し込んだ。

「マーズ！」

「うさぎはここに入っていて、しばらくの間なら安全のはずだから」

「マーズ！」

マーズはそつとうさぎの頭の上に手を乗せた。

「そんな顔しないの、この泣き虫さんが。この炎の戦士、セーラー・マーズ様がそう簡単にやられるわけじゃないじゃないの！」

そう言って笑うと、マーズは無理やり戸を閉めた。うさぎは暗闇に包まれる。かまわずうさぎは戸をあげようとした。けど、動かない。マーズが戸の上に何かをおいたらしい。

「マーズ…！」

うさぎは戸を何度も何度も叩いた。手が痛くなっても、叩き続ける。「開けて、マーズ！マーズ！」

また爆発音、近い。ダーク・キングダムが攻めてきたのに違いない。「あたしだつて戦士なのに…きゃっ」

突然の揺れにうさはきはバランスを崩し、頭を打った。目の前が真っ暗になる。

『今日からは、私が地球と月を支配するのだ!』

『ベリル!プリンセスに指一本でも触れたら、私が許さん!』

『エンディミオン!』

『何故、月の王女をかばう?!お前は地球の王子。私と結婚すれば月と地球に君臨する、王になれるのだぞ?』

『ベリル。お前は悪のエナジーを秘めた、メタリアに惑わされている。正気を取り戻せ!邪悪な心を捨てるのだ!』

『ええい、黙れ黙れ!お前も殺してやる!!』

『エンディミオン様!!』

『来るなあ!』

『エンディミオン様!!』

『セレニティ!』

『セレニティ…』

『ハハハハ、死んだ。月の王女が死んだ!』

『クイーン・セレニティ様。銀水晶を使えば、あなた様のお命が…』

『私の命など、月と地球の平和にはかえられません』

『プリンセス・セレニティ。そして全てのセーラー戦士たちよ。あなたたちの愛が未来の地球で成就できますように…』

次に気がついた時、あたりは異常な静けさに包まれていた。思い出



すのに一瞬を費やし、うさぎは慌てて戸を押し上げた。障害物はなくなり、簡単に戸は開く。

「うそ…」

月の宮殿はその面影を残すこともなく、変わり果てていた。見渡すかぎりの廃墟。そんな中、光が地球へ向かって飛んでいくのが見えた。飛んでいくのは月の住民達だ。マーズ、ジュピター、マーキュリー、ヴィーナス。プリンセス・セレニティ、そしてプリンス・エンディミオン。みんなそこにいる。これで前世のうさぎ達は転生する。

たった一人、この月に残して。

うさぎは考えるより早く、光が飛び去った場所に向かって駆け出していた。転びそうになりながらも、一生懸命に走っていく。倒れた柱の上に、彼女は横たわっていた。

「お母様！」

うさぎは駆け寄り、彼女を抱き起こす。うさぎの声に、女性は目をかすかに開けた。

「セ、レニ、ティ？」

「お母様！」

彼女はすぐに微笑んだ。彼女にはわかっているのだ。うさぎが自分の娘が転生した姿だと。

「あなたは、いま、しあ、わせ、ですか？」

そんな彼女の問いに、涙が溢れ出す。

「幸せです、お母様！レイちゃんがいる。まこちゃんも、亜美ちゃんも、美奈子ちゃんも！はるかさん、みちるさん、せつなさん、ほたるちゃん！まもちゃんに、ちびうさ！みんな、みんな、あたしの側にいてくれます！」

うさぎは必死に叫んだ。弱くなっていく鼓動。冷たくなっていく身体。抱きしめた身体からこぼれて落ちていく、命のエネルギー。全てを引き止めようとするかのように、うさぎは声のかぎり叫んだ。

「だから幸せです、お母様！」

「よ、かった…」

目を開けると、そこは白い天井だった。またムーン・パレス…？一瞬、そんな考えがよぎる。

「気がついた？」

懐かしい声が聞こえてきた。隣を見ると、制服姿のレイが座っている。

「…レイちゃん」

その呼びかけに、レイは優しく微笑んだ。レイちゃんだ。マーズではない。あたしが知っている、レイちゃんだ。

「うさぎ…？」

心配そうに覗き込むレイに、うさぎは初めて、自分が泣いていることに気がついた。

「ここは…？」

「病院よ。衛さんの部屋では不便だったから、亜美ちゃんのお母さんに頼んだのよ。うさぎ、あれから三日も眠り続けていたんだから…」

三日も…？夢、だったのかな…。

「ねえ、レイちゃん…」

「なあに？」

「あたし…夢を見ていた。ずっとずっと昔の夢。レイちゃんと知り合うより、ずっと前の夢。あたしやレイちゃんが生まれるより、ずっと、ずっと前の夢」

「どんな夢だった…？」

レイちゃんの問いにあたしはそっと目を閉じた。浮かんでくる前世の世界。前世のみんな。まもちゃん。あたし。そしてお母様。

「悲しい…夢だった」

第十七話 うさぎ涙！月の王国、最後の日（後書き）

クレセント・ムーン：『ねえ、ネフライト。たとえあなたが裏切っても、私はあなたを信じるわ』

クレセント・ムーン：『だって私は信じているから。みんなを。そしてこの世界を』

クレセント・ムーン：『あとはお願いな、ネフライト』

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

月に託す想い！ネフライトの最後』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十八話 月に託す想い！ネフライトの最後

目を開けると、そこは白い天井だった。

「気がついた？」

懐かしい声が聞こえてきた。隣を見ると制服姿のレイが座っている。

「…レイちゃん」

その呼びかけに、レイは優しく微笑んだ。

「うさぎ…？」

心配そうに覗き込むレイに、うさぎは初めて自分が泣いていることに気がついた。

「ここは…？」

「病院よ。衛さんの部屋では不便だったから、亜美ちゃんのお母さんに頼んだのよ。うさぎ、あれから三日も眠り続けていたんだから…」

「ねえ、レイちゃん…」

うさぎはそっと自分の涙をぬぐうと、私に話しかけてきた。

「なあに？」

「あたし…夢を見ていた。ずっとずっと昔の夢。レイちゃんと知り合うより、ずっと前の夢。あたしやレイちゃんが生まれるより、ずっとずっと前の夢」

「どんな夢だった…？」

訊いてみると、ぼんやりとうさぎは視線を天井へと向けた。でもその様子からして、彼女はどこか遠くを見ているようだった。悲しげで、そしてどこか寂しげな表情でもある。

「悲しい…夢だった」

彼女はそう小さく呟いた。

私には彼女が見た夢はわからない。でも、なんだか想像できるよう

な気がした。彼女の心の中で見た風景。そしてさっきの言葉。多分、私達の前世の夢を見たのだろう。私達がまだ月で暮らしていた頃の事。私自身、前世について覚えていることは少ない。けれど彼女の場合、特別だ。いろいろあったせいで、記憶がフラッシュバックしていても不思議ではない。そこまで考えてから、私の思考は前世の事へと戻る。うさぎが月の女王。<sup>プリンセス</sup> 私たちがセーラー戦士。そしてクイーン・ベリル。彼女とは因縁が深い。彼女こそが栄えていた月の王国を滅ぼした元凶。そして今の私たちが戦士として覚醒することになったきっかけ。私は疲れた顔のうさぎを眺めながら、そんな事を考えていると、彼女が私に声をかけてきた。

「ねえ、レイちゃん」

「うん？」

「ごめんね、心配かけて」

「ほんと、そうよ。あなたはいつも私に心配ばかりさせて…」

レイは困ったように小さくため息をついた。

「でもね、今はあなたが私の事をまた、『レイちゃん』って呼んでくれていることが、本当にうれしい」

「レイちゃん…」

「うさぎ、早く元気になりなさい！元気になったら、私たちに心配かけた分、ぜんぶん、返してもらおうんだからね」

レイはいたずらっぽく笑った。

「エンディミオン……………」

眠りから覚めると、傍らには愛する人の顔があった。

「おはよう、セレニティ」

いつもと変わらない笑顔で微笑んでくれる。

「気分はどうだい？」

「ごめんなさい、心配かけて。もう大丈夫」

私が起き上がるうとする、彼が助けてくれた。そして抱きしめら

れる。

「信じていたよ、セレニティ」

暮れていく夕暮れの空を見上げながら、ネフライトは周りに気を集中させた。病院を中心に張り巡らせた結界に、不備はない。周りに警戒すべき相手も見当たらない。そしてネフライトはゆっくりと目を開けた。彼女の最後の言葉が蘇る。

『あとはお願いね、ネフライト』

そう彼女は笑顔で俺に向かって言った。まっすぐで、優しげな眼差し。名を持たないあの女性。月影夢見？クレセント・ムーン？どちらも仮の名前にしか過ぎない。そんな事を考えながら、俺の思考は彼女と始めて出会った時へと遡る。最初から彼女には驚かされてばかりだった。彼女はまるで蝶のように突然舞い降りた。そして彼女は自分の正体を明かした上で、手を結ばないかと訊いて来た。別に彼女の話を信じたわけではなかった。セーラー・ムーンと知り合う前だったら、俺は話には乗らなかつただろう。けれど、俺は話に乗った。あの眼に惹かれたからだ。セーラー・ムーンと同じ・・・いや、かつて月の王国に君臨した女王と<sup>クイーン</sup>同じ、まっすぐな眼に惹かれたからだ。そして、俺は彼女を近くで見えてきた。月影夢見、そしてクレセント・ムーン。一見関連性のない行動に見えても、彼女の行動によって、他のセーラー戦士たちは確かに成長し、眼に見えるくらいはつきりと強くなっていった。

『何故、俺を信じられるんだ？』

一度、そんな事を訊いたことがあった。俺の問いに彼女は驚いたように、俺の顔を見つめた。

『俺がずっと手を貸すとは限らないだろう？単にお前を利用するた

めに、手を貸しているだけかもしれない』

すると彼女はおかしそうにクスリと笑った。

『別に私はそれでも構わないわ。私だって同じようなものだもの。目的のためなら、私は何だって利用するわ。その過程にあなたが居たまでの事』

『俺が裏切つたらどうするんだ？』

『それでも私は、あなたを信じ続けると思っわ』

『はっ？』

思いがけない言葉に、俺は間の抜けた返事を返すことしかできなかつた。彼女はいたずらっぽく小さく笑った。

『そんなに意外？』

『まったくお前には驚かされてばかりだ』

彼女は空を見上げると、静かに話し始めた。

『ねえ、ネフライト。たとえあなたが裏切っても、私はあなたを信じるわ。だって私は信じているから。みんなを。そしてこの世界を』  
そして彼女は全てを包み込むかのような笑顔で、俺に向かって言った。

『あとはお願いね、ネフライト』

「それで、どうなんだい亜美ちゃん？うさぎちゃんの様子は？」

まことの問いに亜美は安心させるように、おちついた表情で答えた。

「うさぎちゃんは大丈夫。ちゃんと回復しているわ」

亜美の答えに、美奈子も安堵の表情に変わる。面々はいつもの通り、喫茶クラウンの指定席を囲んでいた。

「問題を挙げるとしたら・・・」

「・・・うさぎちゃんがまだ戦えない、という事かしらね」

アルテミスの言葉にルナが付け加える。

「だから私たちがしっかりしなくちゃ！今日はレイちゃんが行って

いるんだっけ？」

「ええ。夕方にははるかさんたちも行くと言っていたわ。私もあとから覗いてみるつもり」

亜美と美奈子が話している横で、まことは窓の外を見上げた。建物の間から見える空。雲ひとつ無い青空。まことはもう一度確かめるかのように呟いた。

「本当に良かった・・・うさぎちゃんが戻ってきてくれて・・・」

「・・・うさぎ？」

返ったきたのは規則正しい寝息だった。

「寝ちゃったか・・・」

しょうがないな、そんな顔でレイはうさぎを見つめ、そして腕時計に眼をやった。もう戻らなくてはならない。6時に火川神社でみんなと会う約束になっている。ふとノックの音がした。

「はい？」

レイが返事をする、病室のドアが開き、はるかとみちるが入ってきた。

「はるかさん。みちるさん」

「交代の時間だよ？」

はるかは気遣うようにレイに声をかけた。

「うさぎの様子はどう？」

「今はまた眠っています。じゃあ、お願いします」

レイはカバンを取り、軽く頭を下げると病室を出て行った。

みちるはレイの座っていた椅子に座り、はるかは近くの椅子を引き寄せた。二人の気配に気がついたのか、うさぎがゆっくりと眼を開ける。

「はるか・・・さん・・・みちる・・・さん・・・」

「ごめんなさい、起こしてしまっただかしら？」

うさぎは寝起きのボンヤリとした表情で、首を横に振った。そして



彼女が起き上がるうとするので、はるかがあわてて立ち上がった。

「どうした？」

「二人に会ってもらいたい人が居るの」

「私達に？」

うさぎは足をもつらせながら、立ち上がった。そんなうさぎをはるかが咄嗟に受け止める。

「大丈夫か」

「あたしは大丈夫」

レイが神社へと続く階段を駆け上がると、すでに他の三人がレイの帰りを待っていた。

「レイちゃん、おかえり」

レイが境内に足を踏み入れた瞬間だった。

「?!」

身構える暇も無く、火川神社は邪悪なエナジーに包まれた。

はるかともちるに支えられながら、うさぎは病院の屋上へとたどり着いた。夕暮れの色に染まっていた空のキャンバスは、もうすでに夜の色に塗りつぶされ、暗くなっている。

「お団子・・・？」

うさぎの意図がつかめず、はるかが不思議そうにうさぎの名を呼んだ。

「はるか」

みちるの声に前を向くと、そこに一人の人間が立っているのに気がついた。人影の正体に気がつくと、はるかともちるは守るかのようになり、うさぎの前に立った。

「お前は！」

「やはり気がついていたらか、プリンセス。いや、セーラー・ムーンと呼ぶべきか？」

「ええ。やっとあなたにお礼が言える。ありがとう、ネフライト」

予想に反して、穏やかな表情のネフライトに戸惑いながら、みちるはうさぎに訊いた。

「どういう事、うさぎ？」

「彼はあたしを助けてくれていた。そして守っていてくれていた。あなたがあたしの闇のエナジーを引き受けてくれていなかったら、あたしは戻ってこれなかった」

「意識があつたのか？」

ネフライトは一瞬驚いた表情をした。けれど、それも一瞬だけ。

「別に不思議ではないか」

クスッと笑うとネフライトは続ける。

「だが、お前を傷つけた事には変わらない。すまなかった」

あまりにも今まで見てきたネフライトとは違う態度に眼を丸くしながら、今度ははるかが口を開いた。

「お前は何故、お団子を守るような事を・・・」

「一つは、彼女に頼まれた。そんな所かな」

「夢見・・・」

みちるは思わず彼女の名前を呟いていた。

「そして俺自身も別に復讐をしたかったわけではない。俺は・・・ただ眠っていたかっただけなのかもしれない。俺はかつて、プリンセス、いやセーラー・ムーン、そしてあの娘こに救われた」

そこまで言うとなフライトは歩み出て、うさぎの前に跪いた。思いがけない彼の行動にうさぎも目を丸くする。

「俺が言えた義理ではないが、セーラー・ムーン。クイーン・ペリルを救ってくれないか？あの人も本当は孤独な人だ」

彼は・・・・・・・・。みちるは思わず息を飲んだ。以前敵対したネフライトではなく、穏やかに他人を気遣う一人の人間の姿がそこにあった。どちらが本当の彼か。それは分からなかった。それを判断するのは、私は彼を知らなすぎる。けれど彼をここまで変えた人物。それは容易に想像することができた。自分の隣に立っている、月野

うさぎ。そして彼と行動を共にしてきた、月影夢見。その二人だろ  
う。そんな事を考えていると、突然、ざわめきを感じた。見ると、  
遠くでエナジーが放出されている。

「あれは！」

「あつちは・・・まさか・・・火川神社？」

「レイちゃん！」

ネフライトは硬い表情に戻り、舌打ちをした。

「ゾイサイトのやつ、こつちが見つからないから、向こうに手を出  
したか・・・」

「待つてネフライト！」

うさぎが呼び止める間もなく、ネフライトの姿は掻き消えた。同時  
に、病院を包んでいた何かが消える。

「ここを結界で守っていたのか？」

「あたし達も行かなきゃ！」

走り出そうとするうさぎを、みちるが制止する。

「うさぎはここにいて。その身体じゃ、まだ無理よ！」

「どうして・・・」

「足手まといだ」

はるかという言葉にうさぎはキツとはるかの顔を見つめた。数秒のら  
み合いの末、うさぎが静かに言った。

「いや」

「うさぎ・・・わかって・・・」

みちるが困ったような表情でうさぎの名を呼んだ。

「みちるさん、ごめんなさい。でもこれだけは譲れないの。みんな  
が危険な目にあっているのに、あたしだけここに残る事はできない」  
はるかは大きく溜息をついた。

「しょうがない。君が言い出したら聞かないのは、新しいことじゃ  
ない」

「はるか」

「はるかさん」

「けど一つだけ、約束しろ。無理はしないと」  
うさぎは頷いた。

「約束する。無理はしない」

その頃、内部系戦士達は追い詰められていた。エナジーを吸い取るバリアの中、ボロボロになりながらもどうにか立っている状態だ。  
「さっきの勢いはどうしたのかしら？ふふっ。やっぱりゾイサイト様特製のバリアでは、さすがのセーラー戦士も形無しね。ゾイっ！」  
まるで弄ぶかのように、空中を浮かぶゾイサイトは攻撃を放った。  
戦士達は飛びのくが、戦いの疲れの所為か動きが鈍い。

「ハアハア。みんな大丈夫？」

「何とか……」

ヴィーナスの問いに、ジュピターが肩で息をしながら答えた。

「ふふっ。ほらほら、逃げないとあたっちゃうわよ？ゾイっ！」

「キャっ！」

攻撃をかすってしまったのか、マーズがふらつき足を抑えている。

「しまった……。足が……」

動けずに居るマーズに気づくと、ゾイサイトはニンマリと笑った。

「これで止めね、ゾイ！」

「マーズ！」

「マーズ」

「マーズ……！」

避けられない。そう思い、顔を背けた時だった。マーズは、そこに張り詰めていた空気が軽くなるのを感じた。

「バリアが……消えた？」

同時に聞こえる、力強い詠唱。

「ワールド・シェイキング……！」

光の球体が地を這いながら、ゾイサイトの攻撃にあたり、相殺した。

「みんな！大丈夫？」

ネプチューンとウラヌスが内部系戦士達の前に立ち、ゾイサイトと向かい合った。仲間達に駆け寄る、もう一つの影。

「セーラー・ムーン……」

「来てくれたんだ」

安堵する仲間達の表情。

「あら、セーラー・ムーン。見つからなかったから、彼女達と遊んでいたのよ？ やつと出てきてくれたわね」

「あなたは、ゾイサイト！」

柔らかい物腰とは裏腹に、残酷な面を持っている四天王の一人。

「あなたがダーク・キングダムにいる事は、最初から気に食わなかったのよ。あなたが裏切ってくれたおかげで、ようやく言い訳ができたわ」

ニンマリと笑うゾイサイトに、ネプチューンとウラヌスは身構える。

「みんなまとめて片付けてあげる」

そういうと、ゾイサイトは指を鳴らした。消えたバリアが内部系戦士達とセーラー・ムーンを包み込むかのように復活する。

「しまった！」

駆け寄ろうとするウラヌスたちの前に、ゾイサイトが立ちふさがった。

「あなた達の相手はこの子たちよ」

ゾイサイトが再度指をならすと、地面の影がゆっくりと起き上がった。

「くそつ妖魔か」

「せっかくの楽しみを、あなた達なんかには邪魔させないわ」

「……セーラー……ムーン……気をつけて。このバリアはエナジーを吸い取る」

マーズの言葉にセーラー・ムーンは安心させるかのように微笑んだ。  
「大丈夫。みんなは、あたしが守るから」

その言葉と共に、彼女の銀水晶の光が強くなっていく。マーキュリ  
ーは押し付けられている空気が、軽くなっていくのを感じた。けれ  
ど、セーラー・ムーンは必死にゾイサイトのバリアに耐えているの  
が手に取るように分かる。

「うさぎちゃん！」

その姿にヴィーナスは思わず叫んでいた。

「そんな弱った身体で、いつまで耐えられるかしら？」

ゾイサイトが挑発的な笑みを浮かべ、手をかざした。一瞬のうちに  
氷の刃が出来上がる。そして微かだがゾイサイトの手が動いた。氷  
の刃が勢いよくセーラー・ムーンに向かって飛んでいく。

「セーラー・ムーン！」

「うさぎい！！」

全ては一瞬だった。あたりは光に包まれた。ウラヌスたちの前に現  
れた妖魔は消し飛び、内部系戦士達はゾイサイト、そしてセーラー・  
ムーンが張ったバリアが消えたのを感じた。

「うっ」

誰かが声を上げた。

「セーラー・ムーン?!」

光が収まり、あたりが再び見えてくる。声を上げたのはセーラー・  
ムーンではなかった。胸を苦しそうに掴んでいるのはゾイサイトだ  
った。

「ネフライト、あなた……!!」

憎しみがこもった目で、ゾイサイトはセーラー・ムーンを守るよう  
に立ちはだかる彼をにらみつけた。

「ゾイサイト。今度は一緒に地獄まで付き合ってもらおうぜ？」

セーラー・ムーンは大きく目を見開いた。余裕のある口調だが、ネ  
フライトの肩には深々と、彼女を狙って放たれたゾイサイトの氷の

刃が突き刺さっていた。

「セーラー・ムーン！」

ネプチューンとウラヌスが駆け寄ってきたのを見ると、分が悪く感じたのか、ゾイサイトはもう一度ネフライトをにらみつけ、姿を消した。その事に安心したのか、ネフライトが肩を押さえ、倒れこんだ。

「ネフライト！」

「無事か？セーラー・ムーン」

駆け寄るセーラー・ムーンに、ネフライトは笑顔を向けた。けれど、次の瞬間、彼は激しく咳き込んだ。口元が血で汚れる。

「どうして……」

「さあな、どうしてだろうな……」

心配そうに見つめるセーラー・ムーンに、ネフライトは穏やかに答えた。

「光には、消えて欲しくなかった。きつと、お前なら照らせる。どんな暗闇でも……。だから信じてみたくなった。お前を。」

お前達を」

その言葉と共にネフライトの視線は他のセーラー戦士たちへと向かう。

「お願いだ、セーラー・ムーン。クイーン・ベリルを救ってくれないか？」

目に涙を溜めた彼女は何も言わず、ただゆっくりと頷いた。

冷たくなっていく身体、薄れていく感覚。これでまた眠れる。そうネフライトが思ったときだった。

「ネフライト、許さないわよ」

突然セーラー・ムーンの口調が変わった。心なしか、声も別人に聞こえる。

「眠るなんて、私が許さない」

「お前は……」

同時に銀水晶が光り、ネフライトの身体は光に包まれた。

「温かい、光だ……」

まるで全てを優しく包み込むかのような、白い月の光。ネフライトは身体が軽くなっていくのを感じた。

「生きて。今度はダーク・キングダム of 四天王ではなく、一人の人間として」

彼女の口から、まるで音色のような声で言葉がつむがれる。その姿は彼女の母親、クイーン・セレニティにそっくりだ。

「俺はベリルの元、月の王国を滅ぼした。それなのに……」

ネフライトはそつと顔を背けた。彼女はまぶしすぎる。彼女の光は温かすぎる。全てを包み込むかのようなその光は、自分の心まで照らしてしまいそうで、居心地が悪い。

「罪の意識を感じているのですか？ だったらその罪は私が赦します。ネフライト、あなたの罪を赦します」

ネフライトは大きく目を見開いた。

「俺はお前を、お前の仲間達を傷つけた。そんな……そんな俺を、お前は赦すというのか？ 俺に生きるというのか？」

彼女は静かにうなずいた。

「明日を夢見る権利は、誰にだってあります。それはあなたにも」  
ネフライトの目から一筋の涙が零れ落ちた。

「セーラー・ムーン……」

「今度は、女の子との約束、破っちゃダメよ？」

おどけたセーラー・ムーンの言葉に、ネフライトは笑った。まるで重荷を下ろしたかのように、安らかな笑顔。

「ありがとう……」

そんな言葉を残し、ネフライトの身体は光になって星空へと消えていった。

「彼は……？」

二人の様子を見守っていたマーズが呟いた。他の仲間たちは、ネフ



ライトが消えていった星空を見上げている。

「銀水晶の力で転生するわ。けれど、今度はダーク・キングダム  
の四天王、ネフライトではなくて、一人の人間として」

そう言うとセーラー・ムーンはすっと立ち上がり、仲間達のほうへ  
振り返った。目の前に立っている人物が、夢見なのか、うさぎなの  
か、マーズにはわからなかった。けれど確かな事が一つだけあった。  
彼女はセーラー・ムーン。今はそれだけで十分。

「おかえり、セーラー・ムーン」

マーズがそう言うと、彼女はうれしそうに笑った。

「ただいま」

## 第十八話 月に託す想い！ネフライトの最後（後書き）

はるか：「おや？なるほど、そういう事か」

みちる：「私もあの子達のおせつかいがうつったのかしら？」

はるか：「君が言い訳なんてめずらしいじゃないか。本当は同じ画家として、あの子を放って置く事ができなかったただじゃないのか？」

みちる：「ふふっ。気づかれましたか？」

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

守れ少女の夢！ 絵に懸ける想い』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十九話 守れ少女の夢！ 絵に懸ける想い

「みんな、また明日ね」

「バイバイ」

ちびうさちゃんと手をつなぎながら帰って行くうさぎちゃん見送っている、隣に立っていたまこちゃんの声が聞こえた。

「ホントに帰って来てくれたんだね」

「ええ」

自分の眩きが聞こえていたとは思っていなかったらしく、彼女は私の事を驚いたように見つめた。

「でも、心配だわ」

「どうしたんだい、亜美ちゃん？」

まこちゃんがキョトンとした表情になる。

「うさぎちゃんの事。いろいろあったから。今、かなり複雑な気持ちじゃないかしら？」

「・・・ネフライトの事もあるしね」

まこちゃんが溜息と一緒に呟いた。

「大丈夫よ」

私たちの会話に気づいたのか、美奈子ちゃんが加わってきた。

「あたし達がいるじゃない。うさぎちゃんは一人じゃない」

美奈子ちゃんはうさぎちゃんが消えた方向を見ながら、力強く言った。

「信じましょう、うさぎちゃんを」

「ただいま」

「おかえりなさい、うさぎ、ちびうさちゃん」

家に入ると、育子ママが迎えてくれた。

「うさぎ、帰ってきた早々悪いんだけど、お使い頼めるかしら？ ちよっと買い忘れちゃって」

「わかった」

予想していた反応とは、正反対の物が返ってきた。育子ママも一瞬驚いていたようだったが、お金とメモをうさぎに渡す。

「じゃあ、行って来ます」

「お願いね」

うさぎはカバンだけ置くと、また出て行った。

「やっぱり元気ないわね、あの子」

育子ママが目を細めながら、うさぎのカバンを手を取った。うさぎのバカ。育子ママも心配しているのに。そう、心の中で考えながら育子ママを見ていると、育子ママはあたしが見ている事に気づいたのか、笑顔で振り返った。

「ちびうさちゃん、今レモンパイ作っているところなの。手伝ってくれるかしら？」

「うん！」

「はあ〜」

気づくと私はまた溜息をついていた。まったく、なんで私がお爺ちゃんの迎えに行かなきゃいけないのよ。珍しく雄一郎と出かけたと思ったら、お財布落として二人で立ち往生とは……。

「はあ……」

もう一度溜息が零れ落ちる。まったく……。

自動ドアをくぐり、私は週末のにぎわっているデパートに足を踏み入れた。

「この人混みの中を探せと……？」

私は半ば呆れながら、三度目の溜息をついた。週末、そして何か催し物もやっているらしく、とにかく人が多い。ここで二人を探さなきゃいけないと思うだけで、うんざりする。

「あら？」

ふと、一枚の絵が目に入った。その絵の隣には「ファンタジー絵画

展】と書かれた看板。デパートの催しで、展覧会を開いているらしい。けれど、他の絵は目に入らなかった。

「この絵・・・」

まるで引き寄せられるかのように、気づくと私は絵に近づいていた。月夜の湖畔がテーマの絵だ。湖の水面に反射して映る白い月が、すごく印象的だ。

『あなた、モデルになってくれない？』

『ねえ、レイちゃん？画家ってね、心を描くのが仕事だと思うの。』

それが自分の心の事だってあるし、モデルの心の事もあるわ』

『大切なもののためなら、いくらでも強くなれるものよ？』

「夢見さん・・・」

ふとあの人の名前が零れ落ちた。この絵・・・似ている。夢見さんの絵に似ている。

「素敵な絵よね」

絵に見入っていると、聞きなれた声が肩越しにした。

「みちるさん！」

彼女はレイの横へ立ち、改めてじっくりと絵を眺める。

「これをあの子が描いたなんて、中々信じがたいわね」

「みちるさん、この絵を描いた人を知ってるんですか！」

まるで食いつくように質問するくレイ。そんな彼女に、みちるはいたずらっぽく口調で逆に訊いて来た。

「会ってみたい？」

「はい！」

夢見が消え、うさぎが戻ってくると、まるで彼女が最初から存在していなかったかのように、人々の記憶から消えていた。セーラー戦士たちの記憶を除いて。そんな中に出会ったこの絵。気にならないはずがない。みちるは静かに微笑むと、手帳を取り出した。そして何かを書き込むと、そのページを破りとり、レイに差し出す。

「彼女は、ここにいるわ」

「みちるさん……!」

メモを見つめるレイの瞳が、驚きで大きくなる。

「あとは……自分で確かめる事ね」

「ありがとうございます」

「おや?」

すれ違った女性に、キョトンとはるかは振り向いた。

「レイちゃん?」

脇目を降らず自動ドアに向かっていているレイは、こっちは気づかなかった様子だ。彼女が来た方を見ると、みちるが立っていた。

「みちる」

ふと彼女の後ろの絵に目がいく。

「なるほど、そういう事が」

「私もあの子達のおせっかいが、うつったのかしら?」

みちるは少し戸惑ったような表情で、もう一度絵を見上げた。夜の湖畔。水面に映る月。月に特別な想いを持っていなくても、この絵は人を惹き付ける何かを持っている。

「君が言い訳なんて、めずらしいじゃないか。本当は同じ画家として、自信をなくしたあの子を、放って置く事ができなかっただけじゃないのか?」

「ふふつ。気づかれてしまった?」

みちるはレイが出て行った方をみつめながら、ポツリと呟いた。

「せめて、きつかけになつてくれればいいけれど……」

はるかはそのつとみちるの肩に手を置いた。

「きつと、大丈夫さ」

レイは立ち止まり、ボンヤリとみちるから貰ったメモを見つめていた。勢いそのまま見舞いのため花束を買ったが……考えあぐねていた。メモにはみちるの整った文字で、病院、病室、そして『月影

夢見』という名が書かれている。

「どうしよう・・・」

この子こそが本来の『月影夢見』。レイが知っている『あの人』ではない。面識はない。彼女の事は、はるか達を通じ話に聞いていただけだ。

会ってどうするの？絵が似ているからって『あの人』と重ねすぎていない？そんな疑問がぐるぐると、頭の中を廻る。

「レイちゃん」

声をかけられ振り向くと、そこにはうさぎが立っていた。

「うさぎ」

「どうしたの、こんなところで？」

「うさぎこそ、どうしたのよ？」

「ママのお使い。レイちゃんは？」

「瞬、答えに詰まる。」

「お、お見舞いに行こうかと・・・」

「お見舞い？」

うさぎは好奇心旺盛な目で聞き返してくる。こうなったら多分私が話すまで話してくれないだろう。私はため息をつきながらも、うさぎに説明することにした。

「・・・という事なの。それで迷っていたんだけど・・・」

それまで何も言わず話を聞いていたうさぎが聞いてきた。

「ねえ、レイちゃん。レイちゃんはどう思ったの？」

「どうって？」

うさぎは少し考え、言葉が続ける。

「絵を見て、みちるさんに夢見ちゃんの事を聞いて、どう思ったの？」

『会いたい』。『会ってみたい』。ただそれだけだった。

「だったら十分じゃない？」

うさぎはピョンと立ち上がり、手を取り、私を無理やり立ち上がらせた。

「う、うさぎ？」

「お見舞いに行くんでしょ？」

そして私の手を握ったまま走り出す。私は思わずバランスを崩しそうになった。

「う、うさぎ！」

「レイちゃん、早く、早く！」

「このあたりのはずなんだけど……」

「出て行って！」

病院につき、見舞い相手の病室を探していた二人は、大声に振り向いた。見ると、ある病室の扉が開きっぱなしになっている。

「ママなんて大嫌い！出て行って！」

少女の声に、一人の女性が押し出されるように出てきた。そして女性の目の前でピシヤリと閉ざされるドア。

「夢見！」

「どうしたんですか？」

「お恥ずかしいところを。あなたたちは？」

レイは寂しそうに病室のドアを見つめる女性に声をかけた。

「えっと、その……」

「夢見ちゃんのお見舞いに」

言い出せずにいるレイが変わって、うさぎが答えると、女性は笑顔へと変わる。

「あら、そう！夢見も喜ぶと思うわ」

「さっきのは……」

「うさぎ！」

躊躇われる内容の問いに、レイは思わず声を上げた。その様子に女



性は困ったように笑う。

「いいのよ。見られてしまったし」

そういうと、彼女は近くのベンチに座った。ため息交じりで話し始める。

「夢見が事故にあったのは、知っているわね？その時、右腕も怪我してしまって。お医者様はリハビリで直ると言われたんだけど、あの子、すっかり落ち込んでしまって・・・」

「そうなんですか・・・」

レイはデパートで見た絵を思い出していた。あれほどの絵を描く子だ。きつと絵が大好きな子なんだろう。それが怪我で描けなくなり、落ち込むのは不思議ではないのかもしれない。

「あら？もう、こんな時間？」

予定が入っているのか、夢見の母親は驚いたように時計を見ると立ち上がった。

「ぜひゆっくりして行ってね」

そしてちいさく一礼するとその場を去っていった。その様子を考え深く見送っていたレイに、うさぎは笑顔で声をかける。

「レイちゃん、会ってみよ？」

「えっ？あつ、そうね。そのために来たんだしね」

半分は自分に言い聞かせている様子のレイに何も言わず、うさぎは病室のドアをガラリと開けた。

「失礼しま・・・ふぎゃ?!」

「う、うさぎいー!」

枕を顔面に受け、伸びるうさぎ。レイは慌ててうさぎが手放した花束を受け止めた。

「マ、ママじゃない？」

そしてそこには呆然とした少女の姿があった。

「ごめんなさい、あたし、ママかと思って・・・」

気まずそうにする少女に、レイは安心されるように笑った。

「大丈夫。大丈夫。丈夫さだけがとりえだからね、う・さ・ぎは」  
レイはワザとらしく『うさぎ』を強調させる。そんなレイにうさぎはすぐ反応した。

「あつ、レイちゃんひどい」

そんなレイとうさぎのじゃれあいを可笑しく感じたのか、少女は笑い出した。レイとうさぎも顔を見合わせ、笑顔になる。

「自己紹介がまだだったわね。私はレイ。火野レイ」

「あたしは月野うさぎ。よろしくね」

「うさぎさんに、レイさん」

車椅子の少女は、確認するかのように二人の名前を繰り返した。

「ねえ、夢見ちゃん、天気いいし、ちょっと外出してみよう？」

「えっ？でも？」

うさぎの勢いに押され、戸惑う夢見。けれどそんな様子に構わず、うさぎは後ろに回りこむと、車椅子を押しはじめた。

「ほらほら！行くよ」

「うさぎさん?!」

「本当だ・・・天気がいい」

うさぎに車椅子を押され、外に出た夢見はゆっくりと深呼吸をした。そして小声で呟く。

「忘れてた。外がこんなに気持ちいいなんて」

「でしょ〜」

前を歩いていたレイがクルリと、笑顔で振り返った。うさぎ達は足を止め、近くのベンチに座る。寂しそうな少女の横顔に、レイは気づくと口を開いていた。

「ねえ、夢見ちゃん。もう一度だけ、絵ががんばってない？」

「レイさん……」

レイの問いに、夢見は不安そうな表情へと変わる。

「今日、デパートで夢見ちゃんの絵、見たの。すごく綺麗だった。」

私、もっと夢見ちゃんの描いた絵が見たい」

「でも……」

渋る夢見にうさぎは優しくな眼差しで微笑みかけた。

「ねえ、夢見ちゃん。どうして、夢見ちゃんは絵を描き始めたの？」

「私は……」

『ママ、見て見て。絵、描いたの！』

『上手にかけたわね、すごいわ』

『えへへ』

『描きたい』

『夢見、こんどのコンクールでも入賞ですって』

『僕は好きだよ、夢見の絵』

『もっと描きたい』

『救急車だ！女の子が轢かれたぞ！早く！』

『月影さん、交通事故にあったらしいわ。なんでも腕も怪我してしまっただって話よ』

『可哀想に。絵、どうするのかしら。今までのようにはいかないでしょうね』

『描けない』

『指が動かない』

『大丈夫だよ。リハビリでまたすぐに描ける様になるさ』

『もう、前のように描けない』

『もう描けない。かけない、かけない、カケナイ、カケナイ……』

『捕まえた』

「いやああああ!!!!」

「夢見ちゃん、どうしたの？」

胸を掴み、夢見は突然苦しみ始めた。レイは何かを感じ取ったのか、離れる。

「うさぎ、離れて!」

「えっ?」

夢見が立ち上がった。その拍子に車椅子が倒れる。そしてまるで爆発のように、邪悪なエナジーが広がった。

「きゃっ!」

レイの声に気を取られ、反応できずにいたうさぎは、波動に突き飛ばされた。

「うさぎ!」

「そんな、夢見ちゃんが妖魔まじゆまに?」

「うさぎ!とにかく、変身よ!」

レイと頷き合うと、うさぎは自分のコンパクトを掲げた。

「ムーン・エターナル!」

「マーズ・クリスタル・パワー!」

二人の声が重なった。

「メイクアップ!」 「メイクアップ!」

守護星の力強い光に二人はそれぞれ包まれる。そして光が消えると、そこにはセーラー・ムーンとセーラー・マーズの二人が立っていた。

「夢見ちゃん!」

まだ夢見の意識が残っているのか、レイの声に妖魔は苦しそうにう

めき声をあげる。けれど、それも長くは続かなかった。妖魔はもう一度咆哮はあげると、だらりと腕を下げた。瞳に残っていた光も完全に消える。

「脆いものだな」

そんな言葉と共に、一人の男が妖魔の影から現れた。

「あなたは・・・!」

「クンツァイト!」

マーズは今にも噛み付きそうな勢いで突っかかる。

「夢見ちゃんに何をしたの!」

「たいしたことはしていないさ。俺はただ夢が絶望に変わるよう、背中を押したまでのもの」

「どういうこと!」

「絶望ほど、闇のエネルギーを生み出すものはない。絶望と夢とは表裏一体。夢見る人間の心など脆いもの。少し揺さぶればこの通りだ」  
そう言うと、クンツァイトは右手を開いた。ポワッと黒い炎のようなものが浮かび上がる。

「許せない」

「許せない。夢見る女の子の気持ちをこんな風に踏みにじるなんて、許せない!」

怒る戦士達にかまわず、クンツァイトはあざ笑うように言った。

「まあ、せいぜいほざくんだな。エネルギーは手に入れた。もう、ここには用はない」

「待ちなさい!」

追いかけてようとする二人の前に妖魔が立ちふさがる。

「お前達の相手など、こいつで十分。行け、ドリーム!」

クンツァイトが命令すると、妖魔の叫び声があたりに響きわたった。

「ぐああああ!」

「夢見ちゃん!」

妖魔はマーズの声に反応し、まっすぐと彼女に飛び掛っていく。

「マーズ！」

その様子にクンツアイトはニヤリとすると、スッと消えた。マーズは紙一重で、妖魔の攻撃を避ける。

「夢見ちゃん！」

マーズはもう一度彼女の名を呼ぶが、妖魔はただ奇声をあげるだけだ。もう声は聞こえていないらしい。マーズは下唇を噛み締め、しっかりと妖魔を見据えた。妖魔の姿に夢見の姿が重なる。

『夢見ちゃん、私、信じているから』

『夢見ちゃんが絵に懸ける想い。そんな簡単に消えてしまうものじゃないって！』

接近していた状態から、マーズは大きく飛びのき、間を取った。そして凜と響く、炎の戦士の声。

「マーズ・フレイム・スナイパー！！」

マーズの必殺技が妖魔を貫いた。苦しむもがく妖魔。

「セーラー・ムーン！」

「わかってる」

マーズの声にセーラー・ムーンは右手に集中する。が、妖魔が振り回した腕が彼女を掠りそうになる。

「キヤッ！」

セーラー・ムーンがよろけた。それをチャンスと、マーズの攻撃からようやく立て直した妖魔が、腕を振りかぶった。

「セーラー・ムーン！」

マーズの悲鳴。その時妖魔の動きが止まった。見ると、腕にバラが刺さっている。そして近くの木陰から、タキシード仮面が颯爽と現れた。

「明日を夢見る権利は、誰にだってあるも。それを踏みにじる悪夢は、この私が許さん！」

「タキシード仮面さま！」

妖魔はバラにひるみ、動けずにいる。

「今だ、セーラー・ムーン！」

「はい！」

セーラー・ムーンは力強く答えた。右手をかざすと、そこにムーン・パワー・ティアルが現れる。以前の戦いで壊れてしまったステッキであったが、そんな様子は感じさせずセーラー・ムーンの手の中にスツと納まる。そして彼女はムーン・パワー・ティアルを掲げた。

「シルバームーン・クリスタル・パワー・キッス！」

光がどんどん集まり、あたりは温かい光に包まれた。妖魔は悲鳴をあげると、再び夢見の姿にもどった。力なく倒れる彼女の身体を、マーズがさつと受け止める。その様子にセーラー・ムーンはほっとしたように、息をついた。

「よくやったな、セーラー・ムーン。君はこの子を救ったんだ」

タキシード仮面は優しく、セーラー・ムーンに語り掛けた。

「タキシード仮面様・・・」

「さらばだ。また、会おう」

タキシード仮面はそつと微笑むと、マントを翻し、その場を去っていた。

何かが見えたような気がした。温かい光の中に立っている、あの人。綺麗・・・。あれは、天使・・・？

「夢見ちゃん、夢見ちゃん！」

私の名前。誰かが私を呼んでいる。起きなきゃ。起きなきゃ。起きなきゃ。

「夢見ちゃん！」

目をあけると、そこには心配そうに私を見つめる、レイさんの顔があった。レイさんの肩越しに、うさぎさんも覗き込んでいる。

「レイ・・・さん？それにうさぎさん？」

「良かった。気がついて」

「あれ、私。どうしたんだっけ」

なんだか頭がボンヤリして、はつきりしない。一緒に外に出てきた事までは覚えているけど・・・その後、どうしたんだっけ？思い出せない。でも・・・何かすごく綺麗なものを見たような気が・・・。

そこまで考えると、夢見は思わず起き上がっていた。

「レイさん！私、もう一度がんばってみる。絵、描いてみる！」

「夢見ちゃん・・・」

「私、天使を見たんだ。すごく綺麗な天使を。もう一度描きたい。あの天使を描いてみたい！」

レイは夢見の突然の言葉に驚きながらも微笑んだ。また描きたい。そう言ってくれただけで十分。

「ねえ、レイさん。」

そんな事を考えていると、夢見が再び声をかけてきた。

「なーに？」

夢見は少し照れた様子で言葉を続ける。

「私の怪我が治ったら、レイさん、モデルになってくれる？うさぎさんも！」

「もちろん、いいわよ。ねっ、うさぎ？」

そう言って、うさぎの方へ振り向くと、彼女はいたずらっぽく答えた。

「綺麗に描いてくれなきゃ、だめよ？」

「うん！」

そして三人で顔を見合わせ、自然と一緒に笑い出した。

「すっかり遅くなっちゃったわね」

病院を後にすると、すでにあたりは夕方だった。

「でも良かった。夢見ちゃんに会えて」

嬉しそうに話すうさぎを見ていて、私も笑顔になる。『夢見ちゃん』



とうさぎ。不思議な縁だ。

「そうね」

そう答え、道を歩いていると、うさぎが急に立ち止まり、大声を上げた。

「あああああああああ！！」

「ど、どうしたのよ、いきなり」

「ママにお使い頼まれていたんだ〜！レイちゃん、またね〜」

慌てて駆けていくうさぎの後ろ姿を見送りながら、私は苦笑した。

「まったく・・・」

歩き出そうと足を踏み出した時、ふと頭に何かが引つかかった。私も何か、忘れているような気がする。

「あれ・・・？私も何か用事があったような気が・・・」

立ち止まり、腕を組み、そして考える。でも、思い当たらない。

「まっ、いつか。私も帰ろうっ」と

一方、その頃。

「雄一郎・・・」

「・・・はい」

「レイ、遅いな」

「・・・はい」



## 第二十話 恋は流れ星と共に？まこちゃんの先輩現る？！

「美奈子ちゃん、まだ行くの？」

まこことが根をあげるのも、不思議ではない。手に一杯の買い物物の戦利品。自分の物が混ざっていないわけではなかったが、ほとんどが美奈子が買ったもの。

「もっちゃん。今日は一日付き合ってもらっわよ、ま・こ・ちゃん」  
機嫌よく、鼻歌まじりに返って来る返事に、まことは苦笑した。今日は美奈子と二人でシヨツピングにきていた。最初の内はそれぞれ自分の物を持っていたが、美奈子の戦利品がかなり増えてきたため『少し持とうか？』と聞いたところ、知らぬ間にまこことが全面的に荷物持ちになっていたわけだ。

「別に重いわけじゃないし・・・まっいつか」

「まこちゃん！見てみて、この服可愛い」

見ると美奈子は少し先のショーウィンドウの前で立ち止まり、手招きしている。

「やれやれ」

美奈子の所へ急ぐと歩き出した時、ふと呼び止められた。

「まことじゃないか！」

「えっ？」

振り返るとそこには眼がねをかけた男性が立っていた。思わず手に持っていた紙袋がストンと落ちる。

「やっぱり、まことだ」

「先輩・・・」

「ひさしぶりだね、まこと」

「まこちゃん！見てみて、この服可愛い」

まこちゃんを手招きして、あたしはもう一度ショーウィンドウに目をやった。このスカート、いいな。これにあのブラウスとさつき

買ったアクセサリをつけて……。そんな事を考えていると、あたしはまこちゃんがいくら待ってもこない事に気づいた。

「まこちゃん？」

振り向くと、まこちゃんは男性と話をしていた。

「あら、かつこいい」

あたしはいたずらをしたい衝動にかられ、まこちゃんに後ろから静かに近づいた。

「ま〜こ〜ちゃん〜？」

「う、うわっ美奈子ちゃん?!」

あたしの突然の登場に、飛び上がりそうになるほど驚く彼女。まこちゃんには珍しく、かなり動揺している。微かだが頬を紅く染めているような気さえもする。

「だ〜れ〜?まこちゃんのお知り合い？」

「えっと、その、昔、学校で一緒だった、二挺木先輩」

「二挺木正也（まこと せいや）です。よろしく」

「まこちゃんの友達の、愛野美奈子です。はじめまして〜」

あたしは素早くまこちゃんを振り向かせ、相手に聞こえないようにこっそりと聞いた。

「まこちゃん、先輩って『あの』？」

「・・・うん」

頬を染め、照れたように頷くまこちゃん。

「やっぱり〜」

仲間内の中でもかなり惚れっばいまこちゃん。それはもう周知の事実。そしてその時いつも飛び出すのが、『昔、失恋した先輩に似ている』だった。そしてその先輩が、目の前に立っている人物らしかった。

こそこそと話をしていると、その二挺木が声をかけてきた。

「どうだい、久しぶりに会ったんだ。お茶でもどうだい?そっちのお友達も一緒に」

「・・・はい」

まことは小さくうなずく。あたしは「こそとばかり、声のトーンをあげた。」

「ごつめくん、まこちゃん。あたし、用事があるんだった。二人で楽しんできて」

「そうか、残念だな」

「み、美奈子ちゃん？」

あたしに用事がない事を知っているまこちゃんは、戸惑ったようにあたしの名前を呼ぶ。あたしはそつと彼女の耳にささやいた。

「ふふ、せつかくの再会、邪魔するのは悪いわ」

そしてあたしの戦利品をうけとり、まこちゃんの背中をポンっと叩いた。

「まこちゃん、また明日ね」

あたしは手をふり、二人と別れた。歩きながらも、ニンマリとした笑みが口元に広がる。

「ウフフ。これは、スクープだね。みんなに知らせなくちゃ！」

「みんな、スクープよ！大スクープ！」

そしていつものようにクラウンへと足を伸ばすと、いつものメンバーが集まっていた。うさぎちゃんは三人で出かけていたのか、衛さんにちびうさちゃんもいる。

「騒々しいわね、どうしたのよ、そんなに興奮して」

レイちゃんのはんびりとコーヒーへと手を伸ばした。

「まこちゃんの先輩が現れたのよー！」

「まこちゃんの先輩って・・・」

亜美ちゃんは小首をかしげると、うさぎちゃんが祈るしぐさをしながら、今話題になっている人物の真似をした。

「『あの人の眉毛の形、昔失恋した先輩にそっくり』」

「・・・の、『あの』先輩？」

レイちゃんがうさぎちゃんを指差しながら、聞いてきた。



「そうよ、無理強いはいけないわ」

亜美も二人を諭すように言う。

「でも、隠し事もいけないと思うの」

淡々と続ける亜美の言葉に、あたりがさっと寒くなった。

「亜美ちゃんが一番こわい……」

「えっ？あつ？私……」

ちびうさの一言に亜美は顔を赤らめ、読んでいた参考書の中へと沈む。

「あははは、こりゃまいったな。どうせ美奈子ちゃんでしょうばらしたの」

今まで黙っていたまことが苦笑しながら席についた。

「だつてえ〜。こんな面白い事、黙っているなんてつまらないじゃない？」

まことの言葉に美奈子はまるで子供のように口を曲げた。

「まっいいんだけどさ。あたしもちよつと皆に話を聞いてもらいたくて、ここに来たんだからさ」

そんなまことの言葉に、仲間たちの視線が集まる。

「美奈子ちゃんがどこまで話したかわからないけど、二挺木先輩（なつむぎせんぱい）とは、十番中学に転校してくる前の学校で一緒だったんだ」

「ちよつと待つて、まこちゃん」

ふと、亜美が何かに気づいたのか、まことをさえぎった。

「二挺木……先輩つてもしかして、私達より二学年上の二挺木正也くん？」

「へえー亜美ちゃん、なんで知ってるの？」

当然の疑問に美奈子が質問してくる。

「全国模試で、いつもトップのほうで名前を見かけていて……」  
集中する視線に小さくなりながら、亜美はポツリと呟いた。

「さっすが亜美ちゃん」

「見つける場所が違っわ〜」

「ほえ〜。まこちゃんの先輩ってそんな頭いいんだ〜」

仲間たちはそれぞれ感想を述べる。そんな様子にまことは少し照れながらも微笑んだ。

「そうそう、学校でも有名だね。でもどこか寂しげな雰囲気をしていて、そこに惹かれたんだけどさ・・・」

ニンマリと笑う仲間たちの表情に、自分が何を喋っているのか自覚したのか、まことは思わず赤くなった。

「ってそんな事はどうでもいいの！でっ今は大学の関係で、しばらくこの街にいたいなの」

「うんうん」

「それで今晚、手伝っている天文台で星見に来ないかって誘われて・・・」

すると、まことは突然手を合わせ、頭を下げた。

「誰か一緒について来てくれない？やっぱり、あたし一人で行くのはなんだか気まずくて・・・」

「天文台？」

「キヤー！それってデートのお誘いじゃない〜」

「そんなんじゃないって。だってあたし、昔振られているんだよ？」

「昔は昔。今は今。チャンスよ、まこちゃん！」

「ははは・・・」

「でも、星の下でデートなんて憧れるわね〜」

今度は亜美だ。想像しているのか、どこか遠くを見ている。

「亜美ちゃんまで。ほんと、そんなんじゃないんだから」

「じゃあ、な・ん・で、一人で行くのが気まずいのかしら？ま・こ・ちゃん？」

「もう、みんなしてあんまりいじめないですよ〜」

盛り上がるみんなの横でうさぎは小首をかしげていた。そして隣に座る衛に声をかける。

「ねえ、まもちゃん。天文台ってもしかして・・・」

「そうかもな」



「まこちゃん、その天文台って東京湾天文台？」

「うん、そうだけど」

まことの答えに今度はちびうさが加わる。

「じゃあ、プーと一緒にだ」

「えっ？」

「実は俺達、せつなに誘われて、天文台のほうへ遊びに行く予定なんだ」

「だから、まこちゃん、一人じゃないよ」

「ありがとーうさぎちゃん！」

まことは本当に嬉しそうに喜んだ。そんな様子に黙っていないのが残りの面々。

「そついえば、もうすぐ流星群がみれるらしいわよね」

「まこちゃんの先輩、気になるな」

「という事で・・・」

「みんなで遊びに来ました」

数時間後に扉を開けたせつなの目を丸くさせる事になる。

「ご迷惑でしたでしょうか・・・」

小さくなる亜美に、せつなはすぐに微笑む。

「いいえ、ようこそ東京湾天文台へ」

「おじゃまします」

「プー、こんばんわ！」

「こんばんわ、スモール・レディ」

奥に行くときでなにかパソコンに向かっている青年が座っていた。メンバーに気づくと、青年は立ち上がった。

「彼は最近仕事を手伝ってもらっている二挺木正也君」

「ハンサム」

「確かにかっこいい」

「でしょー!!」

予想外の反応に二挺木はキョトンとする。

「あら、みなさんお知り合い？」

「まこちゃんの中学の頃の先輩なんだって」

ちびうさの言葉にせつなの視線はまことへと移る。

「なるほど」

「せつなさんまで、なんでそれで納得するんですか〜！」

顔を赤くしながらアタフタとするまことに、場は笑いに包まれた。

「なんだかわからないけど、みんな、まことの友達なんだね。二挺木正也です。よろしく」

しばらくそれぞれ観測を楽しんでいると、二挺木が立ち上がった。

「せつなさん、俺、お茶でもいれてきます」

「ありがとう、お願いね」

「あたしも手伝うよ」

二挺木の言葉にまことも立ち上がった。

「私も・・・」と言い出しそうな亜美を美奈子がこことぞと大声で押し付ける。

「お願いね、まこちゃん」

「そつちにポットがあるから、お願いできるかな？ティーバックは左の棚にあるから」

「はい」

まことに場所を教え、二挺木は他の棚からマグカップを出していく。手伝うといっても、用意をしまえば、お湯が沸くまで待つだけだ。まことは寄りかかりながら二挺木がテーブルにカップを並べていくのを見守っていた。

「まこと、変わったな」

「えっ？そうですか？」

「変わった。中学の頃より柔らかくなった」

「そう、かな？」

「うん」

満足そうに頷く二挺木にまことは少し顔を赤らめた。

「そういえば、何かいいことありました？」

「えっ？」

思いがけない言葉だったのか、二挺木が振り返った。

「どうしてかい？」

「昔からの癖ですよ、いいことがあると、腕時計をよく触りますよね？」

「えっ？あっ？」

振り返り、自分の腕時計を触っている自分に気づき、二挺木は笑い出した。

「もしかして、本当にあたりました？」

「よく見ているね。正解。実は論文が認められてアメリカに留学することになったんだ。急だけど来週に一度向こうに飛ぶんだ」

「すごい。先輩、おめでとございます！」

喜ぶまことの姿に二挺木は少し照れながら笑った。

「ありがとう、まこと。君のおかげだ」

「えっ？」

ちょうどポットにお湯を入れていたまことは聞き取れず、振り返った。

「俺は・・・」

『つかまえた』

マグカップが二挺木の手を離れ、床に落ちた。ガシャンと音を立て、床に破片が散らばる。

「ああああああ！！！！」

「先輩！」

胸を掴み、苦しむ二挺木に駆け寄るまことだったが、人間とは思えない力で突き飛ばされる。

「キヤッ！」

壁に背中をたたきつけられ、目の前が一瞬真っ暗になる。

「先輩……」

呼ばれた相手は、その瞬間、黒いエネルギーに包まれた。咆哮と共にそのもやは晴れ、そこには禍々しい姿をした妖魔が姿を現した。

「まこちゃん！」

「二挺木君！」

騒ぎに気がついたのか、せつなとうさぎがキッチンに入ってきた。

「妖魔?!」

「まこちゃん！」

二人の乱入者に妖魔は窓を突き破り、中庭へと飛び出した。後を追うようにせつなを身を翻す。

「追わなきゃ……」

ふらつきながら無理やり立ち上がるまことに、駆け寄った。

「そんな身体で無理しないで。あたし達に任せて！」

「あたしは大丈夫だよ、うさぎちゃん」

心配そうにじつと彼女の顔を見つめるうさぎに、まことは微笑んだ。「それに許せないんだ。夢に向かってあんな生き生きとしている先輩は中学じゃ見たこと無かった。そんな先輩の夢をこんな風にめっちゃくちやにしようだなんて……!」

その瞬間、外から鈍い音が聞こえてくる。

「考えている暇はないよ、うさぎちゃん!変身だ!」

「うん!」

まことと頷き合うと、うさぎは自分のコンパクトを掲げた。

「ムーン・エターナル!」

「ジュピター・クリスタル・パワー!」

二人の声が重なった。

「メイクアップ!」「メイクアップ!」

「マーズ、大丈夫?」

「平気、平気。でもマーキュリーが」

妖魔の攻撃を受けてしまったのか、左腕を押さえている。

「私の事は気にしないで」

「手強いですね・・・」

ブルートもしっかりとガーネット・ロッドを握り締める。

「みんな！」

そこへセーラー・ムーンとジュピターが駆けてきた。

「遅いわよ」

「ごめんごめん」

「二人共、気をつけて。今まで戦ってきた妖魔よりかなり強いわ」

マーキュリーが言い終える前に、妖魔の攻撃が襲い掛かってくる。

飛びのくセーラー戦士達。

「長引くと不利だね。あたしがひきつける」

「ジュピター、待つて！」

マーキュリーが止める前に、ジュピターは飛び出した。突然現れた

ジュピターに対してひるむこともなく、妖魔は攻撃を乱発する。

「キャッ」

「ジュピター！」

攻撃がジュピターをかする。けれど彼女はひるむことなく、ボロボ

ロになりながらも地面を蹴った。

「スパークリング・ワイド・プレッシャー！！」

彼女の電撃は妖魔に命中し、妖魔は悲鳴を上げる。

「ひるんだ！」

「今よ！セーラー・ムーン！」

「うん！」

セーラー・ムーンは力強く答えた。右手をかざすと、そこにムーン・

パワー・ティアルがスツと手の中に納まった。そして彼女はムーン・

パワー・ティアルを掲げる。

「シルバームーン・クリスタル・パワー・キッス！」

ティアルは輝きを増し、あたりは優しい光に包まれた。妖魔は悲鳴をあげると、再び二挺木の姿にもどり、ぐったりと倒れた。その様子にジュピターはほっとしたように、ペタンと座り込む。

「ジュピター！」

セーラー・ムーンが駆け寄り、ボロボロの姿の彼女に肩をかした。

他の仲間たちも寄ってくる。

「まこちゃん、無茶しすぎ」

「ごめん」

まるで怒られた子供のように小さくなるジュピター。

「まったく」

そんな様子にしようがないな、とセーラー・ムーンは微笑んだ。

『変わった。中学の頃より柔らかくなった』

ふと、さつき先輩と交わっていた会話が蘇る。

「そっか・・・みんなのお陰か・・・」

「ジュピター？」

「ううん。なんでもない」

そして後日。場面は変わって、飛行場にまことは来ていた。目の前には荷物を持った二挺木が立っている。

「ありがとう、今日は見送りにまで来てくれて」

「別に・・・」

照れるまことに、二挺木は微笑むと、空を見上げた。一面に広がる青空。気持ち良いそよ風が前髪をなびかせる。

「まこと、実は俺、ずっと謝りたかったんだ」

「えっ？」

「あの時、俺は君にずいぶん酷い事を言ってしまった。でも謝る前に君は転校してしまった」

「あっ・・・」

二挺木の言葉に昔の事が蘇る。そう、まことが二挺木に告白したその日の事。

『いい加減にしてくれないかな。迷惑なんだよ』

『そんな・・・』

『それに、このお弁当も君の仕業なんだろう？なんだい、母親いな僕にそんなに自分の幸せを見せ付けたいのかい？』

その言葉にまことはカチンときたのだった。

『ふざけるな！あたしは、先輩に食べてもらいたかったから、作っただけです。それ以上でも、それ以下でもない！自分一人だけが不幸のどん底にいるなんて思わないで！』

「すまなかつた」

「先輩・・・」

「初めてだったんだ。あんな風に言われたのは。まるで殴られたよ  
うな気分だったよ」

「あ、あたし・・・、えっと」

慌てるまことに、二挺木はクスツと笑った。

「おかげで目が覚めた。だからここまで来れたんだ」

「先輩・・・」

「なあ、まこと。もし・・・」

その時、飛行機が離陸する騒音で二挺木の言葉がかき消された。

「先輩、今なんて？」

音が収まり、まことは聞き返したが二挺木は首を振りながら答えた。

「あつ、いや。いいんだ」

「先輩！気になります」

「あつそろそろゲートに行かなくちゃな」

「先輩！」

口を曲げるまことに二挺木は微笑んだ。

「まこと。君にも夢があるんだろう？俺もがんばる。お互い、がんばる。」

ばるう？」

そう言つて彼は手を差し出してきた。

「はい！」

「・・・あの時、先輩なんて言つたのかな？」

ボンヤリと空を見上げながら、まことは呟いた。

「なぐに、一人でたそがれちゃっているのよ。ま・こ・ちゃん？」

「美奈子ちゃん！」

「みんな、待っているわよ」

美奈子が手を差し出してきた。握り返すと、彼女は勢い良くまことを立ち上がらせる。

「行こ？」

「うん！」



第二十話 恋は流れ星と共に？まこちゃんの先輩現る？！（後書き）

亜美：『クシユン』

まこと：『あれ？亜美ちゃん、風邪？』

レイ：『やっぱり、亜美ちゃんは出来が違っわね〜』

うさぎ：『レイちゃん、どうしてそこであたしを見るのよ』

レイ：『よく言うじゃない？【なんとか】は風邪ひかないって』

うさぎ：『ひっど〜い！』

美奈子：『はいはい、ケンカはほどほどにね』

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

風邪にご用心？狙われた亜美』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第二十一話 風邪にご用心？狙われた亜美

「ねえ、みんな聞いた？十番商店街に新しい喫茶店できたんだって」

ある日の下校中のことである。いつもの面々は、またいつも通りみんな下校中だった。

そしてこれもまたいつも通り、お喋りで盛り上がる。今日最初の話題は美奈子が切り出した。

「あつ知ってる。たしか喫茶アロマだよね」

「そうそう。今日みんなで行かない？」

レイは何かに気づいたように目を細める。

「美奈子ちゃん？どうせ、またかっこいい人がいるとか、なんでしよう？」

「そう！サトシさんって言うんだけどね」

そんな会話に加わらず、亜美だけはなんだかボンヤリとしていた。心なしか、顔色が悪いようにも見える。

その事に気づいたまことは、亜美に話を振った。

「大丈夫かい、亜美ちゃん？」

「ケホケホ」

返事の代わりに咳が戻ってくる。前を歩いていたうさぎと美奈子が振り返った。

「亜美ちゃん、風邪？」

「大丈夫？」

心配する仲間達に、『私は大丈夫よ』、そう答えようとしたときだった。盛大に咳き込み、亜美は足をもつらせた。

「亜美ちゃん！」

まことが咄嗟に支える。

「全然、大丈夫じゃないじゃないか」

「たいしたことないわ」

説得力のない返事にまことは不満そうに眉をひそめる。そして一瞬考え・・・

「キヤっ?!」

足に地面の感覚がいきなりなくなって、亜美は小さく悲鳴をあげた。亜美の手からカバンが滑り落ちる。

「まこちゃん！」

顔を真っ赤にして、その元凶へと抗議する。

「下ろして、まこちゃん、自分で歩けるわ」

「まこちゃん、さっすが」

事は簡単だ。まことが足取りがしっかりしない亜美を軽々と抱え挙げたのだ。亜美は俗に言う『お姫様だっこ』の形で、まことの腕のなかに治まっている。その姿でも絵になっているのが、まことらしいと言えるかも知れない。当のまことはケロッとした顔で亜美の抗議を跳ね除ける。

「そんなフラフラな足でかい？ダメダメ。このほうが早いし。ねっ

？うさぎちゃん、あたし達のカバン持ってくれる？」

「うん、わかった」

うさぎはニヤニヤしながら、亜美のカバンを拾い上げ、まことのカバンを受け取った。

「うさぎちゃんまで・・・」

「ホラホラ、病人はおとなしくいう事を聞く！」

美奈子の追い討ちで、抗議するのは諦めたのか、亜美は小さくなった。

「じゃあ、うさぎ、まこちゃん。亜美ちゃんの事お願いね。私達も

後から行くから」

「うん！」

「ああ、まかしておいて」

「・・・もっ、みんなして・・・」

二人と別れ、小さく拗ねる亜美をうさぎは優しくなだめた。

「だったら、早く元気にならなくちゃね、亜美ちゃん」

「元気になったら、文句でもなんでも聞いてあげるからさ」

「もっ」

寒気を感じる身体でも二人の言葉はすごく温かく、風邪の熱とはまた別に、亜美の頬を赤く染めた。

マンションに入っていく、うさぎ、亜美そしてまことの姿を車の中から見つめていると、みちるが聞いてきた。

「でっ、どうするの、はるか？」

「どうしようか？」

風のざわめきを追ってきたら、ここへとたどり着いた。

「まさか、今回のターゲットが亜美ちゃんとはね」

そうなのだ。近くに車を止め待っていると、あまり立たない内に三人が現れた。

そして感じた。風のざわめきの中心に亜美がいる。そうして、さっきのみちるの問いに戻るのだ。

「でっ、どうするの？」

もう一度みちるが聞いてきた。答えあぐねていると、今まで黙っていたはたるが乗り出してきた。

「大丈夫ですよ」

「えっ？」

「うさぎさんに、まことさんが一緒だったじゃないですか。大丈夫ですよ。亜美さんは一人じゃない」

「だっ、そうよ?」

みちるは楽しむかのように付け加えた。

「そうだな」

僕はまたエンジンをかけた。

「僕達は、僕達のやるべきことを優先させよう」

場面は変わり、亜美の部屋。うさぎがベッドの脇に座っていると、まことが部屋に入ってきた。

「うさぎちゃん、どうだい? 亜美ちゃんの様子」

「お薬が効いてきたのか、眠っちゃった」

自然と二人の視線はベットで眠る彼女へと向かう。規則正しい寝息が聞こえてくる。

「そう。うさぎちゃん、もう少し診てもらって構わないかな? あたし、ちよつと買い物にいつてくる」

不思議そうに見るうさぎに、まことは少し照れたようにわらった。  
「おかゆでも作ろうかなくて。冷蔵庫の中、勝手に見ちゃったんだけど、材料そろってなくて。鍵は亜美ちゃんの借りていくから、もし亜美ちゃん起きたらそう伝えておいて」

「わかった。まこちゃん、行ってらっしゃい」

笑顔で見送ると、ドアがパタンと閉まった。少し遅れて玄関のしまる音が聞こえる。

うさぎは立ち上がると、ゆっくりと部屋を見回した。亜美らしく、部屋は綺麗に整理整頓されている。

視線は本棚に向かう。タイトルさえ読めない本も多く、うさぎは苦笑するしかなかった。

「亜美ちゃんらしいや」

そんな中に、見覚えのある本もあった。

「あっ『月夜の天馬』」

何気なく、棚から取り出し、本を手に取った。表紙に描かれている

ペガサスがすごく神秘的だ。

まこちゃんの友達が書いた本なんだよね。そういえば、この前、まこちゃんが三作目を本人から貰ったって嬉しそうに話していたっけ。思考はその出来事へとさかのぼる。ペガサスをめぐっての戦い。そして・・・クイーン・ネヘレニア。彼女の顔に今の敵であるクイーン・ベリルの顔が重なり、心がうずいた。

「あたしは・・・」

「うさぎちゃん・・・」

思いにふけっているうさぎを、亜美の声が現実へ引き戻した。

「あつ、亜美ちゃん、起きた？大丈夫？」

そういうとうさぎは『月夜の天馬』を棚に戻し、ベッドの脇へと戻った。

「うん、だいぶ楽になったわ。ごめんね、心配かけて」

「気にしないで」

うさぎ一人しか見えないことを疑問に思ったのか、亜美は不思議そうな顔で聞いてきた。

「まこちゃんは・・・？」

「ちよつと買い物行ってくるって」

そうとうさぎが答えると同時にチャイムがなった。

「あつレイちゃん達かな？ちよつと出てくるね」

そう言っつて、うさぎは立ち上がり、玄関へと向かう。

「あつまこちゃんも」

玄関に行くと、ちよつと美奈子、レイ、まこが入ってくるころだった。

「ちよつと、外で会ったんだ」

「うさぎ、亜美ちゃんの様子は？」

「さっき・・・」

『起きたところ』と続けようとした時だった。

「キヤーー!!」

「亜美ちゃん?!」

亜美の悲鳴に、四人はなだれ込むかの様に彼女の部屋に入った。空間に黒い穴が開き、そこから伸びる手が亜美を引きずり込もうとしている。

「亜美ちゃん!」

真つ先に動いたのはうさぎだった。亜美の右腕を掴む。けれども亜美を引きずり込もうとする力は強く、うさぎも引つ張られる。

「きゃっ」

「うさぎい!」

「うさぎちゃん!」

美奈子、レイ、まことが加勢しようと、うさぎを掴んだ。けれど四人の努力はむなしく、全員暗闇へと引きずり込まれた。

そして空間の穴は閉じ、まるで最初から誰もいなかったかのように、部屋には静けさだけが残された。

「……さぎ……きて……たら」

「ううん……」

「うさぎい! いい加減起きないさい」

ゆっくりと目を開けると、そこにはレイの顔があった。

「あつ……レイちゃん」

「もう、あつレイちゃん、『じゃないわよ」

ボンヤリとした頭がだんだんとはっきりしてくる。

「あ、亜美ちゃんは!」

「わからないわ」

うさぎの問いに近くに立っていた美奈子が答えた。

「気がついたら、あたしたちだけだったんだ」

「探さなきゃ!」

取り乱しそうになっていているうさぎをレイが怒鳴りつけた。

「落ち着きなさい、うさぎ!」

「でも!」

レイは静かに笑うと、うさぎに言い聞かせるようにいった。

「もとからそのつもりよ。だから、まずは落ち着きなさい。あなたが取り乱したって、しょうがないじゃないの。ねっ?」

「・・・うん」

「それにしても・・・ここは一体・・・」

まことは辺りを見回しながら呟いた。

四人は小高い丘の上になつていた。どこか神秘的な雰囲気を漂わせ、クリスタル・トーキョーを彷彿とさせる。けれど、四人は以前にクリスタル・トーキョーを見たことがあった。見覚えのないこの場所は、クリスタル・トーキョーではない。

ふと美奈子が指差す先をみると、湖の辺に青く輝く宮殿があるのが見えた。

「あれは・・・」

不思議そうな顔をする面々の横で、まことが呟いた。

「マリーナ・キャツスル」

「えっ?」

「まこちゃん、今なんて?」

自分でも呟いていたことに気づいていなかったのか、まことは動揺した。

「えっ?あつ。あたし・・・?」

レイが何かに思いついたように叫んだ。

「そうよ!きつとうさぎの時と同じだわ」



「ほえ？あたし？」

「どういうことだい、レイちゃん」

まことが先を促そうとした瞬間だった。

「ゲギャー！！」

「う、うわっ」

「まこちゃん！」

黒い影が茂みから飛び出しまことに掴みかかった。勢いにそのままに押し倒され、まことは転がる。

「このっ・・・！」

けれど、まこともやられたままではない。拳を影に叩き込むと、黒い影は掻き消えた。

美奈子は手を差し伸べ、まことを助け起こす。

「どうやら、話をしている時間はないみたいだね。みんな、宮殿に行ってみよう」

セーラー戦士へと変身し、宮殿にたどり着いた面々だったが、呆然と立ち尽くしていた。

「何、これ・・・」

宮殿は一面氷に包まれていたのだ。

『マーズ、さっき何を言いかけだい？』

『あたしの時と同じと？』

『多分、ここは亜美ちゃんの心の中なのよ。私達は、セーラー・ムーンの心の中で、前世のシルバーミレニウムを見たわ。』

『そしてさっきのジュピターの言った名前』

『えっと、マリーナ・キャッスルかい？』

『そう。無意識の内にでた言葉だったとは思っけど、偶然とは思えないの』

普通ではない様子に、どうしても胸は不安で一杯になる。

「ダメね、これじゃ私の炎でも溶かせない」

マーズが力チ力チに凍った扉を見ながら、悔しそうに呟いた。

「亜美ちゃん……」

「どうしたら……」

その時だった。子供のすすり泣く声が聞こえてきた。

「女の子……?」

「君っ……って、あっ」

ジュピターが声をかけると、女の子は走って行ってしまった。

「ついていってみましょう」

「あれ?行き止まり?」

女の子が消えた先に行くと、そこは行き止まりだった。垣根に囲まれ、進めそうにない。

「待って、ここから抜けられるわ」

ヴィーナスが指差した先には、人一人通れそうな穴があった。

「え〜ここ通るの?」

不満をあげるのは、セーラー・ムーンだ。エターナル・セーラー・ムーンの姿では少し狭そうな穴だ。

「しょうがないでしょ、さっ行くわよ」

「きれい……」

いち早く穴を抜けたジュピターは思わず言葉を失った。そこは中庭だった。やはりここも氷に包まれていたが、中央に構える立派な噴水、そして今は氷の彫刻となってしまうているが、その周りに咲き乱れる花々が神秘的な雰囲気強めていた。

「見てないでジュピターも手伝って」

我に返り、振り返ると、ヴィーナスがセーラー・ムーンを引きずり出そうと奮闘している最中だった。

「あつごめんごめん」

「ほえ、やっと通れた〜」

ようやく穴を突破し、へたり込むセーラー・ムーンにマーズは手を差しのべた。

「休んでいる暇はないわよ。亜美ちゃんを探さなきゃ。ほら」

「ありがとう」

「でも、これからどうしたら・・・」

戦士達が見回している時だった。

「あ、あの子！」

セーラー・ムーンが指差す先には神殿のような建物が建っていた。

その柱の影から先ほどの女の子がこっちを見ている。

「あつ待って！」

こちらが気づいた事に驚くと、彼女は神殿の中へと走っていった。まった。

「行ってみましょう」

神殿に足を踏み入れた瞬間、ぐにやりと空間がゆがんだ。

「きゃっ」

「うわっ」

「なっ」

『あつ、水野さんまた一人で参考書読んでいる』

『いつもテストでトップだから、お高くとまっているのよ』

『やな、感じい〜』

そんなやり取りの後に笑い声が響く。

「これは・・・」

場面はまた変わる。

『こんなものがあるから、まこちゃんは。もうおしまいにして、帰る・・・』

一面真っ白の雪原に立つ、セーラー・ムーン、マーズ、マーキュリーとヴィーナス。

落ち込むムーンに頬を叩く、マーキュリーの姿。

「いや、やめて・・・」

ムーンは座り込み、目を閉じ、耳をふさぐ。

『私は死んだりしないわ』

穏やかに微笑むマーキュリーの姿。そして・・・水の戦士は散った。

他の戦士たちも思わず顔をしかめる。そう、これはダーク・キングダムと北極でDポイントで戦った時の記憶。

それから場面は目まぐるしく変わっていく。今まで戦ってきた、戦いの記憶。

『いつもいつも、私はみんなに足を引っ張ってばかり』

『私が弱いから。何も出来ないから』

『そんな、私は・・・大嫌い』

『消えてしまえばいい』

「亜美ちゃん！」

突然、空間のゆがみ消え、戦士達は広い場所へと出た。

「あれ？」

「ここは？」

「みんな！」

マーズが息を飲み、指差した。氷の中に閉じ込められた亜美が中央に浮かんでいる。

「亜美ちゃん！」

戦士達は迷わず駆け寄った。セーラー・ムーンは右手で氷を叩き、何度も亜美の名を呼ぶ。

「亜美ちゃん！亜美ちゃん！亜美ちゃん！」

しかし氷の中の彼女は反応しない。

「騒がしいと思ったら、ねずみが入り込んでいたとはな」

ふと広間に声が響いた。

「誰?!」

柱の影から人影が現れる。

「あなたは！」

「お前は先輩に取り付いていた妖魔！」

マーズとジュピターの声が重なった。そう、目の前に現れたのは、

ついこの間倒したはずの妖魔だった。

「声などかけても無駄だ。この者の魂はもうすぐ完全に我が手に落ちる」

妖魔がゆっくりと右手を上げた。亜美を閉じ込めたクリスタルはゆっくりと宙へと上がっていく。

「亜美ちゃん！」

セーラー・ムーンが叫ぶ。その様子を横目で悔しそうに見まもるジュピター。隣でヴィーナスは妖魔をにらみつけた。

「あなたはあの時倒したはず！」

彼女の言葉に妖魔はニヤリと笑った。

「ああ、倒されたさ。本体はな」

「本体は・・・？」

その言葉にマーズは息を飲んだ。

「まさか、あの時！」

天文台での戦いの時だった。マーキュリーが一瞬の隙を付かれ、左腕に攻撃を受けてしまったのだ。思い返せば、あの頃から亜美は体調を崩していたような気がする。

「でも！」

ヴィーナスが叫んだ。

「それだけじゃないはずだわ！それだけで、あなたが乗っ取れるほど、亜美ちゃんは弱くない！」

「彼女が万全な状態だったら、俺は乗っ取る前に消されていただろう。」

妖魔はニヤリと笑った。

「それがどうだ。消されるどころが、こうして乗っ取ることが出来るまでに、俺は力をつけた。彼女にそれだけ付け入る隙があったということじゃないのか？」

「そんな・・・」

ここにたどり着くまでの事が蘇ってくる。

「亜美ちゃん！」

「声などかけても無駄だといっただろう？お喋りはもう十分、お前達を倒せばクンツァイト様もお喜びになられよう」

すでに勝ち誇ったかのように妖魔は笑った。

「だから、死ね」

指をならすと同時に激しい吹雪が戦士達に襲い掛かってきた。冷たさを通り越して、痛みが降り注ぐ。

「・・・くそっ」

「何も見えない」

吹雪で妖魔が隠れてしまい、どこにいるのかわからない。吹雪にまじり、妖魔の攻撃まで襲い掛かってくる。

「ははは、どうした。セーラー戦士はそんなものか？」

「セーラー・ムーン！」

ジュピターはセーラームーンを突き飛ばした。

「うわっ」

一身に妖魔の攻撃を身に受け、立っていられず、ジュピターは膝をついた。

「ジュピター！」

「あ、あたしは、大丈夫」

「マーズ・フレイム・スナイパー！」

「ヴィーナス・ラブ・アンド・ビューティ・ショック！」

「ははは、どこ狙っている。俺はこっちだぞ」

妖魔の声はつきつきと場所を変え、聞こえてくる。吹雪の所為で狙いが中々定まらない。

「一体、どうすれば」

肩で息をしているヴィーナスの横で、マーズは唇を噛み締める。

「こんな時に亜美ちゃんがいてくれれば」

「亜美ちゃん！」

「亜美ちゃん」

「無駄だと言ったはずだろ？もうお前達の声など届きはしない」

「亜美ちゃんあああん！！！」

『うさぎちゃん』

『だめよ、お勉強しなきゃ』

『セーラー・ムーン』

『そうね、遊んじゃいませよ？』

『うさぎちゃん、しっかりして』

「なっ？！」

温かい光が広間にあふれ、吹雪が弱くなる。

「セーラー・ムーン……」

光を発しているのは、セーラー・ムーンの銀水晶だった。

「あたし、信じないから。亜美ちゃんがこんなところで負けるなんて、信じないから！」

セーラー・ムーンにマーズが続く。

「そうよ。自信持って、亜美ちゃん！亜美ちゃんは弱くない！」

「足を引つ張っているって言うんだったら、あたしが何度だって引きずりあげてやる!」

「亜美ちゃん、だから負けないで!」

ジュピター、そしてヴィーナスが続く。暖かな光は戦士達を包み込み、その光を増していく。

「や、やめろ」

妖魔は明らかに動揺している。  
ピキッピキッ。

氷の溶ける音がし、妖魔は蒼白な顔で後ろを振り返った。

「そ、そんなバカな」

「セーラー・ムーン、今よ!」

「うん!」

彼女は力強く答え、右手をかざす。そこにはムーン・パワー・ティアル現れ、手の中にスツと納まった。

「シルバームーン・クリスタル・パワー・キッス!」

「ぐぎゃー!」

妖魔の断末魔と共に、あたりに張っていた氷が解けていく。そして戦士達の前には、バツの悪そうな顔をしてパジャマ姿の亜美が立っていた。

「亜美ちゃん!」

「みんな、ありがとう。私、もう大丈夫だから」

亜美は穏やかに微笑み、あたりは光に包まれた。

うさぎが再び気づくと、亜美の部屋に戻っていた。他の三人も気づいたのか、不思議そうに見回す。

「戻ってきたの、あたし達」



「そう、みたいね」

そしてうさぎはベッドに横になる彼女の名前を呼んだ。

「亜美ちゃん！」

彼女はそれに答えるかのように、ゆっくりと起き上がった。微笑み、そして答える。

「うさぎちゃん」

その様子に安心したのか、涙腺が一気に緩み、うさぎは亜美に泣きついた。

「グズっ。亜美ちゃああん！」

「この泣き虫」

トゲある言い方なのはレイだ。

「あれ？そういうレイちゃんだって」

美奈子が泣き笑いしながら彼女をからかうと、レイは顔を赤くしながらそっぽを向いてしまった。

「なっ、泣いてなんていないわよ」

「レイちゃん・・・美奈子ちゃん・・・」

「お帰り、亜美ちゃん」

「まこちゃん・・・」

「みんな、ただいま」

第二十一話 風邪にご用心？狙われた亜美（後書き）

美奈子：『目を閉じると、浮かんでくる風景』

美奈子：『懐かしさにあふれるその場所に、あたしが立っている』

美奈子：『そんな場所に、あなたはいつも一緒にいてくれた』

美奈子：『ねえ、あなたは一体・・・』

美奈子：『誰なの？』

うさぎ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

星に願いを！美奈子の悲恋』

『月の光は、愛のメッセージ』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8955m/>

---

美少女戦士セーラームーン Memories

2011年12月8日02時48分発行